

# 女鑑第貳百五拾號

## 目録



## 社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は（一錢、三錢）一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證券郵送料御送附の事
○未納稅の來書は一切受取り申さゞる事

**定價**

一册 金拾錢
六册三ヶ月分前金五拾七錢
十二册半年分前金壹圓拾錢
廿四册一年分前金貳圓拾錢
全國無郵送料

**廣告料**

五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應す


明治三十五年四月四日印刷
明治三十五年四月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊紫一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 蛭木只雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八）

# 大學部女子講義録

## 新學年開始 會員募集

○本會は女子に必須なる高等の諸學科を掲げたる講義録を發行し現に就學する者の爲めに參考となし若くは家庭にありて研究せんとする者の爲めに通信教授をなす

○本會講義録に依りて修業を終りたる者は卒業期に發刊する講義録に依りて試驗をなし其優等者を拔擢して一定の人員を限り本人の希望に從ひ貸費生として高等の學校に入校せしむ

○本會は隨時女子教育に關する評議員の演説會を開き會員又は會員の紹介を經たるものに限り傍聽を許す

## 教程及講師

●禮法 松岡止波子 ●古事記 祝詞宣命 井上賴圀 ●有職故實 美術史 小杉榲邨

●家政學 下田歌子 ●万葉集 枕草紙 神皇正統記 下田義天類 ●歴史 岡部精一

●大鏡 万壽鏡 宇治拾遺 近世文學史 俳諧 戸川安宅 ●平治 平家 太平記

今泉定介 ●哲學史 波多野精一 ●竹取 保元 土佐日記 古代文學史新体詩學 守

鹽井正男 ●歌學 佐々木信綱 ●文法 鈴木靜 ●圖案 福地復一 ●應用理化學

尾物四郎 ●個人衛生 木村壯介 ●育兒 下田鶴子 ●割烹 石井泰次郎 ●教育學

裁縫 講師撰擇中

○月謝 壹ヶ月金參拾錢束修を要せず○毎月一回發刊三ヶ年終了

○規則書 郵劵二錢封入申込次第送附す

東京市赤阪檜町五番地 帝國女子學會



禮節家々元松岡常盤子刀自



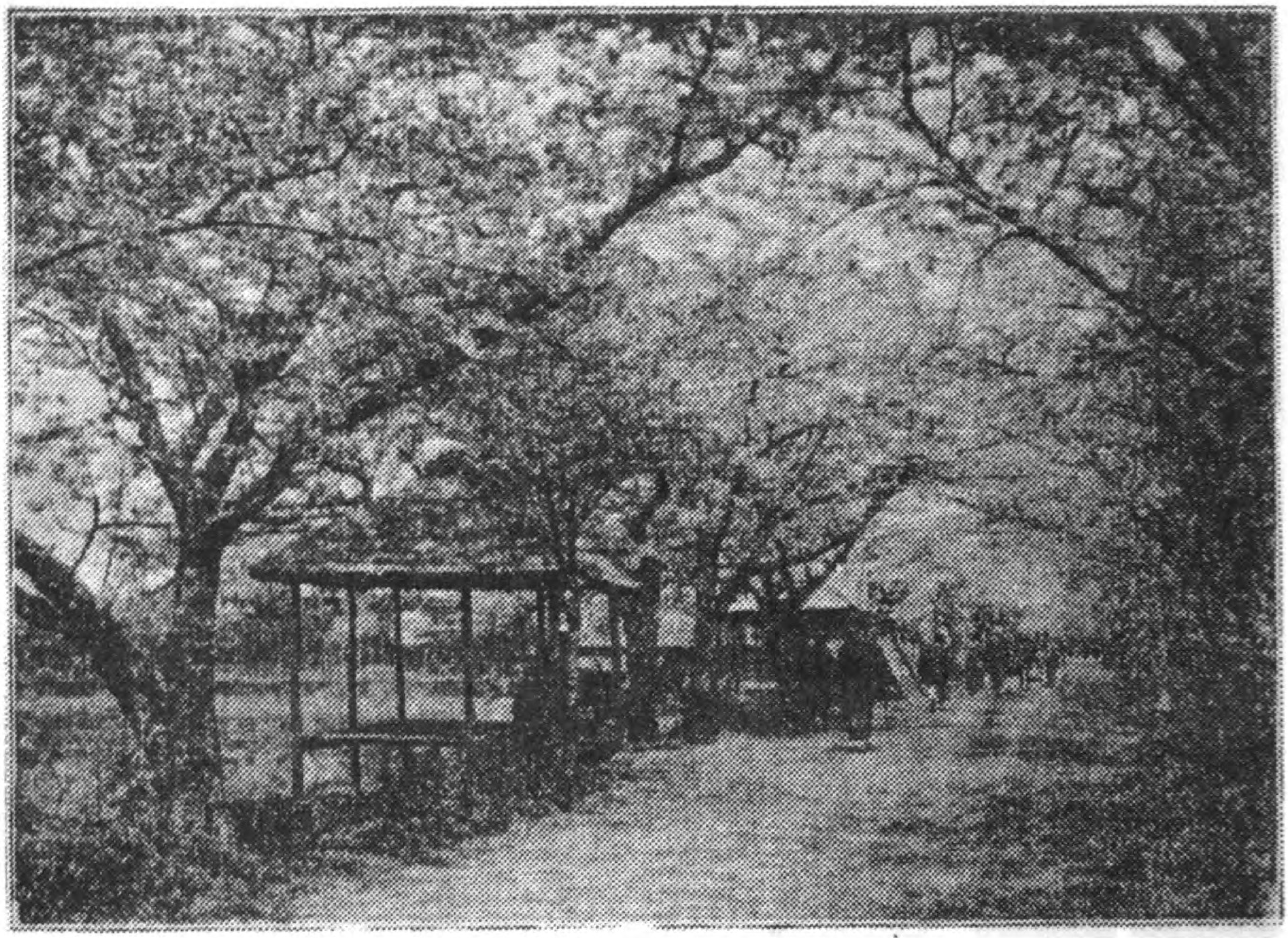
前高等師範學校教諭福田米子刀自



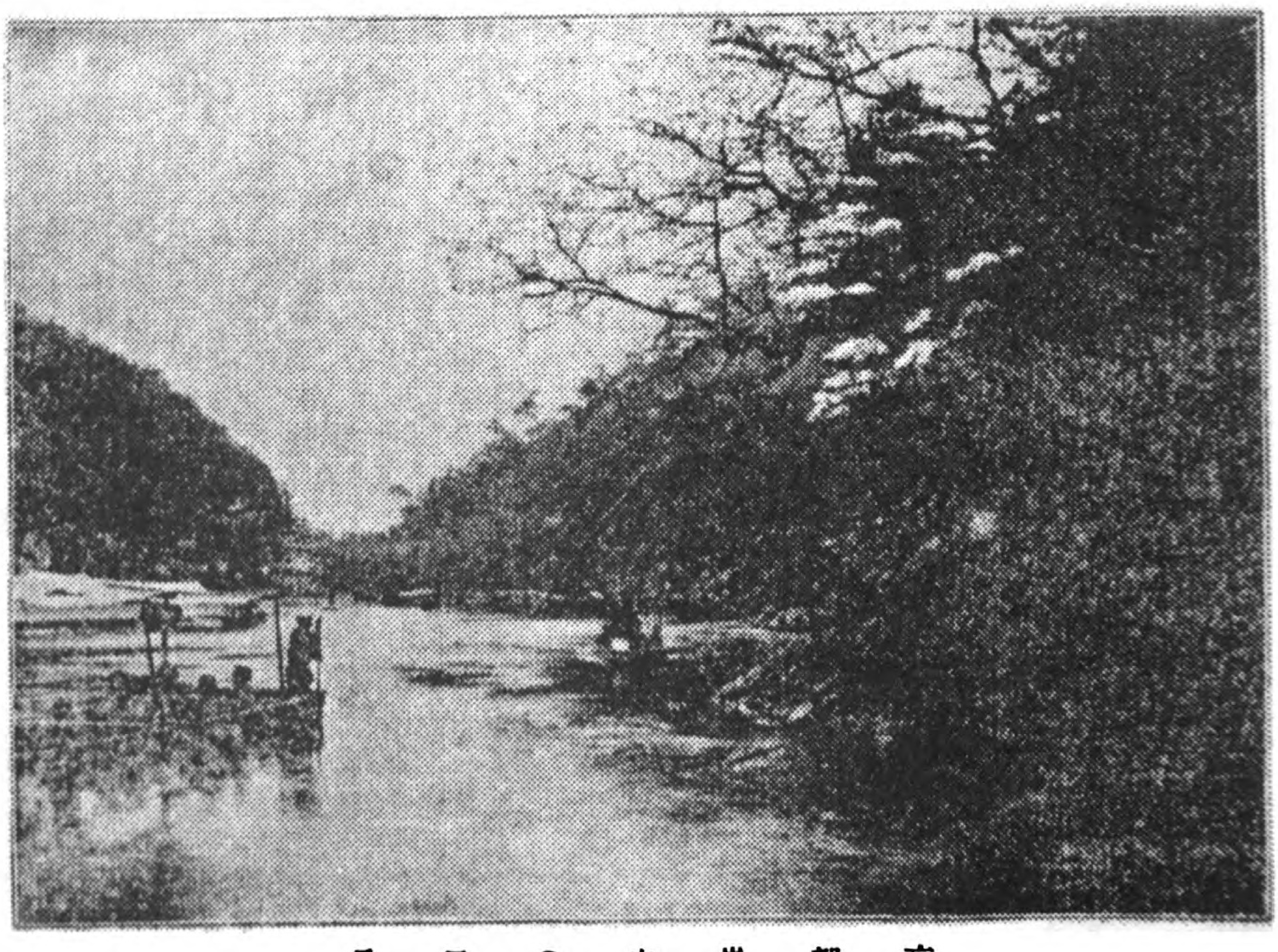
日本女學校教員師岡須賀子刀自



愛敬女學校職員及び卒業生



東京向島の風景



京都嵐山の風景

# 女子のとも

●婦人雜誌界の覇王!!!●女子教育界の羅針盤!!!

三月十八日發行 第百拾一號 **目次**

表紙は青年畫家一條成美君の考案になりて、優美なる少女が新粧靄然として諸嬢に見えたり、詩情愛すべく、謳うべきものとなりぬ。

**口繪** 東京慈惠病院の眞景●誌友の肖像●伊太利中世に於けるゴシック風の建築物●色古丹土人の酋長ヤコブ

**女子の友** 女子教育に對する世上の惑ひに就て、女子高等師範學校教授篠田利英●婦人の生産力、山脇月江

**家庭** 割烹の理(承前)女子高等師範學校教諭藤堂梅軒●裁縫(承前)女子高等師範學校講師神田順子●遊戯數學、和田信二郎

**史傳** 丸山宇米子君(承前)小森松風●佛蘭西革命時代の婦人(其五)渺林園主人

**學藝** 百人一首講義、立花寛篤●倭文の栞、上地信成

**小說** 水仙、とみ子●懸賞當選ゆく水(つゞき)山口すみ子

**漫錄** 西班牙御伽噺、無名三太郎、在文科大學松籟生●浮世觀、稻葉向東●記憶術、下田春與●花の觀察、在早稻田專門學校、櫻芸子

**訪問** 下平上田高等女學校長を訪ふ、記者小森松風

**寄書** 大島の風俗、伊藤のぶ子●家庭に就て、飯塚忠次郎●東都雜觀、林天然、小兒の行爲、綿野りき子等●京都鳥取子守歌、北川よね子●其他落し話課題(女)出題者鈴木秋子、短文寄書等

**雜報** 口繪寫眞版說明●村雲尼公の御美徳●女學校の栞●婦人會の栞●女子言文一致會●私立銀行事務員養成所女子部●內外記事新刊紹介

**文苑** ある人の新宴を詩きて、福羽美靜●野外鷺、黒田清綱●佛前、鈴木靜雄●尋花不定處、小出粲●月前陳思、池邊義象●和歌三首、尾上柴舟●しら机、金子薰園●一株椿、小森松風故郷の夢、海村●こゝろにうかぶまゝ、故矢部富子●兼題歌文、選者落合直文、文學士尾上柴舟兩先生

毎月二回三日十八日發行●定價一冊金拾錢六冊金五拾七錢●毎年二回臨時增刊各一冊金貳拾錢

見!見!見!

●●●●編輯は、小森松風、鈴木秋子の二氏、その衝路に當りて、専ら新世紀の精新なる趣味を皷吹すると共に、一面厭ふべき時代の風潮を排して、超然、女學界を濶歩す。●●●

發行所 東京神田區鎌倉町 電話本局二七二一 東洋社

第五版

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

# 女子處世論

●定價金貳拾錢
●郵稅金四錢
●郵劵代用一割增

三輪田女史の婦人敎育に於ける其の薰陶化導の良範夙に女子敎育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや九版忽ちに賣盡し十版の成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を說く溫厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺く可らざる良書たり本書亦版を重ねて五版に至る冀くは世の婦女達及父兄幷に女子敎育に重大なる責務ある敎育家諸士の一讀を望むや切なり、今左に其の目次の大略を揭げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

## 目次




發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社出版部

# 四月中旬刊行

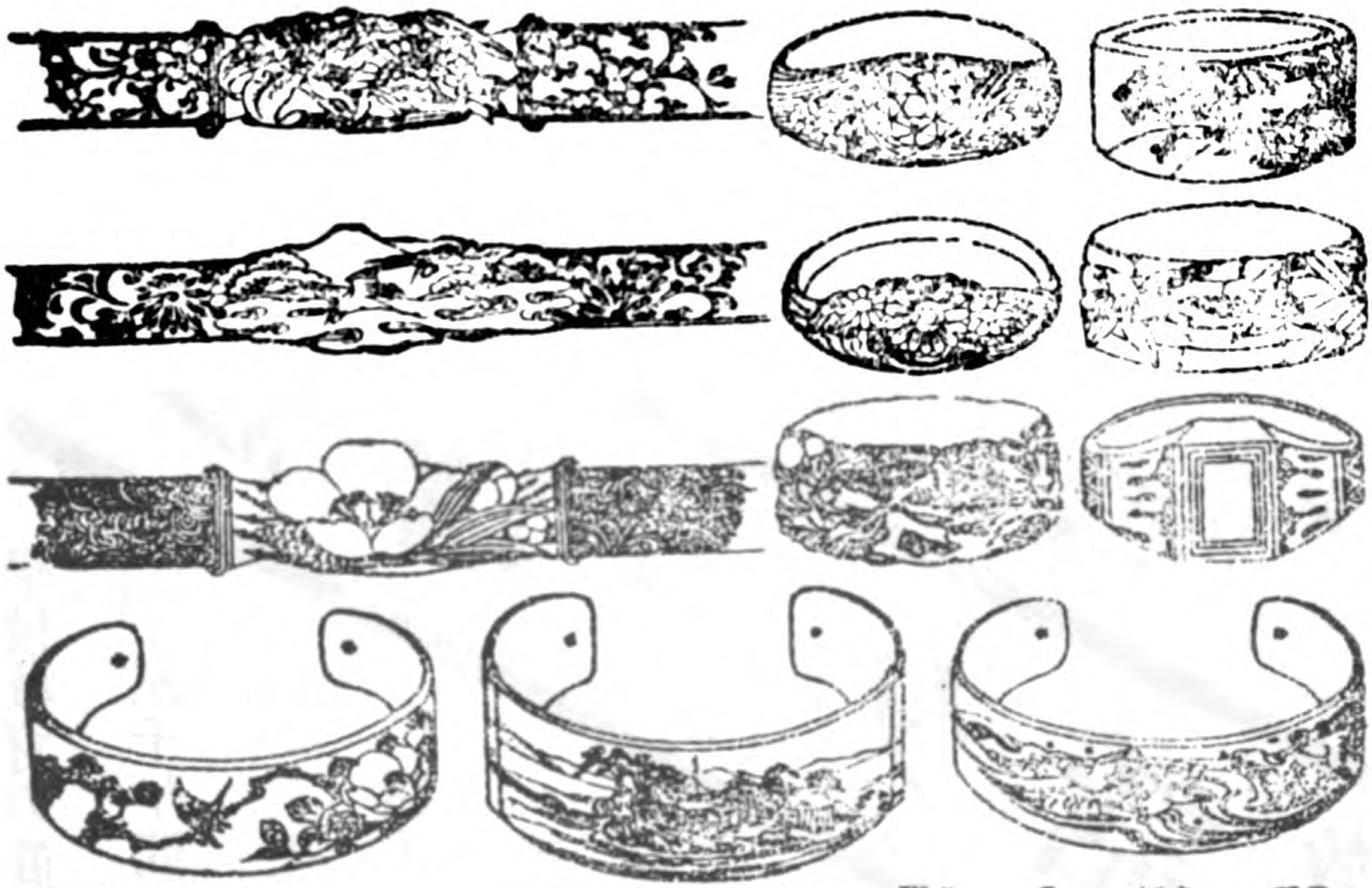
東京感化院長高瀬眞卿君著
高等教育會議議員湯本武比古君序
伯爵東久世通禧君題辭

# 家庭 修身一夕話 教育

學校教育の眞理を解說し家庭薫陶の要領を談論し和漢洋三千年間の英雄豪傑碩儒偉人の事蹟を引證したるものにして後進教育の任に當れる諸學校の教師職員諸氏は云ふに及ばず苟も子女を教育して國家將來の良臣民を造成せんとする家庭には必ず一本を備へざるべからざるの珍書なり紙數凡四百五十頁製本美麗にして趣味饒多なる挿畫あり而も定價は僅に金六拾錢郵便税金八錢なり

發行兼發賣所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社出版部
（電話新橋二六九三）

# 吉沼製作品



金製指環

十八金二匁五分付片切彫
甲價十六圓
乙價十四圓
廿金三匁付小象嵌片切彫
甲價廿二圓
乙價十九圓
廿金三匁付浮肉彫刻付
甲價廿六圓
乙價廿三圓
廿二金三匁五分浮肉象嵌
甲價卅四圓
乙價廿九圓
廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價卅六圓
乙價卅一圓
廿二金三匁五分厚肉象嵌
甲價卅八圓
乙價卅二圓
廿二金三匁五分肉彫象嵌
ダイヤモンド入
甲價二百五十圓
乙價百八十圓
丙價百三十圓
丁價九十圓
戊價六十五圓
巳價五十圓
●廿金三匁付角小判形無地印
指環 十五圓七十錢
●廿二金四匁付角小判形無地
印面指環 廿二圓四十錢
●純金五匁付角小判形無地印

指環 廿九圓五十錢
外ニ時價付形式ノ製品ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金打出彫緣純製付
甲價卅五圓
乙價三十一圓
丙價廿七圓
丁價廿三圓
戊價十九圓
巳價十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價十一圓三十錢
乙價九圓三十錢
●廿金二匁付片切彫刻
甲價十四圓五十錢
乙價十二圓五十錢
●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價十九圓
乙價十七圓
●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價廿圓
乙價十七圓五十錢
●廿金三匁付蝶番付三ツ折象嵌片彫刻付
甲價廿三圓
乙價廿圓

◎印材製作篆刻
應需

右の外金製の各種寶石の大小又は彫刻の精緻等により代價に高低の品々あり

# 關西の女性

俚諺に關東男に京都女と云ふことあり東都の男子は動作快豁にして男らしき點西京の男子に勝り西京の女性は容姿の優美にして女らしき所東都の女性に勝れりと其外部に就て品隲せしものなるが西京即ち概して關西の女性は其外部に於て關東の女性に勝るのみならず其內部即ち精神思想に於ても稍關東の女性に勝る所あるが如し茲に其所見を陳じて大方の批評を請はんとす

第一に關西の女性は自活の精神に富むこと關東女性の右に出づる者あるを覺ゆ普通關東の女性は衣食住共一生涯男子の厄介になるべきものと思ひ定め身分資産に相應せざる贅澤を爲すの傾向あり冗費を省いて貯蓄を心掛くる者少なし是を以て一旦不慮の災害に遇ふか遽に其夫に別るゝ如きことあれば忽ち困頓狼狽して慘痛の苦境に陷るの程度之を關西に比して甚しきものあるを覺ゆ是れ平生自活の精神に乏しく只管男子にのみ依賴して何の準備をも爲さゞるが故に外ならず然るに關

西の女性は大に其趣向を異にし處女にて父母の膝下に在る時より早く既に自活の準備をなし其婚期に達する迄には多少の貯蓄を有せざるは最稀にて他家に嫁ぎたる後は此精神益々發達し平生は其良人の職業を幇助して怠らず此風唯之を中等以下に於て見るのみならず衣食住の資は充分良人より之を受けて毫も不足を感ぜざる中等以上にても造次顛沛自活と云ふことを忘るゝ事なし故に一家の經理整然として無用の費え少なく不幸にして一旦逆境に際會するも甚しき苦境に沈むを免かる今其女性自活の精神に富むる證として見るべきは女性に關する工業の關西に於て隆盛なる事是れなり蓋し京阪地方及び其附近に在て資産中等以下に屬する者の兒女は嫁入仕度を自辨するを一種の名譽とし之を自辨する能はずして父母長上の手を煩はすを以て恥辱と爲すの風行はる是關西に紡績機織麥稈眞田團扇花筵等女子專屬とも云ふべき海外輸出品の製造場多き所以にして其價額千百萬圓に上るもの皆纖弱なる女子の指頭より生ずる所而して其根源は各自活の精神に富むに因るなり彼の兒女結婚の費用の如きは身分に應じて多少あるも實際輕からぬ負擔にて家計上重大の關係あり諺にも三女梁を撓まし五女棟を傾くとさへ云ふ程の重荷なる

を女兒自身之を負擔し一切兩親長上に心配を掛けぬならば一家の經濟之の上こすものあるまじく其のみならず各自婚姻の大費を作るに因りて自然輸出工業の勃興を見るに至ては女性自活の精神は富國强兵の上に廣大の利益あるものと謂ふべし

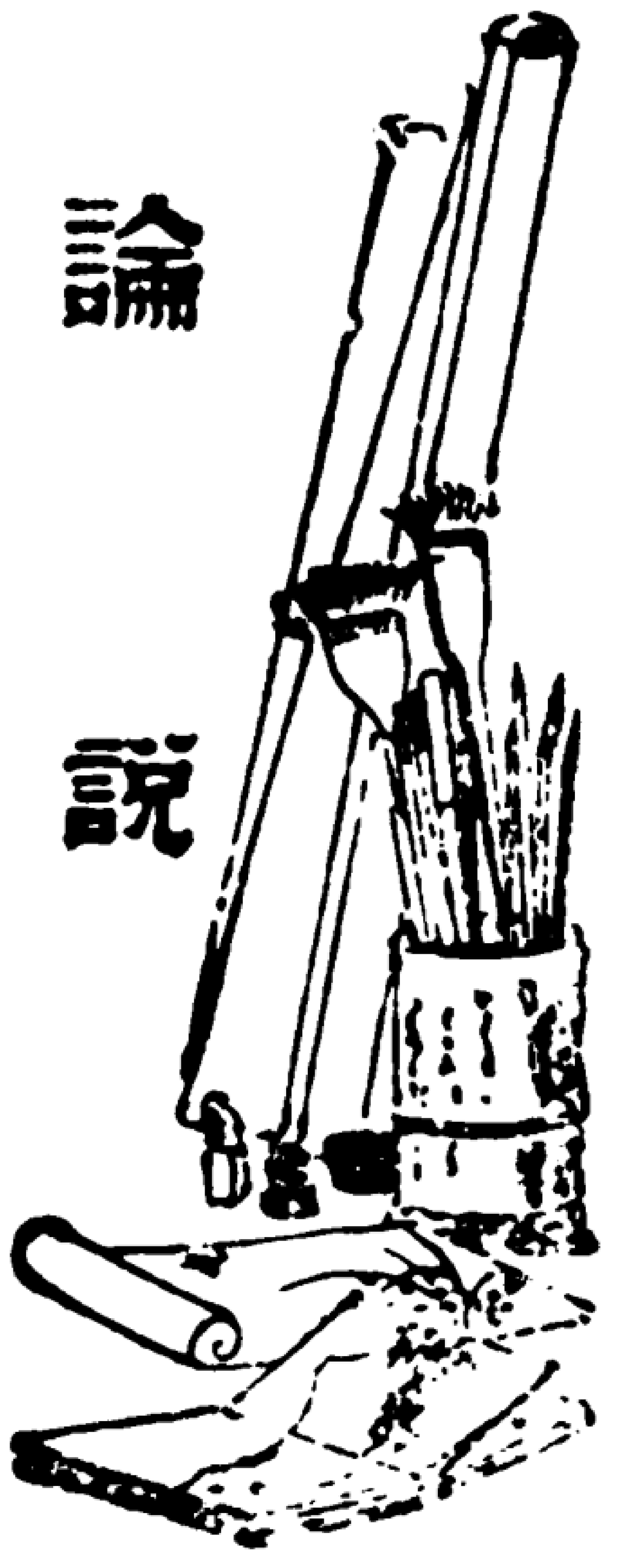
次に經濟思想に富む事も亦關東女性の遠く及ぶ所にあらず這は別に巨細の說明を要する迄もなく東西兩地の庖廚を一見したらんには何れが優り何れが劣るに就て一言の異議を述ぶる者なかるべし又其衣服の調製上に就ても用意の周到なる殆ど關東人の夢想し能はざるものあるなり元來關東人は無用の外飾を張り日常の細費に注意せざるを能事と心得たるが多し例へば中流以上の家に在ては主人は申すに及ばず主婦にても臺所向には至つて冷淡にして下女下男の薪炭飲食物等を無用に消靡するをも知らず顏に打捨置くを以て寬仁大度天晴の主人振と思へる者多し然れども庖厨は貧富の由て分るゝ所魚菜狼籍にして齊整の統理を缺くは敗家の兆候と謂ふべきものにて彼の一代に巨萬の富を成したる河村瑞軒の如きは每日臺所を見廻り手自ら竈下の薪數を減せしと云ふされば下女は之をうるさき事に思ひ主人公は數十萬金の富ありながら一二本の薪を惜まるゝことさてく鄙吝の極みなりと陰

口せしを瑞軒聞きて打笑ひ一日に一本儉約すれば一年に三百六十本十年には三千六百本なり斯る無用の費を省きたればこそ我れ斯く不自由なき身とはなれるなり汝等左樣の不心得にては一生涯我家に下女奉公するより外あるまじと戒めし由是等關東にては實に稀有なる特例なれど關西にては決して珍らしからず我國の財府と稱さるゝ大阪及び其附近の富家に就て探索せしならば門並に河村瑞軒を發見するを得べし男子の心掛け既に斯の如くなれば女子も之に化ざるゝは自然の結果にして彼が如き男子外に働き此の如き女子内に助けなば其家富まざらんことを欲するも亦得べからず今や邦國の大なるより一家の小なるまで皆一に黃金の多寡によつて榮辱の定まる時節柄女性自活の精神熾んにして能く職業を勉め經濟思想に富みて勤儉貯蓄を心掛くるは何よりの重寶なれば關東の女性も右の二點に就ては我執の角を折りて關西を學ばるゝ樣にありたきものなり西施の顰に傚ふものとの嘲罵の如きは毫も意とするに足らず

以上は單に關西女性の長所を述べたるものなるが凡そ物には一長一短あり關西の女性亦決して完全無缺にはあらず其自活の精神熾んなるの餘弊男子を措き何事に

も自身差出で切つて廻し主人公を辯髦にする司馬昭的妻君あれば折衝辯難父兄に代つて埒明ける一丈青的令孃あり俗に云ふ男子を男子臭しとも思はざる者少なからず其結果女子に最も大切なる幽閑貞靜の美德に至つては多少の欠點ある者多し次に經濟思想の發達せる其極端は吝嗇となり諸事瑣々切々として行爲齷齪を極め關東流の洒々落々に慣れたる眼には大に不愉快を感ずる事多し此の二點は實に其短所にして他の長所の美を減殺するの憾あれば平生深く注意し關東女性の長所を斟酌折衷して能く其中庸を得る樣にあり度ものと考ふるなり之を要するに東西兩女性の短を捨て長を取り各其固有の特能を發揮せしめ之に施すに文明流の新敎育を以てせしならば始めて學藝優逸にして操行嚴正を失はず世界の大勢に通じ時運の進歩に伴ふ完全の女性を見ることを得べきなり(東・臺野史)





# 論說

## 女子教育の方針（承前）

大日本教育會理事　川村理助氏口述

前に言ふたのは德育方面の話を致したのであるが、智育の方面に於ても多少注意しなければならぬことがあらうと思ふ、婦人は内に在て人の妻となり、兒女を養育すると云ふことは先天的に極つた職務であつて動かす可らざる極りである、其故に學問を非常に深く研窮して大學者となる必要はない、又世の中に立つて手腕を振ふと云ふ必要もない、智識方面に於て深いことを知らなくともよい、併しながら廣く普通の智識を持て居らなければならないので、言辭を換へて言へば常識即ちコンモンセンスが發達して居らねばならぬ、之れも女子教育者并に婦人自身に於て、常に注意しなければならぬ事と思ふ、常識と云ふことは隨分ボンヤリした言辭であつて、其範圍を極めることは六ヅケしいけれども、普通の事物に接して、之れに正しき判斷を與へ、正しき處置を行ふことの出來る智識が、即ち普通常識であらうと思ふ、然るに此頃は兎角女子の學校などでも、地理學を習ふとすれば地理の専門家見たやうなことを研究爲し、歷史を習ふにしても歷史家になるやうな研窮をして居る、之れは宜しくないことで、例へば土瓶を一ッ見ても土瓶と云ふものは全體如何なる方法に由つて出來たものであるか、其の原素は何々であるか、如何なる土地に於て拵へたものであるか、其の土地の一年の產額は大凡何う云ものであ

るか、又土瓶の沿革は何う云ふものであるか、と云ふやうな其の一ツの土瓶を見ても、是れの理學方面博物學方面地理學方面又歷史方面と其の他種種なる方面より觀察の出來るやうになつて居るのが、乃ち常識のあるのであつて、其れ故只學問として種々なる專門風に智識を授けずとも又研究せずとも、目の前に在る萬事萬物をツカマヘて、餘り間違のない判斷をして往くことが出來れば其れで一通りは澤山と考へねばならぬ、其れには敎育者に注意するは無論であるが、女子自身も平常さう云ふことに注意をして智識開發の方法を講ぜねばならぬ、之れは妻として家政整理の上に必要あるのみならず、又母として兒女を敎育する上にも極めて大切なことである、

コンモンセンス即ち常識の大部分は、學校よりも、父の敎よりも、母の敎育に於て多く得る所があると云ふに至つて、母の價値が尤も貴重に成つて來るのである、今玆に一の例を擧げて斯う云ふ風に各種の方面に智識が行き渡つて居らねばならぬと云ふことの話をして見ませう、(梅に就ての話を)

……梅に就ては植物學の方面から言へば、其の幹はどうであるか、葉はどうであるか、花の諸機關はドウ云ふ風に出來て居るか、其の雄蕋、雌蕋の作用は如何なるものであるか、其の果實、其の種子はドンナ風に成つて居るものであるかと云ふことを知るのは無論のことである、又其の梅が、氣候と如何なる關係を以て居るか、其の花の香ひ、實の味はドウであるかと云ふやうなことも無論知つて居らねばならぬ、併し只斯かる植物學方面の智識ばかり持つて居つたのでは、梅に就てのコンモンセンスが滿足なものとは云はれない、之れを實用上から見れば、梅は如何なる關係があるもの

であるか、其實は食用になるのみならず、之れを鹽漬とし梅干としては長く貯藏に堪へ副食物となり、又梅の幹からは、算盤の球數珠の球などを拵へると云ふやうな實用方面のことも知つて居らねばならぬ、斯る植物學や、實用上の場合のみならず、梅は如何なる國に多く有るか、梅の名所は何處であるかと云ふやうな地理學上の智識もなければならない、又梅を愛した所の人はドンな人であつたか、例へば我國で古來梅を愛した人は誰であらう、菅原道眞公が非常に梅を愛して、流遷さるる時にも、東風吹かば匂ひおこせよ云々と云ふ歌を詠んで、梅を愛するの意を洩したと云ふやうなことから、天滿宮の紋に梅の花の紋を附けることも實例のあることから又「敕なればいとも畏し鶯の宿は問はゞ如何答へむ」など丶云ふ歌の來歷等をも知つて居るとか、又水戸の烈公と云ふ方は、大變に梅を愛して、偕樂園と云ふ所に澤山の梅を植ゑて、今でも梅の名所と數へられ、一方には上下共に花を見て相樂む所とし、一方には其實を鹽に漬けて、軍の時の兵糧の幇けにすると云ふ計畫を立てられたと云ふやうなことも多少知つて居るとか、又梅を美術上より見れば、有名なる梅の繪畫とか、彫刻とか云ふものは如何にしてあるとか、又詩を作る人の目から見れば、梅の面白いと云ふのはドウ云ふ風情の所にあるか、梅を詠じた人の名高い詩はドンな詩であるか、梅を詠んだ所の有名な歌は何と云ふ歌であるか、其詩人の詩歌讀みの歌を詠んだ心持ちは如何なる所にあるのであるか、梅は春の魁であると唱へて、非常に古の人が、之を愛したと云ふ譯は、梅の如何なる點が、人間の如何なる德と一致する所のある故であるかと、云ふやうな、其他衞生上から梅の實の害

とか、盆とかと云ふやうなことは、ドウ云ふ所にあるか、副食物としての適否はドウであるかと云ふやうな細かいもの迄も、一通り知つて居る、斯う云ふ工合に一の梅に就ても、あらゆる方面に、平等に考へが行き渡つて居つて、始めて梅と云ふとを誤りなく判斷することが出來るのである、又之れを實用上、教育上等に應用をすることも出來るのである、婦人の學問と云ふものは、決して深遠なることを要さない、斯の如き方面に廣く渡つて智識を持つて居るのが必要である、其れより實地の事物に到着しても、總べて其心得を以て觀察を爲し、研究をしたならば、所謂常識と云ふものゝ發達は必然である、之れも世の女子教育者及び諸婦人方に於て注意しければならんことであらうと思ふ、(完)

# 日本女訓（未定稿）

川崎重陽

五十八、誠至らば、天地神明をも感ぜしむべし。まして、人と人との間にて、この一念の通せざる理やあるべき。人を敬ひ、人を愛みて、人のなは、我をへだつるは、いまだ、我が誠の至らざるが故なりと知るべし。たとひ如何なる境遇にありとも、ますます、勉めて怠らずは　つひには、その功あらはるべし。古人も至誠にして、動かざるものは未だこれあらずといへり。

五十九、誠、内に充ちたらんには、如何なる境遇にありても、天地の惠厚きことを覺りて、心おのづから安く、ひたすら、己が本分を盡さんことをつとむるを得べし。みづから我が境遇を賤み輕んじ、雲煙の如き、世俗の名譽を求めん

として虚飾をこととし、或は他を羨み、嫉むなどは、深く戒むべきことゝなり。

六十、女子の、外貌の麗しからんことをのみねかひて、内心の美醜を顧みず、生れつき、美貌のものは、これにほこり、美貌ならざるものは、くちをしきことに思ひて、ひたすら、外面の裝飾にのみこゝろを盡すは二つながら、あさはかなり。容貌の美醜は人に見ゆれども、内心の美醜は、見えがたしと思ふは、あやまれり。眸子に表れ、顔色に動き、言語、動作の上に發して、心のほどは、くまなく見ゆべきものなり。誠、内に充ちて、内心清々しく愉ばしげなる面持こそ氣高くも、また麗しけれ。生來の容色、いかに美しくとも、誠すくなくして、輕薄ならんには、人として尊むには足らずと知るべし。

六十一、女子は、專ら家内の事にあたりて、あけくれ、世話多く、他に出づることも稀にして、おのづから心狹く、本心を動かされやすきものなれば、善き書を擇びて、日々、少しづゝなりとも熟讀すべし。誠を養ふに、たすけすくなからざらむ。詩歌の感情正しきものなど、常に愛讀して、心に入ること深ければ、おのづから、日日の家事の上にも、趣味を覺えて、團欒の樂、をます一助ともなりぬべし。その他、育兒、家事等の書より、有益の書をひもときて、智識をひろめ、また家事にさはりなくば、高尚純潔なる集會には、をり〳〵出席して、耳目を新にするもよろしかるべし。

六十二、およそ、世に、誠の道を得たるばかり樂しくして、慶多きはなかるべし。誠とは、もとより得難きものにもあらず、また、これによりて立つに、むづかしきものにもあらざるなり。

誠、内に充つれば、居るところとして、愉ばしからざるはなし。おのれ、みづから、樂みて、人も、また、之を悦ぶ。これ、眞の樂あり。眞の樂を樂む人をこそ、まことの人とはいふべけれ。まことの道を學び得たる人とはいふべけれ。(終)

## まことの母

敕撲生

繼母養母などに對して、肉親の母をばいふにはあらず、肉親の母たりとも、母たるものゝ務めを全くし得ぬものは、矢張まことの母とはいはざるべく、繼母、養母たりとも、母たるものゝ務めを全くし得たらんには、之をまことの母といふを得べし、凡て世の婦人は、一度は母と呼ばるゝ境遇に至るべし、左れば婦人の務めの中には、母の務めをも含み居ることを知らるゝなるべし、予は倫理學上より、其母の務めをば說かんと試むるにはあらず、まことの母たる婦人は、如何なる人なるかを我國史中に見出さんと祉思へるなれ、古より婦人にて、名の殘れるはいと多し、桓々たる神功皇后は申すも更なり、允恭天皇の妃たりし衣通姫(應神天皇の皇子稚淳毛二派皇子の王女、皇后忍坂大中姫の妹)の艶麗にして、後世より歌聖に列せられたるが如き、嵯峨天皇の皇女有智子内皇王年少きより詩賦に巧ありしが如き、上東門院(關白道長の女彰子、一條天皇の中宮)の侍女にして赤染衛門(前大隅守赤染時周の女、實は平兼盛の女、大江匡衡の妻となる、)和泉式部(大江雅致の女、和泉守橘道貞の妻、後平井保昌の妻となる)、紫式部(越前守爲時の女、右衛門佐宣行の妻となる)、伊勢大輔(大中臣輔親

の女）等の如き、歌詞に巧ありしのみならず、草紙、物語などをも書き列ねて、婦人中の秀才と呼ばれ、其他袈裟御前（源渡の妻、遠藤盛遠に殺さる）の苦節、巴御前（木曾義仲の愛妾）の勇武平政子（北條時政の女、右大將頼朝の室）の英邁、近くは淀君（淺井長政の女、太閤秀吉の愛妾）の雄才、明智氏（明智光秀の女、細川忠興の室自殺す）の節操、淺岡局（仙臺伊達氏の老女）の忠節の如き、是等は其名人口に膾炙せらるゝ所あれども、其母たる務めの如何ありしかは、今日に傳ふるを得ざるのみならず、此外にも名を殘せる婦人のいと多きにも拘らず、母たる務めの事蹟は、傳へ得たるもの稀あるこそ、如何にも口惜しき事なれ、古より名高き父の子に愚かなるものあるの例は、珍しからざれど、賢明なる母の膝下には、愚なる子の育ちたるは、殆ど稀なるが如し、應神天皇の



如き、天智天皇の如き、其母后の神功皇后に於ける、齊明天皇に於ける、固よりいふ迄もなく、彼北條時頼（泰時の孫）は鎌倉の盛時に生れ、兄經時の後を受けて執權となり、天下の事意の如くならざるものなき程の地位に居りながら、泰時が承久の事人臣の大罪たるを悟りて、謙讓謹愼以て其罪を償はんと務めたるに倣ひて、身を下して民を憂ひ、北條氏の善政は、今に泰時、時頼を稱して、其行ひの後世を裨益するものゝ、今に傳ふるもの多きは、時頼自身に其性を得たるか、余は其母たる松下禪尼（安達盛長の女）の賢明なりし教導の功多きに居るを疑はず、禪尼が障子の破れを繕ひ居たる見て弟安達景盛（盛長の子）が、賤しき業を自らするを怪しみたるに答へて、凡ての事少しく破れたる時に繕はゞ、大破には至らぬものなり、今日は時頼來るべければ、物の道理を能く言ひ聽か

さんが爲めに、斯くは自らするなりといひし一事にても、禪尼が孜々時頼を敎へ導くに怠らざりしことを知るに足るべし、又楠正行は正成の子なれば、其忠烈なる、遺傳の性を備へたるなるべきも櫻井驛の訣別は時に、年僅に十一なりといへば、未だ幼年の孤なりしなり、然るに能く父の遺訓を守りて、南朝三世五十餘年間の保護者たる基礎を定め、後世をして其風を聞きて立たしむる程の忠節は、遺傳と遺言との功によるべきか、余は亦其母たる人の賢明なる敎導の功、多きに居るを疑はず、今に傳ふる所に據るも、正行が櫻井驛より河内に歸り、父の遺言を母にも傳へ、後父の死を見るに及びては自殺せんと謀りたるを、母は之を止めて、父の遺言に背き、徒に自殺せんとする樣にては到底君の御用には立つまじとまで勵まし正行も爲めに大に感悟して、其後は小供心にも只管朝敵追討の事のみを念とせしといへば、是迄とて母の敎訓を怠らず、又此後とも敎導に務めたるは、疑ふべくもあらず、遂に幼き孤三人(正行、正時、正儀)をして、南朝の大業を輔翼せしめたるならんか、又同じ建武の頃、新田義貞が越前に赴き勤王の士を糾合せしに、當時多くは足利氏の威勢に恐れ、越後に於ける同族のものより外は、應ずるもの至つて稀なりしに、越前杣山の城主たりし瓜生保兄弟(義鑑、源琳、重、照)主として之に應じ、義貞方の城としては、金崎城より外は、唯々此杣山城あるのみにて、如何に官軍に力を添へたるかを知るべく、斯く瓜生氏の獨當時の足利氏に敵し、利を忘れて勤王の志厚かりしは、抑も何故なるか、傳ふる所に據るに、足利氏の兵來りて杣山城に迫るや、保の弟義鑑、源琳等戰死し、味方大に沮喪しけるが、保の母は愛子二

人をも失ひたるに少しも、悲しむ氣色なく、脇谷義治(當時奉じて杣山城の主とせし所、義貞の弟脇谷義助の子なり)が前に杯を持ち出で丶、此度の戰ひ味方敗れて、義鑑等を失ひたるも、君の御用に立ちたることあれば、少しも悲しむ所なく、尙重、照等もあれば、再び軍を起すに難からず、先づ一獻召し上りて、御心を慰めらるべしと勸ためりしといへり、之によりて察するに、保の母は賢明にして、能く大義を辨じ、啻に將に沮喪せんとする、士氣を失墜せしめざりしのみならず、常に兄弟五人を敎訓して、大節に嚮はしめたるを知るべく、是れ瓜生氏の獨四圍悉く敵たるの間に立ちて、勤王に力を致したる所以ならんか、以上時賴正行、保三人の母の事は、至つて顯著なる、事蹟にして、少しく書を讀みたるもの丶普く知る所あるが、母の務めを全くしたるものとして、まことの母たる人を求むるに、先づ此三人に於てせざるを得ざるなり、(未完)






## 墨染の松

文學士　濱田　廉

近松半二、三好松洛等が筆のすさびに、本朝二十四孝の顯はれしより、假設の八重垣姫の艷名は、都鄙に籍甚し、貞烈なる勝賴夫人の芳名は、やう〳〵俚耳に遠かりぬれど、なほ烈婦傳中にたゝえらるれば、幽魂永く地下に瞑すべし、されどここに一言の信を守りて終生渝らず、名にしおふ松

の操にそむかずして、幾年月を古寺に朽ちはてし佳人あり、世人はその芳名を語らず、歴史はその高節を記せず、一基の塋域空しく薜蘿に掩はれて春風の吹くにまかせ、秋月の照すにまかせ、重壤露冷かにして、枯骨苔蒸さんとすれどこの薄命なりし佳人のために、一掬の紅涙を手向けんとするものなし、郁々たる蕙香久しく塵塚の底に委するに忍びず、筆の命毛あらんかぎり松の緑を揮せんかなこれも宿世の因縁ならまし、

世は苅菰と亂れし戰國の代群雄各所に割據せしが中に、甲信の高地を根據として神出鬼沒せし武田信玄、遙に洛陽の天を睥睨して、胸裏大に雄圖を企てつゝありき、織田信長亦尾張に崛起して經綸の才を懷き、周く四方を經營して、異日雄飛の基を定め、永祿三年五月十九日の夜嵐に、兇敵今川義元を滅ぼして、參遠駿を略取し、遂に八年十一月使を信玄に遣はして款を通じ、其養女を以て勝頼に妻はし、信玄も亦其六女阿松を以て、信忠に許嫁せんことを約す、この時阿松甫めて七歳なりければ、なほ家に留まりぬ、嗟乎振分髮の乙女心久しく榮華の夢に飽きぬ、その後年埋木の花咲くこともなくて枯れぬる身とならんと思はんや、飛鳥の川瀬、明日は淵となる習ひとは云へど、定めなきは憂世の常なりけりな父と舅との和議は一時の權宜にして、互に鵬翼を張りつゝ霸業を争ひし猛將の心は、固より婦女子の愛着にはださるべくも非ず、果せるかな、元龜三年十二月、三形原の大戰ありてより、武田織田兩家の和議全く破れ神の結びにし赤繩の絲も切れ果てゝ、朝な夕なにいとほしき君の姿とうちまもりてし明鏡、も一槌破碎してあとなくなりぬ、これぞ阿松が十四歳の冬にぞありける、越えて天正元年、英氣勃々たり

し信玄も、さすがによる年波を如何ともすること能はず、四月十二日の朝風に信州駒場の露と消え失せぬ、勝頼その遺志を繼承して、日に織田の軍と鋒を交へしが、三年五月、參河國長篠の大敗に武田氏の勢頓に衰へ、十年の春の頃には、織田の軍勢四方よりその領内に攻め來り、阿松が曾て心中に妹脊を契りし信忠は、武者振いさましく伊奈口より押寄せて兄勝頼と鎬を削りしが、武田の武運拙くして天目山の松風にあはれの最期をとゞめぬ、この時ぞ勝頼夫人が清き操を守りて、婦女の鑑をのこせしは、さるにてもあはれなる阿松はいかにせしぞ、

元龜三年兩家の反目に破鏡の嘆を發せしより、その後干戈絕ゆることなく落花枝に歸るの期なかりしが左右に侍りし人々共更に、他家に嫁せんことを勸めしかど阿松は、常に肯んぜずたとへ比翼の契こそ果さね、信忠は親の許せし夫なれは、一旦敵味方とひき分かれたりとて、忽ち操を破るべきや、最早浮世の望も絕えぬ、綾羅の袂も何かはせん人の言の葉もうるさければとて綠の黑髮切拂ひ、身は墨染の尼衣、昨日迄琴すがゝきし纖手も、今朝はつまぐる珠數の音に、あはれ無常をかこちしなるべし、國人新館尼と稱して、その貞節を感ぜぬものこそなかりけれ、やがて甲州の旗風やう〳〵競はず、遂に天目山の悲劇ありしより新館尼も妹といとけなき姪とを携へて庵を逃れ、霞棚引く峰をたどり、朧の月に谿を渉り、幾瀨の淀を凌ぎ〳〵て、武藏國北多摩郡横山村に庵を結び、柴の折戸の明暮に、なき人々の冥福を弔ひ、春花の樹梢に開くをながめては、上求菩提の理を悟り、秋月の清波に映ずるを望みては、下化衆生の相を觀じ、一向專念と行ひすましけり、

さる程に織田信長は武田氏を滅して京都に振旅せしが、さすが蓋世の英雄も、定めなき世のためしに洩るゝ能はず、天正十年六月雨の空、死出の田長に導かれて、本能寺にあへなく僵れ、新舘尼が苦節の主たりし信忠も、二條城裏に忌々しき最期を遂げぬ、かくて世は幾變遷して、豊臣秀吉天が下に時めき渡り、十七年には徳川家康關八州を賜はりて、八月朔江戸城に入り來れり、この時新舘尼三十一歳心なき身にも、人の榮華の樣を見ては懷舊の涙にむせびけん、

寔に至誠は人を動かすものぞとよ、家康は新舘尼が貞節を傳へ聞きて、いたくこれを嘉し、これより毎月必ず金穀を給して、平らけく安らけく世をおくらしめ、また名家の後の絶ゆるをあたらしみその妹を召して、左右に侍らしめしが、あつき情の露しげみ、妹は遂に一男子を擧げたり、これぞ武田萬千代とて、後に水戸に封せられしが、おのが名にも似ず、たゞ一代にして絶えにたり、その姪の末路はいかなりけん、ものに見えねばしるすによしなし、かくて新舘尼は法の光に無明の暗を照らし、鷲が嶺ふかくわけ入りて眞如の月を賞しゝが、元和二年四月十六日、軒端の夕風あはれに吹きて、庭の遣水音しめやかなる時、五十七歳を一期として、芳魂つゝがなく白玉樓上に飛び去りぬ、遺言して、其庵を寺とし、名づけて信松院と云ふ、今なほ横山村に存せり、英雄の涙は白屋に濺ぎ花に濺ぎ、園に濺ぐと云ふ、心あらん輩は、この花の如き尼君の精靈に、一掬の涙を手向くるを吝む勿れ、幽魂必ず格り饗けん、

嗚呼傳ふべくして、傳へられざるもの鮮しとなさず、武田阿松の如きものその一なり、勝頼夫人の貞烈幸に載せて史乘にあり、その芳名或は俚耳

に到らざるも、苟も史を學ばんものは必ず知るべきの事實たり、阿松の節操毫も夫人に讓らず、ただその生涯の花々しからざりしのみ、もし夫人の歷史中より、天目山の一齣を除き去れば、世人或は遂に夫人を知らざらん、信松院裏人影依稀にして、佳城蕭然風霜に危座す、老松亭々として千古の秀色を呈すれども、人の顧るなく、天籟謖々として萬年の法樂を奏すれども、人の聆くなし徒に花にあこがれ、月にうかれて、笑ひ興ぜんよりも、この薄命佳人の遺趾を訪ふて、一片憑弔の情を寄することそ、なかなか心にくきことなれ、かの八重垣姫が艶語を口吟するもの、願くはこの阿松の爲めに、又勝頼夫人の爲めに彌陀の御名を唱へよ、これ亡き人々の貞節清操に對する、吾人の義務にあらずや、

餘言、阿松の事蹟は信松院記、新編武藏風土記



稿に載せらる、本書に就て看るべし、○橫山村八王子の附近に在り、○武田信玄の末期は、三河野田城攻の時、銃創を被りて死去し、其屍を諏訪湖に水葬すと云へど、是れ俗說に過ぎず、當時の實錄たる御宿監物書狀、天正玄公佛事法語を合せ考ふれば、信玄は肝膈の病にかゝり、野田より駒場（三河と信濃との界）に退きて死し、其遺骸は信州惠林寺に葬る、其墳阜儼として存せり、予嘗て野田城墟に赴きて、所謂信玄の墓なるものを一見せしが、疑もなき僞物なりき、餘事なれど、本文中信玄の最期を云ひしを以て、故らに及ぶ、

請諒焉

# かほよ御前

三浦千春

備後國三次町の舊城主淺野長治(此長治の家は故ありて絶家し其後此地は本家藝州藩の領分となりぬ)といひける人は彼の淺野内匠頭長矩の舅にして、長治に一男四女あり。其の三女阿栗姫といふが長矩の室にて、演劇に所謂かほよ御前とて、美人のよしいへる婦人なり。三次町なる淺野長治の菩提所鳳源寺にあぐり姫の位牌あり。表には

瑤泉院殿良瑩正澄大姉

其裏面には

正徳四甲午六月三日

とあり。義士菅谷政利も此地の貝が谷といへる所に跛者となりて隱れ住みけるよし。淺野家のゆかりに依りてあるべし。頼山陽氏の貝ヶ谷記といふものありといへど、おのれいまだ見し事なし。鳳源寺は維新前までは、采地二百石を領し、三次町の巨刹なりとぞ。邊鄙にありてしる人も稀なれば今其地の人よりきくがまゝを取りつまみてこゝに記しぬ。

鳳源寺懷古　よみ人しらず

あたし世の露にしをれしかほよ花
むなしき名のみとゞめける哉

なほ此阿栗姫のいかに貞操なりけむ性行のごときは他日しるすところあるべし。

編者云赤穂侯城中にて吉良を刃傷せし報本邸に傳はるや邸中は上を下へと騒動し一廉の武夫すら周章狼狽手足を措く處を知らざる樣なればまして老幼婦女は東西に泣き惑ふて物の用に立つべくも見えざりしが瑤泉院夫人は此大變を聞く

も敢て驚ける樣なく徐ろに後事を理め聽て内匠頭殿切腹城地江戸屋敷共召上げの報至りしかば左右を指揮して萬般の取始末を爲さしめ喪服に改めて殿の屍骸に最後の御對面あり臣下に命じて菩提寺へ送葬せしむ其間神色自若として涙一滴こぼさゞることもなきに流石は長治の女長矩の夫人なりとて上下感嘆せしとかや斯て一切の處置を終りてしづかに駕籠に乘り邸の門を出づると共に歔欷悲泣の聲外に漏れ哀傷に堪へざる樣なるに附從せる者何れも双の袂を濕せしと云ふ既に里方へ歸らせ玉へる後は緑の黒髪を切拂ひ朝暮亡殿の菩提を吊ひ絶えて人に見え玉ふ事なかりしと云ふ此夫人の賢良なりしは口碑に傳はれど史傳に見ゆるもの〻、多からざるは誠に惜むべし

## 羅馬の女丈夫コーネリヤの逸話

文學士　本田淺次郎

何れの國の歷史にも女丈夫の珍しい行を爲た者は往々見ゆるが、昔羅馬の共和時代の盛な時のコーネリヤと云ふ婦人も其一人である、コーネリヤは有名な英傑ハプリヤスシピニーとて、第二回のピユーニック戰爭にハンニバルを破つて勇名を轟かしたる人の女である、素より門閥の家に生れたから立派なる夫を持ちセンプロニヤスグラッカスと云へる人に嫁して琴瑟相和し十數人の子を擧げたけれども、不幸にして中年夫に別れ女の手一つで數多の子供を教育したが、固より博學多才の婦人なれば其子供は皆有爲の人物となり、後年共和政府の大改革を企て大技倆を奮つてチベリヤスグ

ラッカス及びゲーヤスグラッカス兄弟も此婦人の手に育つた子供である、夫の死んでから間も無く其婦人の淑徳才智を聞傳へて四方から結婚を申込んだ者もあるが、中にも、埃及の國王トレミーから是非にと申されたが、コーネリヤは之にも應せずして、只國の爲に子供等を育つるを樂みとして居つた、或る時カンパニヤの貴婦人が立派に着飾つて澤山の寶玉を飾り立てゝ見せびらかしコーネリヤの所持する寶玉をも見たしと云ひ出した、するとコーネリヤは、しつかり膝を取り合つて戲れて居つたチベリヤスグラッカス及びケーヤスグラッカスの兄弟を指して、之が私の寶玉で私の粧飾品だと告げた、そこで貴婦人も大に赤面したと云ふことがある、總て女と云ふものは徒に衣服調度等の粧飾に心を奪はるゝとなくコーネリヤの如き心掛を持つて貰ひたいものである、

編者云大阪にて豊太閤徳川家康と對面の折種々の名刀珍器を出して誇り示され徳川殿にも定めて種々の寶物を藏せらるゝならんと云はれけるに家康之に答へて家康は別に寶器などいふものは所持仕らず唯家康が爲めには水火を踏むも敢て避くることなき家臣五百人持ち候是のみ家康が寶にて候といはれしかば流石の太閤も慚る色ありしといふこと古書に見えたり此事コーネリヤと貴婦人の問答に似て東西一對の佳話と謂ふべし

## 慈善家「サラーマルチン」女（承前）

宮館さだ子

身には華麗なる衣裝を着け花の晨月の夕と暮れあかすはうら若き女の常なるに眞摯なる「マルチン」

のみは浮きたる心の露だにもなく彼が十九才の折同じ年ごろなる世上の娘等が歌舞遊逸に日もこれ足らざるの時に方りて早くも彼は生涯の径路を定め慈善的事業に其一身を捧ぐることゝはなりぬ。無學なる者、堕落したる者を誨へて之を人生の正路に導き又に冷酷なる人情の風波に漂ひて世に棄てられたる者を慰籍し之に同情を表することは彼が畢生の目的にして亦其事業なりき。

此目的に向て彼は先づ日曜學校を管理し、次に養育院を訪づれて病める者、老いたる者又は貧に悩める者を慰籍するを此上なき樂とせり、而して彼は亦た別に貧民の子女を集めて初等教育を與へ其書籍筆墨等の如きは一に皆な僅少なる彼の賃銀よりして支辨するものなるが故に、さなきだに日日の生計に餘裕なき彼は更に一層の窮乏を感じつつある間に於ても屢々市内各處の薄命者を訪問し彼等を慰籍し救恤することを懈らざりし也。

彼が畢生の目的たる慈善的事業の端緒は斯の如くにして開始せられぬ、其眞摯なる風丰と熱誠なる慈善心とは漸く人々の信用を博し遂に進んで囚徒救濟の事に從ふに至れり。

蓋し、當時の監獄たるあらゆる不幸罪惡の淵巣にして其慘狀殆んど目も當てられぬ程なるに拘はらず世人の起て之を救濟し改良せんと欲するものとては未だ一人も之れあらざりき、此の如き狀態の下の在りて「マルチン」の如きは最も能く時の急務に投じたるものと云ふべきなり。

彼の囚徒救濟に志したる發端は或一婦人の其實子を虐殺して投獄せられたるを聞き如何にかして之を悔悟せしめんと欲するの希望に出でたりと云へり、是よりして彼は監獄の門前を通過する毎に囚徒に對して訓誨を與へんと欲するの念常に止む

こと能はざりき。

されど、彼も亦た孱弱なる一女性たるを免れず、當時世人の監獄に對する觀念たるや所謂る「地に畫きて獄あり」とするも人敢て入らず」と云ふが如くに之を以て甚しき不淨の地と認め假令有髯の男子にして或は職を布教に奉じ或は社會風教の維持を以て自ら任ずる者と雖も尙且囚徒の訓誨に從事すること能はざりしは勿論、只管之に接觸せんことを懼るゝの時に方り彼は幾度か逡巡し躊躇したる後、漸くにして勇を鼓し鐵柵嚴めしき獄の門を入りて囚徒の教誨幷に救濟に關する許可を願出でしが當時に於ては未だ類例もなき此珍らしき出願は殆んど一狂女の所爲として情なき獄吏の許容する所とならざりき。

彼の失望は實に一方ならざりしが燃ゆるが如き彼の熱情は之を以て阻止すべきにあらず、第二回目の請願は首尾よく許容せられ世人が其名を聞くだにも戰慄する「囚徒の友」として獄内に出入することを得るに至りぬ。

其初めて出入りを許されたるは「ヤルマス」監獄にして同獄は當時の監獄中に於ても最も劣等にして不完全なるものなりき、其陋穢なりしことは言ふまでもなく、男女兩性の囚徒は殆んど同室に拘禁せられ、賭博を爲すもの、爭鬪するもの、自己の罪惡を誇り顔に說き聽かするもの、又は新なる犯罪の手段を工夫するもの等常に喧然として呼號しつゝあるに拘はらず獄吏の之を制するなく亦た篤志者の來りて訓誨せんと欲するものもなかりき。

柔婉なる一介の女性、而も微々たる一仕立職の身を以て健げにも是等憐むべき人々を誨へ之を正路に導かんと欲し自から好んで此懼るべき魔窟に入

りぬ。彼の囚徒に對して說く所のもの高尙なる宗敎上道德上の理法に非ずして簡明樸實なる人の道なりし也言よりも淚滋く、理論よりも情多かりき。

されども此熱淚と至情とは其始めに於ては虎狼の如き咆哮の聲に埋められ、嘲罵の裏に沒し去りて耳を傾くるものとては一人も之あらざりしが彼は之を以て其高尙なる任務の前程に於ける當然の進路なりと思考し更に一層の熱誠を以て諄々訓誨の結果さしも虎狼のごとかりし囚徒の心にも何時とはなしに一點の和煦を添ゆるに至りぬ。



# 女子敎育家小傳（寫眞參看）

◉松岡常盤子刀自　登波子、又止波子ともいふ

刀自は有職故實の道に名聲赫々たる松岡辰方の曾孫にして、其家業をうけて、又有名なりし父行義に繼きて本邦故實禮節の道に秀でられ、帝國大學古典科講師として其晩年にいそしまれし、雙松亭のあるじ明義大人の長女なり、嘉永の六年に生れたまひ、うなゐばなりの折から、いまだしき七つといふに、はや女のみちに備へつべき花結のわざ、又女の禮のうひまなびを、みやかたにまゐのはりて敎へそめられき、このときよりつぎ〳〵、父君のをしへごとはさらなり、女のをさむべき事業は歌舞絲竹のはしつかたまで至らざることなく、明治十三年東京女子師範學校敎員にあげられたまひしより、寄宿舍長、禮節音樂敎員兼生徒取締、高

等師範學校助教諭、附屬幼稚園兼務などにすゝまれ、其の學校をしぞきたまひて、專ら禮節教授の上にのみつとめられたるが、其門にをしへを受くるもの、師範校生はさらなり、皇族の御姫宮、華族の御姫君たちさはなりき、されば其をしへ子のうちにも、いま世にきこえたる才媛たちおほかり、佐方、後閑の兩教授をはじめ師範學校教師の方々も禮式につきては刀自がをしへ子のうちなり、げに雙松亭が門下生のうちなり

刀自が父明義大人は、舊久留米藩士にして、後舊幕臣にあげられ、二男修義氏を久留米藩にとゞめ、四男菊四郎氏をして家業をつがしめられしに、はやく其道にたゝでうせたまひぬ、かくて刀自其のちをうけて禮節の家統をつぎたまへるなり

このごろ刀自、をしへ子たちの教授方研究のため、日本女學校々長西氏の懇請を入れたまひて、其門人を督して同校に教授の勞をとられぬ、

刀自がをさむる所の技藝のうちにつきても、茶道は中田宗閑につき、彈琴は山木檢校につきて深く究められたり、其ほかさま〴〵の技藝を應用したまひて、禮節教授上に、虛飾なく實用を旨とすゝめたまふは、誠に現今の斯道の大家として、他にならぶものなきは論ひなき事なるべし

●●●●●

●福田米子刀自　前高等師範校教諭なる刀自は舊幕臣にして、明治六年より殆ど三十年の久しき高等師範學校に奉職して、子女を教育せしの功實に少なからず昨夏病に犯されて同校を辭し今は閑居して靜に療養を事とせり刀自二女あり長女は即ち現文部大臣菊地大麓氏夫人にして次女は篠崎氏に嫁し、皆婦德ありて令聞高し、以て刀自が家庭の如何に整肅なりしかを想ひ見るべし

●●●●●

●師岡須賀子刀自　日本女學校教諭なる刀自は

明治七年七月東京芝に生る。國學大家故正臣翁の長女也。その頃父君は、官幣大社松尾神社の大宮司として西京におはせしかば、母君能く家を守り專ら刀自の養育に意をそゝぎ家名を耻かしめざらむことを期したりき。刀自幼より穎悟、五才の時高等師範學校附屬小學校に入り、ついで同所高等小學校に通學せしが、明治十八年病にかゝりて退學し、再び家庭の教を受くるに至りぬ。間もなく東京府免許狀を得て、明治廿五年香蘭女學校及び女子文藝學舍の講師に聘せられ、こゝに教鞭を取る事兩三年。明治卅年春福井高等女學校教諭兼學監となり傍ら女子師範學校取締の内命を受けて學生の監督に怠りなかりき。されど卅二年父君病の爲めに東京に歸られ、山河遥かに隔たり雁の便さへもどかしければ、刀自の心痛大方ならず。いかでその膝下に奉侍して朝夕の孝養を盡さむものと思ひつる折柄、みづからしも耳の疾に犯されければ、斷然意を決して故園に歸りぬ。されど徒に過すべきにあらざれば、兩親に仕ふる暇、國史國文講習會國語講習會等の講師となりしが父君の逝去に遭ひ後愛敬女學校に入り、校長に代つて凡ての事務を鞅掌し更に居を赤坂に定む。其間國語傳習所高等師範學校豫備科の教諭及び幹事と日本女學校の教員を兼ねしが、偶感ずる所ありて悉く兼職を辭し目下日本女學校に於て重に國語歴史習字修身等を教授しなほ同校生徒を家庭に延いて之を薫育し目下廿餘名ありといふ。



# 學藝

## 和歌講義

藤丸つま子

不盡の山を望みてよめる

山邊赤人

天地のわかれしときゆ、かみさびて高くたふとき、するがなるふじの高嶺を、あまのはらふりさけみれば、わたる日のかげもかくろひ、てる月のひかりもみえず、しら雲もいゆきはゞかり、ときじくぞ雪はふりける。語りつぎ言ひつぎゆかむ。不盡のたかねは、

赤人の傳は、未だ詳かならざれども、柿本人麿と名を齊ふし、和歌を以て聞ゆ。古今集の序に「人麿は赤人の上に立ち難く赤人は人麿の上に立ち難くなんありける」とげにさもあるべし。その詠める歌を見るに、殊に短歌に秀でたるものの如し。聖武天皇の神龜の初年、駕に從ひて紀伊に行き、天平年中吉野の離宮に陪し、また嘗て春日に詣り、伊豫の温泉に浴し、到る處皆彼が錦嚢によりて瓊玉の詩と化す。後世稱して歌聖とするも、亦偶然にあらざる也。この歌は、即東に遊びたる時讀みしものにて、乘せて萬葉集にあり反歌の田子の浦にうちいでゝ見れば云々は、百人首にもいでゝ、人口に膾炙せり。

◎語釋　●天地のわかれしときは　天地開闢の時よりにて、ゆは從、自なり　●かみさびて　神進びての意即ち神と座してカウ〳〵シキ事　●するがなる云々駿河の國にある富士の高嶺也

●天の原ふりさけみれば大空を仰ぎ見れば也 ●わたる日も云々大空を渡る日の陰も隱れて也 隱ろひは隱りを延べたるにて自動詞也 ●いゆきはばかり いは添へたる語行き憚ると同じ ●ときじくぞ云々非時の文字を充つ。時ならず常住などの意橘の古名を非時香菓といふそはこの菓は夏に熟し秋をへ霜雪にも堪へ採りて永く腐らす他の菓のなき時にも四時存するをもつて也 ●語りつぎ云々 後々迄も語り繼ぎ云ひ傳へてゆかうとなり ●不盡のたかねはのはゝ歎詞にてゝアの意

◉大意 天地開闢の昔、即ち神代より神と座して神々しく、高く貴き處の駿河の國にある富士の高嶺を仰いで見れば、實に宏大にして高き故に、大空を渡る日の陰も隱れ、皎々たる月の光も見えず、且白雲も山に遮られてそこに棚引いて他に行く事も出來ず、其頂には年中雪が降つて居る。斯く神々しくて其廣大なる山は、後世迄も語り傳へて行かむ、富士の高嶺はゝア。といふ意也。富士の由來より現世に及ぼし、神々敷所以を示し僅の文字を以て、巧に風韻を傳ふことにわたる日の云々より雪はふりけるまでにて、富士山のいかにも雄大なる實景をうつしてさながら見るが如し。結尾の不盡の高嶺はと感歎したるあたり、いとあはれ深し。

## 和畫通信講義（第廿五回）

山崎彩峨

墨畫にては、淡墨にて勾勒に畫くか、淡墨にて、没骨に畫くかなり。されど、墨畫にては多くは、勾勒畫あり。花心、花粉は、いづれも、濃墨にて

入るべし。枝幹は、狹墨にて書く。葉は、極めて淡き墨にて、沒骨に書き、濃墨にて、葉脈を入るるなり、時としては、濃墨にて、葉の周緣に、點體を打ち、鋸齒狀を示すことあり。されど、普通は、點體なきかた、樣よかるべし。

彩書にては、胡粉を含めたる筆先に、淡き胭脂を附して、書く、(筆貳本を使用し、筆端を水にて、ぼかすべし。筆の使用法は、前回參照)淺黃のものは、胡粉を含めたる筆先に、藍か郡靑かを附して書く。枝は、藍墨を挾墨となす。幹は、藍墨に、濃藍を片端に附して、兩端を書き、(藍墨―濃墨)また、片端に濃墨を附したるものにて、弧線を書く。(藍墨―濃墨)(貳頭連筆、また、刷毛にてもよし)子房は、淡き赭石にて描く。葉は、極めて淡き黃がちの靑色か、または、これに少しく代赭を和したるものにて、沒骨に書き、(葉色淡き方花のはへあり)乾きてのち、胭脂か藍墨かにて、葉脈を入る丶なり。(胭脂のかたよし)通常、花心は、胡粉、花粉は、黃色にてときたる胡粉にて書く。(これ、花心、花粉、ともに、臙脂にて、入る丶かた、よし)かくて、花心の中央に、黃がちの靑色を點ずるなり。

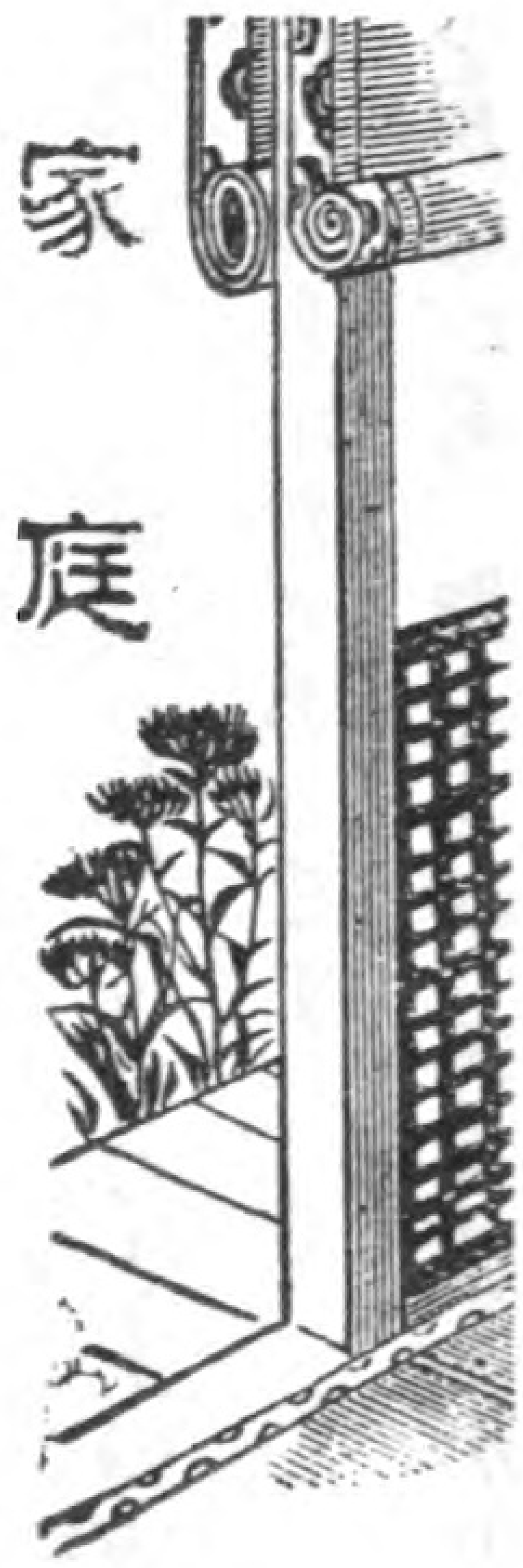
葉脈




幹圖








# 女禮心得草（三）

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

ある女とふ
歩みやうの事の御咄のうちに、兩手を帶の下
通にをさめてとありますのと、帶のほとりに
おくともありますが、どちらが宜敷のでござ
ります

きよこたふ
帶のほとりと申しますのは、男のかたによ
つた申しやうで、帶の下どほりとあるかたが
其まゝうつしたことばですから勿論よろしい
のです

行逢ひたる時の禮
これは座敷にても庭上にても道路にても、ふと人
にあひたる時のうやまひの仕方で、其仕方の名も
ゆきあひのゐや、又古はうづくまりすわる禮など
と申します仕方で

◎上の部
貴いかたに、座敷、又庭上などにて、あひました
時に致しまするのをウヅクマリスワル禮と申しま
す、どういたしましても、上が上の位の御方なれ
ば、かういたさねばなりまますまい
　其いたしかたは
ふとまゐりあひざまに、すぐに左の足を、右足よ
りも半足あとへ引まして、左の膝をつき、又右の
ひざをもつきまして、其ひざとともに左右の兩手
をもつきます

座敷にてたゝみ敷の所、又板じきの所にても、右のいたしかたにせねばなりませぬ

庭上におきましても、上が上の位の彼方には、かく兩膝をついてせねば、まことのうやまひができません

○只今では、上が上の御方にまゐりあひましても、立ながらこしをかゞめて目禮をいたすのが世上のさだめのやうですから、上が上の位の御方に對する禮はなくなつてをるのです

◎中の部

座敷または庭上において、ふとまゐりあひました人によりまして、立とゞまりまして、そとこしをかゞめまして、兩手は兩ひざのわたりまでさげましてうやまひますのは、われよりそつと上の方に對する時のいたしかたであります

是は其人を見ながら、たゞちにそつと腰をかゞむるので、何たびもことさらにいたしてはなりませぬ

われよりそつと上と申しますと、同じほどの人でも目上であるといふうやまふべき人に對してのいたしかたであります

しかし、前の上の部と、この中の部との間にも、それ〳〵心得があります

◉下の部

是はわれらとおなじほどの人と、ふとまゐりあひました時にする仕方と、われより下の人との仕方です

おなじほどの人とまゐりあひました時には、人を見てそとかほをうつぶけますほどの會釋をいたしますので、是がおなじほどの人との仕方の本式で

これより致しすぎますと、上中下の差別がたゝなくなつてしまひますから御用心なさいまし

しかし今の風俗では、何とも「コノアトクチゴモリテキコエズ」
又下の人にあひました時には、たゞ其方をむいて見たばかりでよろしいのです
このしかたも、上中下の位をみださないためには習はなくつてはならぬことであります
上の部をおこなふ場合に、中の部をおこなひ、中の部に、上の部をつかひ、下の部に、中の部をつかつてをりますのが、當今の女學校の女禮科の教授法、又只今の小笠原流の教授法でありますやうに思はれます
一寸御咄が長くなりましたが、たゞ小笠原流といひます明治の教授法には、このゆきあひの致しかたが、おもくたてられてをりません、そればかりでなく、正しい昔からの小笠原流にも、くはしくはたてられてをりません、それは

○上の部
上輩へはとく左へさけまして、なゝめに扣へ居りまして、兩手を膝の下までおろしまして禮をいたし、上輩のゆきすぎました時に、歩み出るのですといふほどの教授方で濟んでをります

## 裁縫（實修）

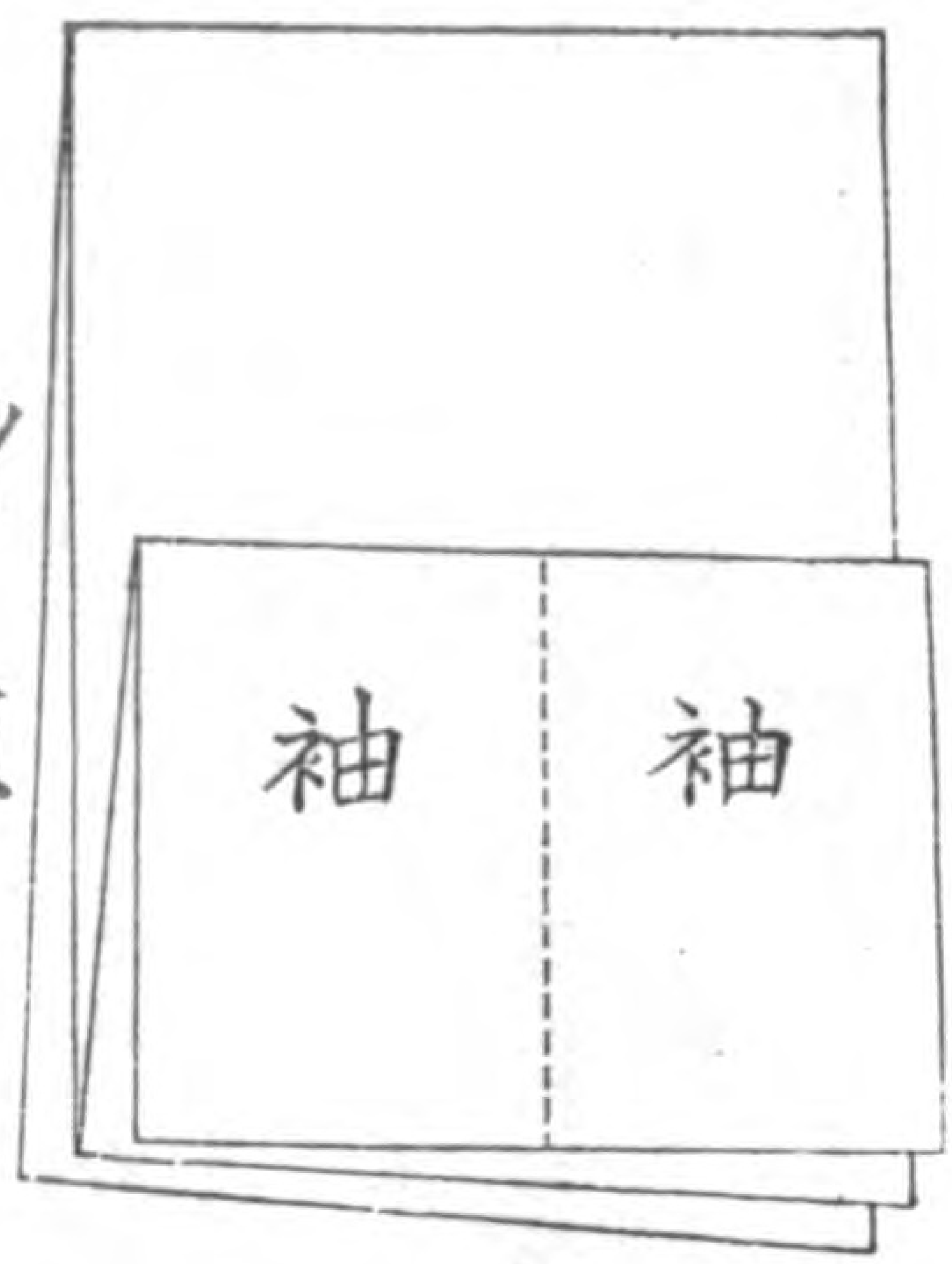
神奈川女子裁縫學校長　中村むめ子

裁縫の女子技藝中最も必要なることは、今更申上ぐるまでもなく、昔から婦工の一つに數へられて、婦女として知らで叶はぬことになつてをります、近來女子教育の盛なると共に、此等技術の學校も年々にふえ、又月々に發行せらるゝ處の、女學雜誌も誠に多くありますが、恐らく一つとして、裁

縫の載せてないものはありますまい、實に裁縫は女子としては、貴賤の別なく必ず心得べき務であります、斯樣な技術の事は書いてお話致した位では、迚も充分には盡されませぬが成るべく簡單に分り易く、お話致す積りで先づ卑近のものから說き始めませう、

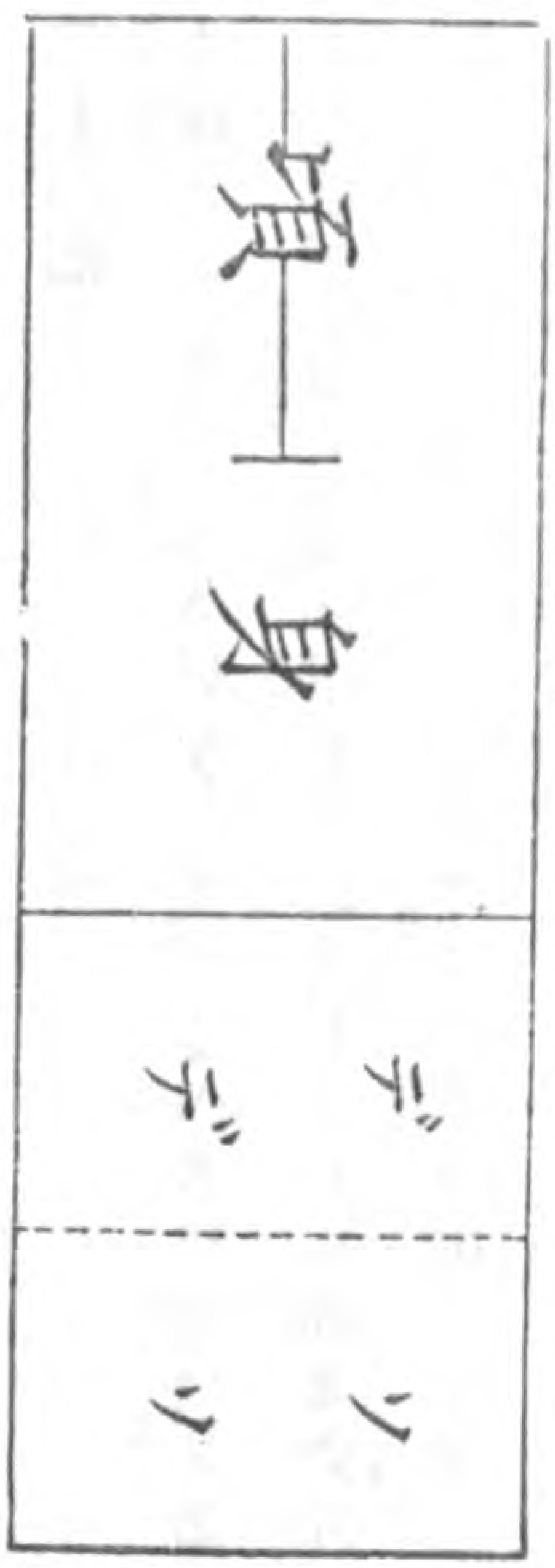
### 裁物の注意

衣服を裁ちますには、積り方に工夫をせねばなりません、其巧拙は外形上及び經濟上に係りますから必ず積り方の算式を用ゐて仕た方が宜しくあります、裁物を解きましたら能く織りきずや汚點などを調べ、布目を正して表を中に織り終りから卷きまして、卷いた方を自分の右にし織り始めで袖を取るのであります、而して袖から身頃と順に折ります、即ち下圖の如し




### 一つ身襦袢の裁ち方

衣服の內で最も少さきものは一つ身襦袢であります今茲にお話致しますものは半幅の左右の袖と、身頃は後一幅前半幅づゝ、衿は別切れを用ゐる積りであります、



今並幅三尺一寸の布を以て一つ身襦袢を裁つに袖丈け五寸五分にせば身丈何程なるか

裁ち切り寸法

| | | | |
|---|---|---|---|
| 袖丈 | 五寸五分 | 袖幅 | 四寸七分 |
| 身丈 | 一尺 | 衿肩明 | 七分 |
| 衿幅 | 二寸 | 衿丈 | 二尺三寸 |

積り方

31.—5.5×2÷2＝10.　身丈

身丈を知りて袖丈を知る法

31.—10.×2÷2＝5.5　袖丈

身丈と袖丈とを知りて用布を知る法

5.5×2＋10.×2＝31.　用布

同　上

5.5＋10.×2＝31.　用布



# 禮節談片（承前）

石井泰次郎

## 包結の栞（二）

まづ貞丈の學統を受て居る我輩のゆるしがたい節、節をあげて、夫より小笠原流の包結の正しい傳へとなつて居る、松岡辰方の學統を受て居る我輩のゆるしがたい點を摘拔して、包結の學びのために、世の中の人のまどはぬやうに注意を乞はうと思ふのである。

第一　包結圖說の包記のはしがきを解釋におげられながら、貞丈が名をあげず、包結圖說より取れるよしをあげない事。

包結圖說の所載を其まゝに取て、禮式等の新刊にのせたのも多いが、皆、其責任をおびない編輯の

仕方で、中には伊勢流によると記したのもあるが、又小笠原流と名稱をつけたのもある。皆、包結其ものに對しての責任は帶て居ない。其著者に對して其出所を質せば、只書店の依賴によつて、名をかした計であると答へるのである。かく答へる位なのはよいとして、其他の多くは、唯編輯を以つて、營業として居る者の筆記であるから、責任をおびないのは明らかにわかつて居る。

であるから、包結圖說のまゝに記載しても、包結圖說の名をあげないのも、其まゝに質さないでもすんで居つた次第である。

所が、責任のある事を明らかに示された書が出版せられたのは、實によろこばしい、と思つて求めて一見したのが、即この包結のしをりである。

そこで前に御はなしいたした、序といひ、校閲といひ、有名な方々の姓名が記してある事と、編者が包結に對して、一師の敎へのみに甘んせずして、樣々にいたづかれて居る事が、世人に歡迎せらるる樣になつて居る。

誠に世人に歡迎せらるゝ樣になつて居るだけ、包結に關する責任も重大である。

重大の責任ある著書そのものゝ世益にあると、然らずして、世人を欺く料となるとの二途につきては、いやしくも、此栞をたのむ者の一考をわづらはすべき所である。

今は包結の技藝も盛んに傳へられて居るかはりに、色々なまがへものが多い。故に、其傳へを調べて居る人々の外には、其正僞の可否が慥められて居ないのである。

そこで包結の栞の名稱を以つて、世間にあらはるる書がなかつたのである。

包結のしをりは、上古、中古、近古、近世、今

代の包結に精通せる者の手によつて、初めて世の中にあらはるべきものである。

包結の系統として假定したらば、禁中の有職の家業と、伊勢流、小笠原流、松岡流の傳統が、即包結教授上の系統と申してもよいのであらう。假にも、此系統を學び受けないかぎりは、包結の事の教授法として、包結のしをりなどの名稱をくだした、著書はあらはしがたいのである。

さて是から、本文のおはなしにかゝらう。

○包結圖説の包記のはじめにかうある。

およそ進物を紙にて包む事、高位の人はだんしを用ひらるべし。大なる物を包むには、大たかだん紙、小さき物は、小たかだんしを用ひ、其次は引合を用ひらるべし。大なる物は、大引合、小さき物は小引合を用ひ、其次は杉原を用ふべし。何れも紙一重に包むべし。物によりて、紙一かさねをつぎたる如くならべて包むべし

かくかゝれてある。是は、天保年間刊本の包結圖説の、包記の緒言の一條である。寳暦年間に伊勢貞丈翁が筆記せられたのを、後に上木したのである。

○包結の栞の解釋にはかうある。

凡て物を包むには法式ありて、其物によりて異なり。又、その包む紙にも大小種々ありて、檀紙を最も貴きものとす。さて此の檀紙にも大小あり、大なるものを包むには、大高檀紙を用ゐ、小なるを包むには、小高檀紙を用ゐる、其次に杉原、或は奉書紙を用ゐるなり。云々。何れも紙一重にて包めども、物によりては二枚を重ね、或は横に併べて包むこともあるなり。

いかにも、包結圖説をやきなほしたのであるだらうとは、たれにもわかる事である。次にも包結圖説に、

○物を包むには、其物の紙のそとへ少し見ゆる様に、兩はしを出して包む物なり。何ともみえぬ様に、紙の内へ包みこむる事あるべからず、其物の大小に隨ひて、包紙を少し短く折て包むべし。但藥香などは、こぼるゝ物なる間、包みこむべし。

其外の進物は、紙の外へ端を出して、直にそれと見ゆる間、上書する事なし。

○包たる物に、其物の名を書付る事はなき事なり。包紙の内の物の名數いかほどゝいふ事は、目録に書くなり。其爲の目録なり。

と記されてあるのを燒なほして、包結の栞にはかうかいてある。

○物を包むには、其物の兩端を包紙の上下へ少しく出して、直ちにその物と見ゆる樣に包むべし。されば少きものは、紙を短かく折りて包む。又物によりては、包み込む可きものもあるなり。凡て物の名。又は其數などは、目録に認むるもの故に、包紙の上に書かぬが法式なれども、通常に略して、其の包紙の上にかくもさまたげなし。

これも包結圖說のかきなほしであるが、末の詞は木に竹をついだやうで、とんと解がわからぬのである。其次にも、「包結圖說に、包みたる物を水引にて結ぶ事云々、」とあるのを取つて、包結の栞には、「包物を結ぶに、紅白色の水引を用ひるは」と書きなほされてある。又、其他の條々も、多分はやきなほしであらう。片輪結云々の條も、兩輪云云の條も、皆かきなほしである。包結のしをりの此解釋のうちに、貞丈の名をあげないのは、著者自身の教授法とでも爲てをるのであらう。甚だ、緒言につゞいての著者の見識の存する所と思はれる。さすがは清水廣長の大人の門人の資格で、げに相當の解釋の仕方であらう。

こゝまでは大たいの事がわかる、包結について注意すべき點の一二である。つぎ〳〵に御話しいたすのは、全卷の紐結、包物の一ツ一ツについて、其正邪の存する所を明らかにしらべてゆく御話である。



## だいどころ

# 豆腐料理（續）

割烹學校講師　石井湧太郎

豆腐は料理に應じて大抵に切つて、ざつと一沸湯煮してにが水を煮拔て置くのがよろしい夫れで又ざつと湯煮して水に浸して置けば夏日にも數時間は饐ずして持ちます、

大抵豆腐、松茸、筍は唯一種づゝ煮たのが美味のである、

豆腐の切方、

常の豆腐を細かく切るには崩れ易いものです夫れは薄刃庖丁に酢を塗つて切りますれば何樣にも自由に切れます夫れで水に取つて酢の氣を去つてつかふのです

豆腐素麵の拵へやう、

豆腐を擂鉢で能く擂つて夫れから馬尾篩で裏濾を二三度して美濃紙を薄く伸し付けて又其の上に紙を張り付けまして蒸籠でむすのです然して細く紙も共に切りまして夫れを水に入れますと紙が自然に取れます食しますには煮汁醬油を用ゐて宜しい

唐豆腐拵方

豆腐の水氣を能く切りまして厚さ一寸、長さ二寸巾一寸五分位に切つて、鍋に醬油を入れて煮まして沸立た時を度として豆腐を揚げて笊などに並べて冷して置き用ゐる時に一二分の厚さに切り食します又番椒を醬油の中へ切り交せて辛味を付けても宜しい

粉皮豆腐の拵やう、

是れは豆腐の水氣を能く去りまして奴豆腐位に切

りまして、それで葛粉の米粒位のかたまりを盃の上にあらして置て、其の上に右の豆腐を轉して、粉皮とするのです、胡麻の油か叉豚の製し油で揚げて、大根卸に醬油で食しますので、成るべく揚げ立が美味うございます、

煮抜豆腐の拵やう、

菓子昆布を水でざつと洗ひ鍋に敷きまして其の上に燒豆腐を好きやうに切つて並べ水を入れて氣永に煮泛のです豆腐に少し巣の立つて來た時分に醬油に味淋か酒等を入れました味を付けるので昆布も切り方して一所に食して宜しいのです、

湯豆腐の仕方、

湯豆腐はやはり鍋底に昆布を一面に布きまして豆腐を奴に切つたのを並べて煮ますので是れは勿論燒かない豆腐ですつゆは煮汁醬油です藥味は揉海苔か葱大根おろし夫れでなければ、生姜味噌葱味噌もよろしくわります、一寸一盃の酒肴には至極手輕でわります、尤も寒い時にはつゆも熱くして用ゐます。




# 女子服飾の沿革（承前）

椎園信成

第二十二代雄略天皇の時代に一般の服裝を改良しやうとせられたが、何分此時は凡ての事がいそがしかつた爲に成就しなかつたが、其後三十三代の推古天皇の十一年二月に爲て、皇太子厩戸皇子、十七條の憲法を作られた際、新に大徳、小徳大仁小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大

智小智の十二階を定められ、朝官の冠をも位階に依て其色を區別せられた、從來はまだ冠を以て人の尊卑を別つ制度はなかつたのであるが、此時に至つて始て冠位の沙汰が在つた、此時の冠は皆絁を以て作つたのであります、故に古へ裝飾の具として居つた髻華髮の如きものは唯朝廷の儀式や神社の祭式などの時に冠につくる外は平日用ゐない樣になりました、

次で孝德天皇の大化年中、皇太子中大兄皇子、內臣の藤原鎌足などの人が相計て唐土の制度を斟酌し、我邦百般の制度を定められた時、冠位の制度も改めて、織、繡、紫、錦、青、黑、建武、の七色となし、初位の建武を除いて、他のは各々大小の二つに別ち、併せて十三階とし、冠の等級に依て服の色を定められた、冠は錦繡を以て作つたのを上等のものとし、絹を以て作たものを下等とし、色は深紫を貴しとなし、綠色を卑しきものとしてある、其後間もなく大化五年に增加して十九階とせられたが、天智天皇の時廿六階となされた

第四十代天武天皇、壬申の亂を平定せられて淨見原に宮居を定められてから、諸臣と相謀て孝德天皇以來の制度を基として律令を定め、眞人、朝臣宿禰、忌寸、道師、臣、連、稻置、と八色の姓を定め、同時に從來の冠位と云ふものをも廢せられた、其時の詔と云ふは、

親王百官諸人よ今より後は、位冠及び襅褶脛裳を着用すること勿れ、又膳部夫采女等の手繦肩巾も用ゐる事勿れ、

この樣な詔が出た、併し冠位は今迄の通りに保存して上下の等級を別つて居られたが、間もなく

これも廢して、新に漆紗冠と云ふをつくり一般の人に着用せしむ、これは紗にて作り、それを漆塗にしたもので女子も着けて居つたものらしい。

次で十三年四月に又詔が出た、それは

衣服は男女とも襴のあるのも、襴のないのも又紆紐で在うが、長紐で在うが自分の好み次第着用して差支へない、但し會合などの節は襴のある衣を着て長紐をつけよ、男子には圭冠あれば、これを着用して、括り緒の袴を着けよ

此の詔によりて見ますれば、大化前後の衣服には襴のあるのと無いのとの二種在つたのである又此詔の中に長紐知紐と云ふことがある、これは古制の服につけてある紐の、其中心に當り短かいのを短紐と云ひ、長くて結び束ねた先の下迄垂れて居るのを長紐と云つたのです、又圭冠と云ふのは後世の立烏帽子に似たものである。

次で同十四年正月、更に爵位の號を改正し、親王諸王は十二階とし、臣下は四十八階に別ち、各々朝服の色を定められた、其後持統天皇の朱鳥元年になつて、天武天皇の定められた制を改め同四年、朝廷に仕へて居る人々及び畿内の人を九等に別ち、朝服の色をも黒紫、赤紫、緋、深緑、淺緑、深縹、淺縹に別たれ、傑し人も卑しき人も一階に緂の帶をしめ、白袴を用ゐる事と定められた、其餘は從前の通りで在つたが暫くして又令が出た、

公卿及び百僚の位を有して居るものは今より後自己の家に在るとも、必ず朝服を着け、職を有して居る者は毎朝門を開かぬ迄に參内せねばならぬ

此詔によつて見ますれば當時未だ朝服が一般に

行はれて居なかつた事がわかる
次て第四十三代文武天皇の太寶二年、新令を發布に成た、此中に衣服令と云つて、男女の衣服に關する制度を立てられたのである、此時の服制は後に御咄し致すつもりですから、此處にては申しませぬが、この改革で、すつかり、男女、貴賤の服裝が大に改まつて來ました、此時の制に、貴人にて禮服及び朝服の二種が出來、無位の者及び庶人の服には制服の一種が出來た、これは單に男子ばかりでなく女子も同じ事で在つたが其後、養老三年始て婦女子の服裝を定められて以來を云ふものは、從來の如く、唯長短とか廣狹とかに依て別つて居つた男女の服は全く別物となつて、男子の服女子の服と判然區別が出來たのである此後と云ふものはさしたる變遷もなくて九十年を過ごしたが、第五十二代嵯峨天皇の弘仁年中衣服に關する改革が在つて當時の服裝も全く一變する樣になりました、

前申したのは即ち、服飾なる者に就ての沿革を編年體に申したのであるが、次回よりは其服裝を記し、又此時代は皆左衽で在つた事、太寶の服制及び其衣服を說明し、次で別項には冠の事頭髮の事髮飾の事など一々圖を入れて說明したいと云ふ考へですから、少し面白くなくとも、我慢して讀んで頂きたいのである、(續出)

# 大和めぐり

井上頼文

七日(午前の記者は高松氏なり)

午前六時ばかり、車を列ねて出でたつ。山國なればにや、霧深く立ちこめて、大陽も光を失ひさな

から朧月夜の如し、此所には舊城跡のありと聞きしかど、滊車にと急ぎしかば、え見ざりき。まづ府中村にかゝりて、服部、印代、佐那具などを過ぐるに、霧ます〳〵いみじければ、皆かさをさせり。西柘植村に至りし頃は、朝日やう〳〵光を放ちて霧はれたり。それより、柏野、御代、下柘植を經て東柘植にかゝり、中柘植を過ぎて、上柘植なる停車場前に至る。折しも乘り込まむとせし其の滊車は、笛聲高く黑烟をはきて走り出でぬ。くやしき事限りなし、車引きたる男子等は、宿屋にてだに早うなしたらむには、かゝる事にもならざりけむをなどいふ。師の君たちも俄の緩漫を怒り給ひ、その罪を責めむとて、阿部和氏にはかき認めさせたまひき。かくて次の列車を待たむか、又此所より徒歩にて行かむかと、師の君たちの相はかられしに、次のを待たむと言ふ方われらが中にも多かりければ、あたりの山に登りなどして二時三時を費しつゝ、發車の時も近づきければ、數多の客停車場に集りぬ。其が中に人々の目をひきしは、岡田組といふ旗持ちたる渡韓の人夫なりけり、その數二十人ばかりにて、いづれも骨格たくましき男子のみ。中には刀めくものを携へたるもありき。

唐國に行くとし聞けばえだちするしづのをさへも羨まれけり。此の度は草津の方へと津の方へとの滊車同じ時に來たり、彼の人夫らは草津行きの方に廻りぬ。おのれらは津行の方に乘る。行き行きて加太の峠にかゝりし程、車少しよどむやうなりしは、上り樣なればなるべし。隧道の常闇二つ三つ過ぎて間もなく關の停車場に着きぬ。時に正午十二時なりき。此所より三橋教授と松本氏とは病氣のため津迄乘車せむとて袖を分たれたり。お

のれらは線路の片への、田圃にて晝食をへ、一身田なる専修寺に待合はする事と定めてゆく。おのれは宮島、井上、山本の教授たちとおくれて立ちぬ。時に十二時半。少しばかり行きて初めて追ひ及きしは阿知利氏なりけり。やがて宮島教授、今日は最後の競走を試みむもおもしろからずやと言はる。さなりと答へて共に急ぐ。後を見かへれば井上山本の二教授と阿知和氏と遠く後になられたり。猶急ぎ急ぎて先なる一群を乗り越えしに遙の先に森氏見ゆ。又急ぎて追ひ及きしに、猶先に二人行くあり。はしりて追ひつけば、舘、澤田の兩氏なりけり。此の先に行きつる者ありやと問ふに中村氏行けりといふ。さては是には及ばじかと、又も足を早めてひた走りに走り行けど影だに見えず、遇ふ人毎に問へどもあはずといふ。やがて大塚氏走り來て、此の群は三人となりぬ。猶急ぎて鈴鹿郡、古廐村、奄藝郡、明村、字、楠原村を過ぎ村はづれより路傍の人に教へられて近道といふに入りぬ。細道多きにまよひつゝ、たどり行きて漸く本道に出でたり。されど中村氏は見えず。さてはあざむかれたり後の一群の内なりしなるべしなど語らふ程に後より呼ぶを見れば果して中村氏なり。是より四人して行くに森氏また走り來たり。しりへに安藤氏も見ゆ。こはそもいかに。かく迄急ぎける者をとてくやむ安藤氏にはおひつかずまじとて、殊更に歩みをゆるべ見かへりつゝ早く早くと誘へば困じげに走りて、漸く近づくを待ちて、皆駈け出づれば、いとうらめしげにあと追ふもをかし。是よりは一人も群には加へじなど言ひつゝ走るに、程なく、一身田村に入る。専修寺も見ゆ。此の時井上教授と阿知和、近藤の二氏とは車走らせて來られたり。宮島教授は聲をあげ、

此處まで來りて乘り越えられむは殘念なりはしれや。はしれ。一人も車に後るなと、呼ばはりつゝ眞さきに駈け出でらる。おのれもしばしつゝきしかど毛布など身にまきたれば思ふまゝならず。井上教授の車を待ちて之を載せ、又走りいづ。專修寺はます〳〵近くなりぬ。かしこまでぞと息もつがずて車を遠く追ひ越しつ。やがて宮島教授を跡にし、森、中村の二氏に追ひ及き大塚氏をもうち越したり。今日の先導に。今一息ぞと勇みて走る此のあたりの人々門に立ちて怪しげに眺めたり。車を見ればいみじう遲れぬ。(評得意想ふべし。惜む子が健脚をして、唐が原に試みしめざるを。)あな心地よやなどおもふ程に、大塚氏もはせつけたり。おくれはせじと先を爭ひしが停車場の前に到りて一足おくれぬ。くやしや。寺の門迄にはと競ひしかども、遂に大塚氏に先だゝれたり。先本堂の階にて息ふ。時に午後二時半。此の寺の結構いと壯大にて其の道の學校もありき。かくて遲れし人々をまち合はせて、津市に入り櫻水樓に宿る。此の日行程、凡十四里餘。

## ゑひがたり(一)

本居若水

女は髮のめでたからんこそと、氣疎き何某がすね者すら云へれば、まいて、世の常の人の見たらん程は、云ふも更なりや。さるを、此の頃年若き女の、あはれ、馬ならんには、栗毛、鹿毛など、もてはやされぬべき髮を、肩のあたりに垂れて、まばゆしとしもなくふるまひわたりたる。ことに結びたるりボンのいと艶なるは、髮の色も一際見劣りせられてなん。房やかに被ひかゝりし肩のあた

り、さすがに、黒くつやゝかなるは捨てがたきふしもあれど。

髪の色の赤きは、なか〳〵に、垂れたるぞよきと云ふめれど、さりとて、彼の異國のゴールデンヘーアには比ぶべくもあらじ。ことに、直やかなる毛をさへ、しひてあらぬ癖つけて、波立たしめしはいとゞあいなくて、其の人の心の奥さへぞはかり知らるゝよ。

油したゝかにつけて結ひ上げたる髪の、衣の襟を汚さん事を恐れてにや、細き首を前ざまに伸ばして、額ごしに上眼遣ひて人を見る様は、これもあいなき物の内に數へつべし。

男も女も、近き頃まで、もみ上げの長きを愛づる習ひなりしに、今はかゝる風おとろへしにや。聞かず。まして今様の若き男などは、長きをきらひ、耳の上のあたりまで剃り上げて、われは顔に鼻のあたりうごめかしてぞふるまひ歩くなる。

今は、やう〳〵稀になりにたれども、猶書生の羽織に長き紐つけて、先を少さく結べる者、をり〳〵は見受くるなり。こは明暦の頃、世に行はれし丹前風のなごりあるべくや。ことに、結びし其の紐を首にかくる事は、革羽織着る鳶の者のふりをまねびたるものあるべくて、馴着かしからずなん。

すぎし頃、月あかき夜、小石川のほとりをせうえうしたりしに、年若き女の高らかに唐詩うちずんじて、うそぶき歩くを見たりき。同じみやび心ならんには、今少し優ある方のあらましかばとこそ覺えしか。

我國の遠き昔の様を思へば、女は、たゞ家に籠りてのみあるべきには非ず。中頃、支那の教、佛の道など入り來てより、やう〳〵雄々しき心も失せ、ひたすらにたれこむる習ひとはなりしなり。今ま

た、いにしへにかへりて、人にも出で交らひ、公の事にさへかゝづらふはいと喜ばしき物から、是も、ひたすらにさまよひ歩きて、はしたなくふるまひたらんには、なか〳〵に口惜しかりぬべし。

萬の事みちたらひゆく今の世に、女のかぶり物のみは、定まりたるものも無きぞ口惜しきや。ふく面の頭巾といふ物も、ななつしからぬ形なりけり。古き世の、いちめ笠、もみぢ笠、桔梗笠なども、今の世の人にはつき〴〵しからじ。さては鳥追のあみ笠、旅の女の菅笠も卑しげなり。古きになづまず、さりとて、新らしきにすぎずして、よき形は無きものにや。

冬の日に、日傘もすさまじかるべく、夏の日に、頭巾もふさはしからざるべし。都おほ路の、塵ひじ立ちまがふ中を髮に油をつけて、ものし給ふ姫たちは、如何し給はんずらん。

女のうす衣かづきて立てる姿は、いとをかし。これに思ひ合せて、今の世の人の、このみに入るべきものを作り出でたらんには、如何あらん。

學びやのかへさにやあらん、三人、四人つれだち來る姫たちの、往來の人を見ては、互に突きじろひ目くはせて、打ちさゞめき、をり〳〵は、何やらん高らかに笑ひ興ずる樣、いとねたしや。かゝる折には、おのれのみならで、誰も〳〵、行きあひうくやおぼすらんかし。

歌は心だに麗はしかりなんには、姿とゝのはず、詞からてづゝなりとも、よかなりと云ふは、理にすぎたるこちたきひが事なりけり。この頃の歌のやうに、ことさらに、すねび云ひゆがめたるは、如何なる心ありてにかあるらん。まして、さる歌を女のよみいでたるは、一際、ゆかしからぬ業にこそ。

女の漢語をまじへて、はゞからず人と語れる樣は、極熱の風藥と云へりけん、何がしが娘の面かげも思ひ出されて、そゞろにうちゑまるゝ業なるを、この頃は更にまた、洋語をさへ打ちまじふらんよ。

羽子つく戯れは、いとをかしき業ありけり。ことに女の運動としては、遙に手鞠にも勝りたるべし。あはれこの業、年の始のみならで、常の日にも學のいとま〳〵には、物する事としたらんは如何に。たゞ、顔に墨、あるは白き物など塗る事は無くもがな。

早くその業絶えたれど、いにしへ行はれし毬打、ぶり〳〵、など云ふ戯れの、今行はるゝテニス、クリツケツトなどに似たるぞをかしきや。

白き絹の手巾もて、口のあたりを打ち被ひ、うしろ又は前にて結べる風、過ぎし年、いたく世に行はれたりしが、その樣いと卑しげにて、ゆかしからず。去年より今年にかけては、稍稀になりつれど、猶たま〳〵には見うくるなり。早く此の風絶えよかし、よき姫たちの見ならひもぞせん。

自轉車はをかしき物なれど、それも、袖長き衣、打ちまとひて乘りたるは、いと見苦し。げにこは一向に、洋服のものなりけり。男も女も。

若き女の袴着たるは、いとつき〳〵し、えび色、むらさき、何れも。老いたる女の袴着たるは、いとすさまじ、えび色、むらさきなどは、ことに。

女のよろづ聲高に物うち云ひたるは、老いたるも若きもいとあいなき業なれど、さりとてひたすらに恥らひてひきつくろひ、虫の鳴くらん聲音して語り出たらんもどかしかるべし。この心遣ひによりてぞ、大方女の性は物越しにも知らるゝ。

# 訪問錄

吾水生

一家の主婦としては、種々雜多ある用事があるが、其中で殊に困難に感ぜらるゝのは、恐らくは奴婢問題であらう。單に嚴肅なる命令だけに止まつて、少しも同情心がなければ、表面上は容易に制御して行けるけれども、彼等は衷心面白くないから、忽ち井戸端會議を始める。處が、あまり寛大に失し、偏狹なる慈悲に流れると漸く增長跋扈する樣にある。畢竟彼等は、無知文盲の者が大部分を占めて居る故、此位の劣等なる思想を有するのは當然で是非のない次第である。いはゞ教育を受ける事が出來ないで、或は生活の爲に或は見習の爲に多くは住込むのであるからそれを思ひ遣る心があくて、威嚴を保たんとて奴隷的に使役するのは、もとより間違つた話で之と等しく一家を皆平等と認めて彼等をして狎れしめるのも甚宜しくない事といはねばならぬ。眞に女子と小人とは養ひ難しで彼等が裏面に廻つて不平を鳴らし嘆聲を洩らしさては主人の惡口指彈をする者が少くない。而し是等の事實を根本から斷絶せしめるのは到底ムヅケ敷事であるが、今日主婦の多數は此問題を余り輕視して、最初より實際見込みをつけて雇ふ者は稀であるから之に教育的感化を與るなどの事は夢にだも見得べからざる所である。元來眞正の教育は學校で施すよりか、其家庭に於ける訓練管理が偉大なる効力ある事は識者の既に認めてある事で、言ひ換ふれば家庭は教育を施すに最も適當なる教場である故に不良の奴婢は家事上の差支を生じ且つ外見も惡い殊に其家族兒女に對して懼るべき惡影響を及ぼすから唯々服從させる丈に止まらず、

之に精神的敎化を與へ眞に心から服從し崇拜し敬慕する樣でなければならぬ謂ふ迄もなく刀自は精神的敎育家で前述の如き考を持つて居らるゝであらう。故に婢女なども自然感化を受けて敬慕崇拜之に則らむ事を勉めて居る僅に此一端だけでも家庭の全豹を豫想される凡て端然と一擧一動悉く禮儀作法に適つて詞遣ひといひ應對といひ凡て優美で温順なるには感ぜざるを得ない。女中は常に本邸(令息一郎氏邸)に往來共用して居るが何處に居ても裏表なく眞實に立働くさうである。が刀自は尙之に實用的學問即ち家政裁縫割烹なども敎へる。勿論學校の如く系統を立てゝではない實際其時々に當つて彼はこう是はそうと云ふ樣に丁寧に說明する。誠にこの女中などは比較的幸福の者と云はねばならぬ。又裁縫の如きも刀自は大抵自分の物は自分で爲し、折々は令孫や其他の人々の物迄なされる故其傍に在つて見習ひ又指導されるから自然其技にも熟するであらう。一體刀自は幼少の時から斯道に堪能で今日尙これを捨てぬ而も端正優美の風をせられて何となく氣高い。實に昔苦心せられた當事を忘れないのは誠に敬服の外はない。

夫れからフト眼に入つたのは座敷の一隅にある半折の揮毫である。刀自が繪畫に長けたる事は聞たが未だ達筆なる事を知らなかつた。が其文字は温柔方正とあつて實に女性の鑑戒とすべきものである筆力勇健字々皆躍如として活動し恰も雲蒸龍變ともいふべき姿である是は故國で女子の學校を新設して其扁額を依賴せられたので辭するに由なく今試みに書いたのだと言はれた。刀自は斯の如く成功しても中々安んじない朝は必ず早く起き晝は複雜なる事業に從事して夜はこの閑靜なる一室に

孜々として勉強せられて居る多くの婦人達又は女學生等之に對して能く顔色あるか甚疑はしい者である之を要するに刀自が氣高い道徳家であると同時に其家庭は嚴粛の中に和氣藹々たる所がある。即ち寛嚴能く調和して趣味が多い。自分が模範を示して其家族が之に則るは恰も周の皇妃の様である今日單に形式に流れ又は放任に過ぎ或は道徳の規準に依らむ事を人に責め自分は關せず焉といふ自分勝手の主義とは全く反對で又俗間の樂隱居の様に贅澤を盡して優々日を送るとも全く類を異にし凡て質素で現今皆形式的ある世の中には絶好の家庭と云はざるを得ない

以上は 私 が目撃した事實を主とし聞いた事を多少加味したので家庭に對する御意見は逐づて記述し又刀自にも執筆して頂く事に致しませう(完)




## 家庭小説 ひめもゝ(後篇)

堀内新泉

さあ、好い時候に成りましたぞ、愉快にお遊びあさい、と云ふやうに、廣いお庭の桃や櫻を眞先に、いろ／＼お花は見事に五色に咲いたが、かわいさうに美代ちゃんは、戀しい姉さんに別れて後は、水に離れた魚のやうに、次第／＼に弱く成つて、顔の色もわるく成れば、頬の肉も落ちて仕舞つて、丁度去年のこの頃であつたが、軒近き櫻の花の、影がチラ／＼東風に動く、暖かいお椽頭で、口に椿の花瓣を含んで、うき世を他所に好きな姉さんと二人して、さも嬉し相にニコ／＼と笑ひな

がら、お手玉を取つたり、綾取を仕たりして、笑顔美しく遊んで居た時の美代ちやんとは、今年は丸で異つた娘のやうに身體も弱く、氣も沈み勝に成つて仕舞つた。

今日は土曜日。正午過に美代ちやんは、さも氣分でもわるさうに、獨りお友達におくれて「ア、最うわたしは、この世の中に樂みは無い」と云ふやうに打萎れて學校から下つて來たが、

「御父さん只今、おッ母さん只今」と云ふのも辛うで、目には早くも涙ぐみつゝ、姉さんと好く此處で遊んだ、例の圓窓の傍に來て、ソッと障子を開けて見れば、お庭の花は去年にも勝つて綺麗だが、美代ちやんには、これが却つて悲しいのである。

「お孃さん、御飯を召あがれな」

スッと障子を開けて、下女としては品の好い、

竹が兩手を仕へて云つた。

「欲しくないの」

少女は庭を見つめたまゝ、此方には振返りもせずに頭を振つた。

「だつて貴孃、朝も召あがらないぢやありませんか——お毒ですよ」

竹は再びおすゝめ申して見た。

「食べたくないの」

「だつて貴孃御中食も亦——」

竹は三度。

少女は、そを煩しといふやうに、

竹や、後生だから、最う左樣云はないで、早く、彼方に行つて頂戴よ」

「おいとしさうに」と云はぬばかりに、竹も涙含んで、少女の望み通りにした。

少女は何を數ふるか、白魚のやうな指を靜に屈

つて見て、

「モウ彼のお手紙を出してから、今日で丁度十日になるのに、今度は何故御返事を下さらないだらう——不斷はスグに下さるのに」

開窓の縁に、二ッの痩せた肘を突いて、涙に濕れた頰を支へつゝ、美代は今は花も見ず、氷の下の金魚よりも物靜に、ヂッと思案にくれた兩眼から、ホロリ〳〵と熱さうな涙が切りに溢れて來た。

「御孃さま、好い物を差進げませうか」

竹は何やら胸に抱いて、嫣然笑つて又入つて來た。

少女は何んとも返辭が無い。

「好いものですが——ホヽおいやですの」

「何んにも要らないのよ。早く彼方に行つておくれ」

少女は獨り靜な處に居るのを今は望むのである。即ちその精神に今は異狀を來したのだ。

「これでもおいや」

竹は何やらチラリと見せた。

「あ、頂戴！」

お腹の空いた稚兒の、母に乳房を見せられた時などのやうに、少女は竹に飛びついた。

此方は手紙と他の一包とを兩手に高く差上げて、美代子の顏を見下しながら、

「ぢや、これを差上げますから、お後で御飯を召あがつて下さるか」

「あゝ——食べますよ」

「ぢやア——」

少女は今まで待焦れて居た、懸しい〳〵姉の寫眞と手紙とを受取つた。

「ぢや此處に御飯を持つて參りませうね」

少女は、先づ寫眞の封を解きながら、

「後で其方に行つて食べるよ」
「ぢや屹度ですよ」
「行つてよ」
竹は滿足して去つた。
まだ燒き立ての姉が寫眞を、可懷しやと手に取つて、お美代は凝然眺むれば、束髮に雪のやうな薔薇の一輪、東京も早お羽織は要らぬやら、いづれは花の大模樣のお半襟のかゝつたお襦袢に、糸織らしい矢絣のおみ袷、鰕茶のお袴胸高に召して、ボタン止のお靴、すらりとした立姿の何處までも上品に、さて面影は眉長く目元やさしく、すつきりと鼻筋通つて、口元屹度引締り、未だに骨身に染みて居る、情が顏に何處と無く、寫眞ながらも暖に見はれて「美代ちやん」と優しい聲で、今にも口を利きさうである。
少女は一目見るよりも、顏を寫眞に差着けて、
「姉さん、わたしよ」
目は又忽ち淚に曇つて、
「會ひたいわ。最う別れてから三月に成つてよ」
「左樣だね」
何處とも無しに優しい聲で、姉が答へるやうでもある。
少女は一心に寫眞を瞶めて、
「姉さん、早く歸つて頂戴な。會いたいわ、見たいわ――」
顏に寫眞を押當てゝ、
「アゝ行きたいな――姉さんの傍に」
少女はワッと泣出した。
日影は俄に消えた。
外は花ぐもりするのであらうか、圓窓の障子の
他の子は惡いが、吾が子は中々左樣でない母親は、物おもはしげに長火鉢の前に座つて、鐵瓶の

孜々として勉强せられて居る多くの婦人達又は女學生等之に對して能く顏色あるか甚疑はしい者である之を要するに刀自が氣高い道德家であると同時に其家庭は嚴肅の中に和氣藹々たる所がある。即ち寬嚴能く調和して趣味が多い。自分が模範を示して其家族が之に則るは恰も周の皇妃の樣である今日單に形式に流れ又は放任に過ぎ或は道德の規準に依らむ事を人に責め自分は關せず焉といふ自分勝手の主義とは全く反對で又俗間の樂隱居の樣に贅澤を盡して優々日を送るとも全く類を異にし凡て質素で現今皆形式的なる世の中には絶好の家庭と云はざるを得ない

以上は私が目擊した事實を主とし聞いた事を多少加味したので家庭に對する御意見は逐づて記述し又刀自にも執筆して頂く事に致しませう(完)




## 家庭小説　ひめもゝ(後篇)

堀内新泉

さあ、好い時候に成りましたぞ、愉快にお遊びなさい、と云ふやうに、廣いお庭の桃や櫻を眞先に、いろ〳〵お花は見事に五色に咲いたが、かわいさうに美代ちやんは、戀しい姉さんに別れて後は、水に離れた魚のやうに、次第〳〵に弱く成つて、顏の色もわるく成れば、頰の肉も落ちて仕舞つて、丁度去年のこの頃であつたが、軒近き櫻の花の、影がチラ〳〵東風に動く、暖かいお椽頭で、口に椿の花瓣を含んで、うき世を他所に好きな姉さんと二人して、さも嬉し相にニコ〳〵と笑ひな

がら、お手玉を取つたり、綾取を仕たりして、笑顔美しく遊んで居た時の美代ちやんとは、今年は丸で異つた娘のやうに身體も弱く、氣も沈み勝に成つて仕舞つた。

今日は土曜日。正午過に美代ちやんは、さも氣分でもわるさうに、獨りお友達におくれて、「ア、最うわたしは、この世の中に樂みは無い」と云ふやうに打萎れて學校から下つて來たが、

「御父さん只今、おッ母さん只今」と云ふのも辛うで、目には早くも涙ぐみつゝ、姉さんと好く此處で遊んだ、例の圓窓の傍に來て、ソッと障子を開けて見れば、お庭の花は去年にも勝つて綺麗だが、美代ちやんには、これが却つて悲しいのである。

「お孃さん、御飯を召あがれな」

スッと障子を開けて、下女としては品の好い、竹が兩手を仕へて云つた。

「欲しくないの」

少女は庭を見つめたまゝ、此方には振返りもせずに頭を振つた。

「だつて貴孃、朝も召あがらないぢやありませんか——お毒ですよ」

竹は再びおすゝめ申して見た。

「食べたくないの」

「だつて貴孃御中食も亦——」

竹は三度。

少女は、さも煩しといふやうに、

竹や、後生だから、最う左樣云はないで、早く、彼方に行つて頂戴よ」

「おいとしさうに」と云はぬばかりに、竹も涙含んで、少女の望み通りにした。

少女は何を數ふるか、白魚のやうな指を靜に屈

つて見て、
「モウ彼のお手紙を出してから、今日で丁度十日になるのに、今度は何故御返事を下さらないだらう——不斷はスグに下さるのに」
圓窓の縁に、二ツの瘦せた肘を突いて、涙に濕れた頰を支へつゝ、美代は今は花も見ず、氷の下の金魚よりも物靜に、ヂツと思案にくれた兩眼から、ホロリ〳〵と熱さうな涙が切りに溢れて來た。
「御孃さま、好い物を差進げませうか」
竹は何やら胸に抱いて、嫣然笑つて又入つて來た。
少女は何んとも返辭が無い。
「好いものですが——ホヽおいやですの」
「何んにも要らないのよ。早く彼方に行つておくれ」
少女は獨り靜な處に居るのを今は望むのである。即ちその精神に今は異狀を來したのだ。
「これでもおいや」
竹は何やらチラリと見せた。
「あ、頂戴！」
お腹の空いた稚兒の、母に乳房を見せられた時のやうに、少女は竹に飛びついた。
此方は手紙と他の一包とを兩手に高く差上げて、美代子の顏を見下しながら、
「ぢや、これを差上げますから、お後で御飯を召あがつて下さるか」
「あヽ——食べますよ」
「ぢやア——」
少女は今まで待焦れて居た、戀しい〳〵姉の寫眞と手紙とを受取つた。
「ぢや此處に御飯を持つて參りませうね」
少女は、先づ寫眞の封を解きながら、

「後で其方に行つて食べるよ」
「ぢや屹度ですよ」
「行つてよ」
竹は滿足して去つた。
まだ燒き立ての姉が寫眞を、可懷しやと手に取つて、お美代は凝然眺むれば、束髮に雪のやうな薔薇の一輪、東京も早お羽織は要らぬやら、いづれは花の大模樣のお半襟のかゝつたお襦袢に、糸織らしい矢絣のおみ袷、鰕茶のお袴胸高に召して、ボタン止のお靴、すらりとした立姿の何處までも上品に、さて面影は眉長く目元やさしく、すつきりと鼻筋通つて、口元屹度引締り、未だに骨身に染みて居る、情が顏に何處と無く、寫眞ながらも暖に見はれて「美代ちやん」と優しい聲で、今にも口を利きさうである。
少女は一目見るよりも、顏を寫眞に差着けて、
「姉さん、わたしよ」
目は又忽ち涙に曇つて、
「會ひたいわ。最う別れてから三月に成つてよ」
「左樣だね」
何處とも無しに優しい聲で、姉が答へるやうでもある。
少女は一心に寫眞を瞶めて、
「姉さん、早く歸つて頂戴な。會いたいわ、見たいわ――」
顏に寫眞を押當てゝ、
「アヽ行きたいな――姉さんの傍に」
少女はワッと泣出した。
外は花ぐもりするのであらうか、圓窓の障子の日影は俄に消えた。
他の子は惡いが、吾が子は中々左樣でない母親は、物おもはしげに長火鉢の前に座つて、鐵瓶の

盞を拭きながら、
「竹や、お美代はまだ御飯を食べないかい」
「はい、まだ　」
「困るのえ、彼の子にも」
布巾を煙管に取代へて、
「彼の子は何んだか、近頃私に懐かないから、お前何んとか云つて賺して、一碗でも食べさして遣つておくれな――病ひでもすると困るからね」
「ぢや最一度おすゝめ申して見ませう」
竹は又奥の方に行つた。
「お嬢さま、まだですか。お茶も善うく沸いて居りますよ」
障子越に呼んで見たが返辭がない。少し開けて覗いて見れば、涙に濡れた手紙を前に擴げた儘、お美代は片手に寫眞を持つて、膝も崩さず疊に伏して、何うやらスヤ〳〵寢て居る樣子、焦れ泣きに泣いて泣いて泣き疲れて、その儘寢入つたものだと見える。
「アレまあお風を召しますよ」
忙いで押入から掻巻を取出して、竹はそつとお美代に着せた。
「お頭痛でも成さいますの」
吾が膝を枕に爲せて額に觸れば熱がある。
「お風を召しましたね」
今まで水仕事して居つた冷かな手に、輕く頭を揉みながら、そつと寫眞を採つて見て、
「オヽまあ、善くお寫り成すつて居らッしやること。誠にお情ぶかいお仁であつたが――」
他人の我さへお懐かしいのに、嘸やと竹はお美代の寐顔と寫眞とを見くらべて、これも女の目は早涙に濕んで來た。
「ほんとうにお懸然さうだわ、これ丈お慕ひなさ

るものを――」
涙を拭いて、吻と一ト息、片手を突つた竹が目に、不圖手紙が目に着いた。竹は一行覗くと倶に、假初にも他さまのお手紙を覗ふのは、善くないことだとは知りつゝも、一行見てはお了ひまで、最う讀まずには居られなんだ。

美代ちやんや御免なさいよ。こんどはお手紙の御返事も、それから又お約束の寫眞も大そうおそくなつてすまないのよ。どうか勘忍して頂戴な。姉さんは美代ちやんにこがれ〳〵て病氣になつて、この一週間ばかり、つい床につきましたからね、一度のお手紙と、それから美代ちやんのお寫眞とは、たしかに着いてよ、ありがたう。美代ちやんのお寫眞は姉さんが大切にして、夜は寒くないやうに抱いて寢て、晝は帶の間に入れて、何時も二人で學校に行くのよ美代ちやん。

そしてね、何時でも美代ちやんのことを思ひだした時は、そつとお寫眞を出して見て、頬にあてたり又撫でたりして居るのよ。美代ちやんも姉さんの寫眞を、また何うかさうしててうだいな――きつとさうして下さるでせうね、えゝ美代ちやんや。

竹はワッと泣き出した。
「おかわいさうに、おいとしい――嘸まあ大孃さまも――」
綴泣しながら又讀めば、

姉さんの目のせいだか知らないが、このお寫眞で見ると、ゝ美代ちやんは何んだかひどくお痩せのやうだが、さうでもなくつて。美代ちやんや後生ですから、何うか病はない樣にしててうだいな。姉さんは近ごろひどくやせてよ。ね、寫眞でもわかるでせう。ひどくやせたわ、皆なが

さう云つてよ——たゞモウ明けても暮れても美代ちやんが戀しいわ——ちよつとでもいゝから美代ちやんに會ひたいわ。こんどは又何か送つてあげてよ、待つて居ててうだいな。家のお庭の、桃だの櫻だの最うきれいに咲いたでせうね。東京も今は花の盛たわ。だが最う姉さんは美代ちやんが居ないから、何を見ても綺麗だとも賑かだとも思はないの、美代ちやん一度東京に來ててうだいな——美代ちやんに、見せてあげたいものが澤山あるわ。何時もお手紙でさう云つておくれだけれど、姉さんはモウお家には歸られないわ、美代ちやんは善うく知つて居るでせう。まだ何んだか頭痛がして、おもふやうにかかれないから、美代ちやん今度はこれ丈よ、さやうなら御機げんよう。

姉より

---

美代ちやんへ

讀み了つて、竹は益々鼻を詰らせ、

「まあ、何んと云ふお悠然さうなことだらう。今に何方も焦死なさるのだわ」

折から部屋の障子がスラりと開いた。

「おや、何うお仕だえ」

竹は泣顔を隱すには、奥さまのお入が餘り突然であつた。

「少しお風を召したやうでございますの」

「こんな所に毎夜一人で寢るから、夜具でも脱いたのだらうよ」

一寸額を觸つて見て、

「おや、まあ、これは大した熱だね竹や誰か早くお醫者さまに」

母は急いで寢床を延べた。竹と母との手に依つてそつと寢床に移された可憐の少女は、滿身早

や燃え立つばかりの熱である。

竹は一先この場を去つて、金盥に手早く水を汲んで來た。

「少しお頭をお冷し申してあげませう」

「あ、それが宜いよ」、

「お嬢さまいかゞです。お、ま、お熱いこと。今にお醫者さまが入らッしやいますよ、平どんが大急で行きましたから」

お美代は丸で夢中である。

母は手紙を見て居つたが、讀み終ると倶に切齒をして、引裂いて袖に入れた。竹は横目にヂロリと見たが、眉を寄せつゝ俯いた。

父も歸つた。醫者も來た。容體を聞きながら、先づ體温を計つて見て、醫者は少し、首をかたげた。

「はあ、大層お熱がありますな――三十九度五分」

東風が次第に霞を流して、庭の花にはポッ〳〵と雨が來た。

少女の病ひは、これが始めで日を追ふて篤く、數日の後は肺炎に成つた、醫者も今は一人で無く、二人と成り三人と成つて、中には一人の小兒科專門の學士も居るが、少女の病ひは唯最う危篤に陷るばかりである。

最早無論一口の牛乳も咽喉を通らぬのであるが、次第に弱る息の下にも、姉さん歸つて頂戴な」は日には幾度か繰返す。

流石邪見な母親も、これには終に爭ひかねて、「美代病氣、早く歸れ」と便りを仕たが、今日の今まで未だ歸つて來ぬ。

今日も蕭々と軒を繞る春雨ながらに日は暮た。

少女は最う目を開くことも稀である。傍に附添ふ兩親も、この四五日は日々に五體の肉が落ちた。

折から聞える暮鐘の音に、己に死に迫つたお美代は僅に目を開いて、何やら言ひたいやうに見える。

「美代ちやん、何うした、え丶」

母は我が子の口に耳を當つれば、お美代はやッとの思ひで口を開き、

「姉さんは未だア――」

「オヽ姉さんかい。最う今夜は必然歸るよ」

「會ひたい……」

「おヽ……」

母は眉間に後悔の色が初めて見はれた。

「ア丶苦しい、母さん……」

「オ丶撫でゝあげやうかい」

「いやア――姉さんに一度――」

「最う今に歸るだらうよ」

「母さん」

「何かい」

少女はホロリ目から落して、

「母さんは、何故、姉さんが惡いの――」

「母さんが惡かつた。美代ちやん何うか勘忍しておくれ。モウ決して姉さんを憎まないから――」

母は袖を顏に當てたが最うおそい。

三人の醫者が結切つて、彼此と心盡しの甲斐も無く、少女の病ひは刻一刻と革まつて、最早殆んど臨終の期に迫つて來たが、姉に心が殘ると見えて、まだ全く息を引取りはせぬ。

今夜の退汐に最う三十分といふ時に、待ち待つ姉は歸つて來た。

「美代ちやんや、姉さんが歸つてよ」

云ひも終らず姉は戀しい妹の、憔悴れた顏を一目見るより、聲を放つて泣出した。

少女は生々と目を開いて、

「姉さん」
「わいよ」
「歸つて來たの」
苦痛を忘れて、戀しい手を取り、口は利けぬが無言の中にも、ヂツと姉の顔を見つめて、やゝ暫く名殘を惜しむ。
母は今更目も開かず、
「美代ちやんや、最う姉さんもお歸りだから、早く治つて頂戴な」
少女は僅に頭を振つて、最早我が身は世に亡きものとの心を示し、
「母さんこれから姉さんを――何うか私の代にね――」
「オヽ、可愛がる〳〵、解つた〳〵その事なら、美代ちやん最う決して心をお殘しで無いよ」
庭にはサッと夜風が來て、綺麗に咲いた姫桃の花を慘くも一掃掃いた。
少女はこの時、戀焦れた姉の手からこれを名殘の水一口、十一年を一期にして、無慘や花の蕾は散つた

（終）

## 維新の女傑 村岡勤王談（續き）

森林黒猿

村岡は近衛家の老女の中にても、重く用ゐられて居りますゆゑ、其の居間も他の老女とは事變りまして、局持と稱へ特に三間ほどの局に住まつて居ります、一間は客間其次は居間一間は茶室で厶います、前々回にも述べましたる如く、村岡は女に似氣なく、少事には些しも頓着せぬ氣質ですから、室なども更に虚飾を綺らふと云ふ事なく、お久米と云ふ侍女一人婢一人を召遣つて居りまして、其

身は老の面に年波打よせて、頭に降積む白雪の清き心は衰へず、裲襠姿しとやかに、間赤の重衣に緋縮緬の合帯花やかに、髪は押へつと云ふものに結ふて居ますが今しも御前を退いて已が居間に立歸れば、お久米は、

「唯今お下りに御座りまするか」

とうや〳〵しく出迎へまする、今日はいつになく機嫌よげに燈火の下に坐を占め

「久米……用はないから彼方へ」

とお久米を立たせましたが、心に悦びの溢れてか、面の皺も延び〳〵といとうれしげに微笑つゝ

「今日此頃はかしこくも一天萬乘の君を始め奉り、諸方の志士肝膽を碎き、皇國の行末を案じわび、食も咽を下らざるに、關東にては我儘氣儘増長して、些しも朝廷の御主意を守らぬばかりか、井伊大老は朝廷及び有志の人々が望をかけられし一橋刑部卿をば御世繼に立てず、年幼なき紀伊殿を將軍の跡目として、已れ權威をふるまはん心計、斯くてはいつか尊王攘夷の効あらん、唯賴母しきは水戸黄門殿、朝廷を尊み國事を憂ひ、義心鐵石より堅しと聞く、此人ならで大事を成すもの世に其人なし、何卒内勅を水戸に下し置かれ、尊王攘夷の御主意相立つ樣取計らひ呉れよとの一大事を、心ある人々清水の上人を賴みて、見る影もなき老が身に達ての賴み、うれしや辱なや、女なればとて御國の爲には命も惜まじと思ふものを、まして眞心こめて其賴み、身に過ぎたりとは思ひながら、只殿下の御賢明を力に引受けて、委細言上申せしに、固より正義に凝り玉へる殿下には、手を拍て感じ玉ひ、今朝廷に小人はびこれども畏くも、今上は叡聖文武に渡らせ玉へば、大事或は成就せ

んと仰せられしを心頼みに、日夜神佛を祈りしが、人々の眞心、殿下の精忠を神も納受し玉ひてか、今日其事成就せしと承りて、妾の喜び何に譬へん、有難や辱なや」
と獨言ちつゝ天を拜して喜びましたが
「此事早く淸水の上人に申上げたら、如何ばかりか喜び玉はん、どりや一筆お知らせ申さう」
と料紙硯を引寄せて、已に筆を下さんとした時、お久米は再び次の間より立出でゝ手を仕へ、
「唯今淸水のお上人さまがお出で厶いまする」
村岡「ナニ上人さまがお出で……、それは恰ど好い所早う是へお通し申しや」
間もなく局口よりお久米の案内にて入來れるは、音羽の瀧の音に聞えて淸水の月照上人、眉は長く面淸らかに、茶色の法衣いと尊とく、端然として座に就けば、村岡も互に會釋して四邊を見廻し
「今も今とてお待ち申して居りました處、よくこそお出下さりました」
月照上人「サ、朝廷の御模樣如何と心も心ならず彼樣に忍びて每夜參殿するも、只彼の一大事の爲め……」
村岡「サア其事はお喜び下さりませ、殿下は今日密勅を奉じて御歸館なされました」
月照「フム、然らばあの水戶殿へ……」
と思はず上人席を進むれば、村岡も微笑つゝ、
村岡「いかにも廣橋萬里小路兩大納言より殿下の御手へ」
月照「ハア有難や辱なや、是れ偏に村岡殿御周旋の力に依る所、御禮の申し樣も厶らぬ」
村岡「なんのマア女の身にて、御國の御大事に力を盡さうとて盡しやうが厶いませんか、是れ偏に殿下の正義を執り給ひ、精忠を抽んで玉ふより、

朝廷をも動かし玉ひし故でムります」
月照「遉は村岡殿、其の勲功を主君に讓り玉ふ御心、愚悚感じ入つてムる」
村岡「シテ水戸へのお使ひは、何者が勤めますでムります」
月照「それは日頃も申す如く、水戸の御留守居役鵜飼吉左衛門が一子幸吉、若年ながら義心金鐵、彼者に申付け下さる樣御取なし願ひ上げます、即ち今宵も愚僧の從者に姿を扮させ、父子共に同道致して居りますゆゑ、苦しからずば此へお招き下さる樣」
と言へば村岡は手を拍鳴してお久米を呼び、
「玄關脇に控えしお上人樣の供人兩人を、お庭傳ひに此へ來る樣申してお吳れ」
と命じました、軈て寺男めきたる者二人、五十餘りあると三十ばかりなるとが、軒下にかしこまりますると、村岡は進み出で、
「斯く姿扮して辛苦を嘗め、國事に盡さるゝ御兩人のお心、神も受納し玉ひて、御主君への內勅は、首尾よく殿下の御手にまで渡りましてムります」
と聞いて兩人と踊躍なして打喜び
「宿志一朝に遂げられ、祝着此上なく、皇國の運命賴母しく存ぜられます」
と共に嬉し涙に咽んでをります、村岡は
「いざ殿下へ言上して何れもを御前へ御案內申さん」
と立上れば月照は兩人に向ひ
「兩士は彼處にて衣服を改められよ」
と是から鵜飼親子は立つて衣服を改めんとて彼方の間へ入りました

近衛家の離御殿の御庭廣くいと物靜かなるが、此夜は近習小姓をも遠ざけて、竊かに此處にて御對面あり、正面には近衛左大臣衣冠儼然として座を正し玉ふ、下手には老女村岡、髮は眞白に衣は改めて地赤の總模樣に襠を着て手をつかへ、少し上手には月照上人、紫の法衣に五條の袈裟いとたふとく、次は水戸殿の家來鵜飼吉左衛門、同じく幸吉、紋服に麻祉袴を着して拜伏致しました、殿下は御聲爽かに

「此度外國の要求は、容易ならざる御國の御大事なれば、關東にては諸事勅諚を奉じて裁斷あるべきに、井伊大老獨り幕政を專らにし、去ぬる六月二十二日、米國以下國々の條約に調印し、朝廷へ宿次奉書を以て上奏に及ぶ不埓の至り、剩へ其罪を堀田松平の兩家老になすりつけて職を止め、四方の人望を荷へる一橋刑部卿を立ずして、幼弱なる紀伊殿を將軍のお世嗣と爲し、三家を始め越前土佐肥前宇和島其外正義の諸侯を謹愼せしめたる段、一方ならざる專横の處置、深く震襟を惱まし玉ひ、勅諚を水戸中納言に下し玉ふ、天下の幸ひのみならず、其方共の情願も達し嘸大慶であらう」

と仰せらるれば並居る四人はハッとばかりに平伏し、天恩肝に銘じ、喜び極まつて嬉し涙に咽びましたが、鵜飼親子先づ口を開き

「寡君中納言御國を憂ふる心深く、内には志士を養ひ外には、幕府を助けて、尊王攘夷の實効をあげんと、寢食を忘れ肝膽を碎く甲斐もなく、井伊大老の爲に忌まれて、愼みの身と相成り、空しく天を恨み地にかこち罷り在りましたる所、神明未だ寡君を棄てさせ玉はず、誠忠の樣畏くも天聽に達し、三百諸侯の其中にて、獨り

勅諚を下し賜はる段、臣等が喜び何に譬へん、有難く存じ奉る」

父子口を齊うして三拜しますれば、月照村岡の兩人も

「是れ偏へに殿下正義を執り誠忠朝廷を動かし玉ひしに由れり、我々共の喜びのみならず、誠に天下一統の大慶と存じまする」

と幾度か伏し拜みつ顔見合せて喜び合ふぞ道理であります、殿下は更に四人に向ひ

「否や決して濟が力にあらず畏くも、今上聖明に渡らせ玉ひ、深く神國の行末に宸襟を悩まし玉ふと水戸殿の誠忠神明を感ぜしめたる故なり、猶は老中への奉書は、今日一同出されたれば、三家の愼み解けん事疑ひなけれど、井伊大老一通ならぬ者と聞けば、妨げあらんも未だ知るべからず、麿其れのみ心懸りである」



と撫然として仰せらるれば、何れも後事を慮りて、吐息をつく中に幸吉獨り勇み立ち

「勅を背く者は朝敵なり、彼れ我君の勤王を妨げんとせば、天罰必ず報ゆべし、決して御心配に及びません」

と慨然として言ひ出るに、殿下は莞然と打笑ひ玉ひ

「健氣なる一言流石に鵜飼が一子なり、さて内勅とあれば、表立ちては敕使を立てられず、密かに下し玉ふべき御內意、誰か之を守護して水戸へ赴く者ぞ」

と仰せもあへず村岡局進み出で

「其お使ひは此なる幸吉に仰せ付られ下さる樣との願ひに厶りまする」

近衛公「若年ながら器量骨柄天晴秀でし幸吉ゆゑ、仕損じはあるまじと思へど、大切なる御用敕使も

同然なり、其方如何に致して守護なすぞ」
との仰せに幸吉進み出で
「天恩を頭に戴き、八百萬の神々を五體に宿しまゐらせ、敕諚を忠義の懐に收め、誠の一字を以て之を封じなば、いやしき此身は我身にして我身にあらず、猛獸之を避け妖怪影を匿し申すべく、火の中水の中も驅ぬけん事いと易き事にムりまする、」
村岡局「シテ萬々一見顯はさるゝ事あらば、其時は如何が召さる」
幸吉「其時は畏多けれども、敕諚を呑んで忠義の鬼と爲り、我が神國を守護なさん」
と双眼に血を迸らして言出る所、忠心義膽面に表はれて、實に勇ましいのであります。

## 文林

若松　　東久世通禧

此はるの子の日にもれしひめ小松
　よろつ代まての緑しめけり

瓢　　高崎正風

春かせのふくへたつさへ櫻かり
　やまにやゆかむ野にや浮れむ

富士　　竹屋光昭

むらからすかけも匂ひて見ゆる哉
　富士のたかねの春のあけほの

花のころ故郷の友に　　長谷信成

故郷のあらしのやまのはなのかけ
　ふみて今年もおもひ出やきみ

春磯　宮地厳夫

いそやまの松にかゝれるしら雲と
見えしは花のさけるなりけり

春山家　阪正臣

遁れすむかひこそなけれ春のやま
みやこよりけに人のつとひて

能久親王　荻原厳雄

大君のみまへにとりてさゝけつる
たかさこ島は千代のかたみそ

岸頭藤　芝葛鎮

うちよする波もいろにそ匂ひける
岸へのふちの花のさかりは

春庭　大口鯛二

白妙にはなちりしきてこけむしろ
しきかへたりと見ゆる庭かな

残鶯　岩崎勝従

古巣へのかへり路ならむ瑞枝さす
ふもとのさとにうくひすの鳴

引田部赤猪子　蜂須賀随子

年なみはたちへたつともみわ河の
むかしの影のとまらましかは

故郷山吹　柳原愛子

たちかへりをる人もなし故さとの
おれしかきねのやまふきの花

徳川光圀卿　小池道子

五十鈴川たえぬなかれの一すちを
さやかに見するみつ茎のあと

垣若草　北島以登子

雪きえはゆひかへはやと思ひつる
かきねにきくの萌いてにけり

落花薫風　本多芳子

さくら花ちるを惜みてたちよれは

袖にとまりてなほかをるなり

庭春草　　常磐井文子

梅の花ちりたるにはのわかくさは
ゆきまにもゆるこゝち社すれ

山吹露　　入澤常子

やまふきの花にしおけはしら露も
黄金のいろにかゝやきにけり

落花猶薫　　田中瀧子

櫻花ちりにしのちもあらしやま
なほふく風は香ににほひつゝ

岡藤　　保科侚子

むらさきの雲やかゝると見る迄に
岡へのまつにさけるふちなみ

漁夫　　服部磯子

蜑人のしほなれころもあれ〳〵て
よをうみとしも思はさるらむ

火災をよめるうた一首并短歌

下田春興

世の中のひゝきも絶て　さよ中と夜はふけぬるを
しきたへの枕邊近き　うちつけの鐘のひゝきは
ちはやふる神田の邊か　やまのゐの淺くさの邊か
ぬは玉の夜とこを出て　馬つるき我か立ち見れは
大空にけふりみなきり　大地にはのほみちたり
みあきれるけふりの如　黒やまにひとのあみたち
滿わたるほのほのこと　たちさはく聲ゆかしまし
よの中の搖めくまにま　ふしもえす寢入もあえす
空しくも見ゐりけるかも　よはふけぬるを

草も木もねふりはてたるさよ中に
ゆめおとろかすかねの音あはれ

座右之銘

其の一

軒はくつれて敗れても　柱はくちてたふれても

たてし心のうごかすは　其名は千代もくちさらむ

其の二

衣はやれてふるひても　黄金はつきてうゆとても
心のたまをみかきなは　其名は千代もかゝやかむ

其の三

珠のうてなに住ひても　錦のきぬをまとひても
こゝろの花の匂はすは　いかてか人にめてられむ

其の四

すかたかちは優れても　白かねこかねかさしても
こゝろに錦を纏はすは　いかてか人のたふとはむ

## 馬士歌

清水橋村

### 溢茶

峠の茶屋の姉娘
春は十七容貌よく
匂ひこぼるゝ垣の梅
登り下りの旅人が
つかれを酌みて溢茶出すなり

### お霜

與兵衛が娘十七お霜
月に九反の機を織る
村に上手な．
その面影も
親が鐵砲のお伴から
ふつと消えたる梭の音

### 隠れ簔

夜の闇路の頬かむり
小石投ぐるに袂は輕い

晝は烏がかアく\と
泣いて別れて
さて雨が降る
かくれ笠がな簑はしや

雪中行軍凍死者をかなしみてよめる歌並に短歌

渡邊龍子

海ゆかは水漬く屍
山ゆかは草むす屍
大君の御楯となりて
國守る益荒猛男等
御軍の業を習ふと
水鳥の青森縣の
小山田の田茂木の野里に
をちむらのいさと云つゝ
朝鳥のむれ立出しを
久方の空かきくらし
つむち風吹のすさひに
大雪のふりみたれつゝ
七丈に八丈に積り
進むへき道をうしなひ
歸るへき道をもしらに
寒さの肌とほせは
取もたる火筒さへ燒き
まとひたる毛織さへたき
それたにも燒つくしてき
かくしつゝ日數經ぬれは
養はむかてもなくして
せむすへのたつきをしらに
餓にうゑさまよふ時に

吹上る谷の吹雪に
吹下す山の吹雪に
かゝふれる烏帽子もはなち
まとひたる衣も凍り
手はたゝれ足はくさりぬ
劔太刀身はかくてしも
利心はたゆまさりけむ
みつかさのをきて畏み
ひたふるに進み行つゝ
こゝに三人かしこに四人
打ちこやし雪に埋みて
末終に死たる人は
二百に餘るとそきく
山ゆくを山つみの神
野邊行くを野つちの神
いかなれは守りたまはぬ



千代の軍なりとも
たはやすくとるへきものを
かひなくも命死けむあたら丈夫

丈夫の雪に埋れてかいなくも
命死とは思ひかけきや




四年五日兼題

行路蕨

天　埼玉縣川越町十一番地　横田音羽子

きゝすなく野中のみちのはつわらひ
はつ〳〵なからいへつとにせん

評、優美高調。

## 地

越後國村松町仲町四百四十八　神戸春野子

ゆきかよふ人おほか野のはつわらひ
　たれにこゝろをよせてもゆらん

評、調つゞき優美にして力あり。

## 人

下谷區下根岸町三十三番地　椎野清子

さしてゆく路わすれけりおもふとち
　おもはぬのへにわらびたをりて

評、たさなくして味ひあり。

## 甲之部

花かけをゆきつもとりつをりためて
　かたまにおもるはるのさわらひ
三河　三宅中枝子

かへるさはよしくれぬとも初わらひ
　をりてすきうきをかてえのみち
下總　大木光子

はるさめのふるの山みちわけ來れは
　いはしたかけにもゆるさわらひ
高崎　奥山花子

めつらしとつま木にうゑて賤の女か
　をりてかへれる野路のさわらひ
大阪　伊勢村春子

さしてゆく路はいそけとしかすかに
　みすてしかねてをるわらひかな
大隅　稻垣政子

わをやきのかけふむ路にしたもえて
　いろをあらそふはつわらひかな
東京　鍋田よし子

## 乙之部

路すからこゝろつくしにたなりけろ
　このさわらひなたれにおくらむ
信州　岩間種子

もねいつろはろの野山のはつわらひ
　なりおもしろきたひちなりけり
伊豫　小田操子

たつねいりし花にはあらてかへろさの
　みちのさわらひなりねつろかな
三河　早川たれ子

岡こねのみちのしはふにやすらひで
　なりはやしけりはろのさわなひ
三河　服部萬子

友かりのけふのつとにとなりてまし
　はろまたわかきみちのさわらひ
三河　本多きさ子

さしてゆく峯のさくらはまたみれど
　やまちのわらひまつやならまし
三河　河合ぬひ子

てすさひになられけるかな旅ひとの
ゆきゝのなかのはるのさわらひ　新宿　武谷唯子

春されは野へゆくひともさわらひの
もゆるあたりはすきかてにして　肥後　服部倫子

しはしとていこへる野路の松かけに
たりねてうれしはるのさわらひ　肥後　田代綾子

ゆきすりに手なりつれともかきわらひ
わかいへつとゝなりにけるかな　肥後　佐々小琴子

道の邊のゆくてにもゆるはつわらひ
なちしくともにあふそうれしき　東京　北島操子

道すから手なりたはてしはつわらひ
せゝかゆふけのあつものにせん　東京　北島功子

たつれ來し袖もかたりてさくらはな
ちりしく野らになるわらひかな　越後　神戸辰子

いたつらにもねこそ渡れはつわらひ
たゐひともなきはるのみやま路　越後　田中濱子

春野やくけふりのすねに來てみれは
したもはいそくはつわらひかな　埼玉　横田秋子

もはいつるゆふひか岡のはつわらひ
いさや手なりていへつとにせむ　群馬　山田ふみ子

うなゐらに折りのこされて松かけの
野路のさわらひたけにけるかな　東京　林常子

やまあひのみちゆく人もいへつとに
たりねてかへるはるのさわらひ　岐阜　佐藤そう子

やまかつかゆきゝの岡のみちのへに
たのた負ひつゝ手なるさわらひ　茨城　荒野たに子

さしてゆく方もわすれてみちのへの
たのた負ひつゝ手なるさわらひ　大阪　大坂谷信子

わらひなりつゝけふもくらしつ　茨城　萩原季子

うれしくも山路なわけしかへるさに
はななかさしてたたるさわらひ　埼玉　前野森賀子

たとりきてしはし休らふかたなかの
小さゝかもとにもゆるさわらひ　東京　野口三子

おもふとちゆくての道にもねいつる
わらひなるこそたのしかりけれ　大隅　山田いね子

山さとのともなとはすはみちのへに
もゆるわらひたゝいかてしらまし　熊本　闘かね子

やまちゆく旅のつかれもわすれつゝ
手にあまるまてなるわらひかな　東京　内田きみ子

初わらひみちゆきふりの手すさひに
はてはあまたとなりにけるかな　東京　宮田けい子

いへつとに手折てゆかむたまほこの
みちのかたへにもゆるさわらひ　東京　片山あや子

早わらひのもねいてしより幾たひか
おなしみちなもゆきかへるらむ　但馬　田尻保代

友かりとなかこにゆけはなりよくも
もゆるわらひそうれしかりける　大隅　宇都春子

道の邊にもゆるわらひなたなりつゝ
いそくたひ路もうちわすれけり　大阪　桝田鉊子

心ゆくたひちなりけりつゝらなり
たるやわらひも香にゝほひつ

## 丙之部

たまほこの道のかたへのさわらひな
たなりてゆかんたひのすさひに　下野　椎野ぬき子

いそくへき旅にあられはのとかなる
はるのやま路にわらひをらまし　東京　椎野鋭子

めつらしき春のやまちのはつわらひ
いさやたをりていへつとにせん　東京　椎野秀子

さわらひのそことも云す萌ゐ出てゝ
みちはかとらぬはるのたひかな　信州　岩間千枝子

きゝすなく焼野のみちのさわらひは
もろ手にそてにあまりぬるかな　三河　服部正子

ゆきかよふ人もまれなるやまちとて
あたらわらひのたけにけるかな　三河　竹尾みね子

山かけにみゆるもうれしゆふくれに
かゝるたひ路にもゆるさわらひ　横濱　根岸とみ子

うれしくもかへさの旅にたをりたる
はるのさわらひいへつとにせん　陸前　吉澤たき子

家つとにをりやゆくらむやまかつの
かへさのみちにはふるさわらひ　横濱　内野柳子

いへつとにたれかなるらむさと人の
ゆきかひしけきのちのさわらひ　東京　小川たき子

かけろひの春にしなれはきこりらか
ゆきかふのへにもゆるさわらひ　日向　林くに子

たひ人のゆきゝのみちのはつわらひ
いへつとにとやたをりてゆくらん　筑後　鏡山増代子

急かるゝかへさもいまはうちわすれ
みちのたよりになれるさわらひ　筑後　武田龜子

たひはしも春こそよけれなかき日に
なかのゆくてにわらひをりつゝ　京都　坪内りき子

うみはてし道にをりよくさわらひの　和歌山　瀬戸ゑい子

もゆるをみれはわきてうれしも

家つとにわれもをりなんたまほこの
みちのゆく手にもゆるさわらひ　和泉　福原薫子

わけくれは野へに山へにもゐいてゝ
わらひはをりをたかへさりけり　肥後　千知波楠子

さわらひをゝり〱くれはひと筋の
みちにもともを見うしなひけり　三河　永井さい子

こゝ彼處ひれもすわらひあさりつゝ
たとるやまちのおもしろきかな　横濱　竹内久子

たとりゆく路しるへしてこゝかしこ
もゐ出てにけり野邊のさわらひ　肥後　田代鶴子

手折られて嬉しかるらんあてひとの
まれにきませる野路のさわらひ　肥後　仁保しま子

家つとにをりてかへらんたまほこの
みちのゆくてにもゆるさわらひ　肥後　佐々有鄰子

春されは野路のかたへにもゐいてゝ
またうらわかきかきわらひかな　肥後　小池輝子

みちいそくたひ人たにもあしとめて
たをらまほしきのへのさわらひ　東京　高森かし子

家つとになすにやあらむしつのめか
みちのたよりに手をるさわらひ　東京　林環子

たらちれのわか歸るさたまちまさん
このはつわらひつとにしてまし　廣島　小谷治子

ともすれはいそく道にもをりとりて
ひとさまたけのはつわらひかな　松山　上原のぶ子

おほきその山路のわらひいかにせむ
手にあまるまてをりてこしかと　山口　村上操子

うきものとき〻し旅路にうれしくも
われなむかへて萌ゆるさわらひ　伊勢　池田梅子

春の日のなかき野みちにうみはて〻
手すさひになるはつわらひかな　東京　牛山業子

いそきゆく道のかたへにもねいて〻
われなひくてに〻たるさわらひ　羽前　早川のぶゑ子

やすらはてゆけとも道のおくる〻は
もゆるわらひなたれはなりけり　秋田　古瀬りく子

もにいつふわらひはたれとわか友の
なくてさひしきはるの野路かな　富山　長谷川まき子

路のへのわらひはこ〻ろひかれつ〻
いそくとすれとおくれかちなる　富山　長谷川初枝子

杣ひとののほるやま路のみきひたり
なりおもしろくもゆるさわらひ　肥後　野口靜子

春さめのはれてゆくてのみちのへに
なりしりかほにもゆるさわらひ　肥後　佐藤玄子

折とふてゆけははかとふみちすから
た〻にすきうきはつはらひかな　伊豫　竹村竹里子

おもはすもわらひみたして行すきし
ともよひとめてとりしうれしさ　東京　河田はし子

いた〻へき旅にあられははつわらひ
折りつ〻ゆかむ野邊にやまへに　東京　篠田圓子

見てのみは行すきかたしはつわらひ
いさや手なりていへつとにせん　東京　近澤和子

おほ江山ゆく野のみちのさわらひな
たなりてかへるさとのなとめ子　茨城　内田さた子

家つとになりてかへらんしつの男か　大阪　伊勢村花子

やきしつ〻みにもゆるさわらひ

あしびきのやまちたどりて休らへは
はやまちかほにもゆるさわらひ　東京　太田やい子

はるの日のやまちいそかぬ旅なれは
もゆるわらひなたりてかへらん　常陸　萩原章子

さきたちし人はしらてやすきぬらむ
みちのゆく手におふるさわらひ　東京　三好珍子

はなみむとわけいるのちのはつわらひ
なりよきほとにもねいてにけり　東京　野口志滿子

いそくへき道にはあれとはつわらひ
いさなりとりていへつとにせむ　東京　島飼美登子

たまほこのみちのほとりの松かけに
みいて〻手なるはつわらひかな　大隅　山田よね心

古さとのはるなしのひてみちすから
たけしさわらひたりてけるかな　安房　鈴木秀子

家つとに手なりけるかなやまかつか
ゆききのたかにもゆるさわらひ　肥後　筑紫春子

旅ころもきならのやまちこねくれは
すその〻はらにわらひもねけり　和歌山　池田松枝子

あつさゆみ春のやま路なこねくれは
かすめる野邊にもゆる早わらひ　仙臺　齋藤まさ子

おくれしと家ちないそくたそかれに
みちのほたしにもゆるさわらひ　越後　高澤れき子

なるもうしならぬもつらし古さとた
いそくたひちにもゆるさわらひ　越後　高澤やす子

里の子のうたおもしろしわれもいさ
たひ路なからにわらひたりてむ　伊勢　河原芳子

ちる花にみちひかれつゝおもはすも
またをりえたる野邊のさわらひ　大阪　中館やう子

たどりゆくわか袖ひきてさとの子か
わらひはこれとしたりかほなる　東京　橋村あさ子

こゝろにもあらぬ野末にまよひきぬ
もゆるわらひにひかれ〳〵て　東京　杉浦いと子

初わらひもえよとやきし野邊にきて
こゝろゆくまていさをりてまし　東京　吾妻ちか子

おのつから家つとにこそなりにけれ
みちのゆくてのはるのさわらひ　麹町　戸塚てつ子

きて見れは霞みそめたるむさし野も
をりはわすれすはるのさわらひ　東京　川村まつ子

むらさきのちりと見つるは昨日にて
もえいてたりなみちのさわらひ　東京　諸井くら子

おもしろきふしもましれり道すから
折りにをりとる野邊の早わらひ　東京　矢野保子

やまかけに里のおとめかわらひをる
子すかた見てもたひちゆかまし　横須賀　岩橘花

たひ人もそてふりはへてたまほこの
みちゆきつとにわらひをそ折る　栃木　川中子てつ子

時のまにわらひはかこにみちにけり
あなおもしろのけふのやまふみ　北海道　川上ふさ子

わか草のかけにもゆるやはつわらひ
やまゆくたひのつとにならまし　横濱　細谷なつ子

うら〳〵とかすむ山路のはつわらひ
をりてみやこのいへつとにせん　大隅　宇都常子

旅にしてやるへきひとはなけれとも
をりてこそ行けみちのさわらひ　大隅　宇都冝子

うきたひのつかれもしはし忘れけり
野やまのわらひたをりゆくひは　埼玉　關口しづ子

いくたひか旅ゆくわれをとゝむらん
おかへのみちにもゆるさわらひ　東京　椎野薫子

友きそひゆけはうれしきはるの野に
さわらひをりてはしるかへり路　秋田　中川ふさ子

ゆくかたもいそかぬ花のたひころも
たもともすまにわらひをりてむ　東京　山本梓子

夕まくれいそくやま路のはつわらひ
われまつ背子のいへつとにせん　和歌山　長尾小ゑい子

## 四月五日兼題
## 花見日記
### 天

伊勢國宇治中之切　河原芳子

四月一日　やむごとなきことありて、叔母上をおとづれぬ。用はてゝ後、叔母上にすゝめられて宮崎文庫に參りぬ。境内廣しといふにあらねど、四望いと晴やかに、櫻樹多しといふにあらねど古幹、

地に伏して雅趣を描きつ。今を見頃の色香めでたう、こちたき花の梢かくして、只白妙のみ戸張のごとく、神の都の春を粧ふおもしろさ。歌はいかに、と叔母上のおどろかし給ふを、心うばはれて思ひ浮ばすと答ふるも、いと口惜しきわざなりけり。側の假屋の花莚に憩ひて、茶飯田樂を賞美し、またの日を約して歸りぬ。

四月三日　朝日長閑にさしのぼりて、神路の山の春の色いとうつくしや。あはれ三千年の今日のみまつりこそ。いと〳〵畏けれ。

午後、君子ぬしにそゝのかされて宮川に行く。花の木よりも、人足の方多きぞをかしき。堤の下にて競馬すとての〻しりさわぐに、ふと見ればげにさなりけり。な荒びそ、花やちるん。と呟きつゝ木陰の若草をしとねに、近き瀬下す筏を數へ、川端柳の打ち烟れるをいぶかりながら、鐵橋あはれとながめやる折しも、轟々たる響きを線路に傳へて火車は來りぬ。其窓にはこの花を見るおもはもあらんに、奪ふがごとく駈去るはいなさ。筋向橋にやつきぬらん、汽笛いみじう鳴り渡りぬ。今や競馬は興に入れるならむ、鐵蹄空に砂を捲き、立髮颯と風を起して、しづけき花の心を亂さんとするいさましさよ。この時、無下なる泥醉あまた、あなどりがましう近づきけるに、あな〳〵と目くはせて、ひそかに逃れつゝ家路にかへりきぬ。

四月五日　師の君に侍らひて、林崎文庫より神苑を賞し、夫より下りて五十鈴川邊を溯り、鳩口、飽石、鏡石のあたりに遊びぬ。山光水色千古の彩をたゝへたる處、一株二株づゝ常盤木に交れる山櫻の姿は、また一しほに氣高くて、いひしらぬ趣味を其間に覺えたりき。夕暮の程、霞いとゞ棚引て例の花雲ならぬ樣なるは、いとおぼつかなうて。

評、文章凡て力ありて筆つき亦優美なり。特に日記文の上乘といふべし。

**地**

肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

四月一日　つとめて、友かきをいざなひ、九州鐵道の汽車にのりて、花見にといで立ちぬ。うらうらと日影さす車中にありて松子が。

咲にほふはなにこつたふうぐひすの
こゑおひかけてゆくくるまかな

とうたへば、やがて汽笛一聲八代停車場につきぬ。松江城趾の官幣中社八代宮に詣でぬれば、御はしのあたりの櫻花、今を盛のけしきは、えもいはれずあん。竹子が

白くものうへのむかしそしのはるを

といへば、梅子が、

はなは三よし野さとはやつしろ

とつけたるも、ところがらをかし。花下の茶店にやすらひ、晝食をへて、汽車より熊本市にかへりつき、白川のほとりの旅籠屋にやどる。

二日　やどりを出で、熊本縣社錦山神社の花にあそばんとて、坪井川の堤より見さぐれば白妙の雲かとばかり、咲きをそりたり。

さくらはあ雲かあらぬかにしきやま
にしきのとばりかけわたしけり

熊本市より六里あまり北方の、別格官幣社菊池神社の花も盛なりと、郵便電信局長のもとより、電報ありければ、乘合馬車にうちのりて、夕つかたより隈府町さしてゆく。松子は蔵わけ小舟さはりおほくて今日はゆかねば、竹子と梅子をともあひて、隈府の乾々堂につきて、夜をふかしぬ。

三日　菊池神社に詣でぬれば、神武天皇祭の式あり。拜みて賽す。神社は皆人のしれるごとく、贈從三位菊池武時卿をはじめ、武重朝臣以下の將士を合祀せられし神社なり。宮司從五位菊池忠君は櫻花をかざしの花となして、祭式をつとめらる。禰宜主典の人々も、おなじ櫻花をかざしの花となしぬ。いとかうかうしき式あり。域内數千の櫻は、白雲上城の名にたがはず、日影まばゆく照かはしたるは、たとへんものぞなき。竹子が、さくらはあといふことを、句の上におきて、

さくら花くものうへなるらんかんに
はるかせのむたなみぞかゝれる

梅子は、今様歌を、

よし野の山はゆきみねど。ゆきよりしろき雲のうへ。神のみやしろふしをがむ。まそでに花のうるはしや。

妾は花の氣合にうたれて、筆とるいとまもなく何の風情なきこそ口をしけれ。明日は官幣中社阿蘇神社に詣でて、花の下ふしせんと二人の友よりすゝめられつれども、さはることあれば袂を別ち、わがやにかへりてかくはしるしぬ。

さく花の下ふし幾夜かさねても
あくことなきこそ春情なれ

評、別に取いでゝいふべき節なけれども、捨てがたき趣あり。

## 人

東京四谷區右京町二十八番地　山本梓子

春雨いとゞふりくらして、夕れ〳〵ある夜、ふるほごどもとうでたる中に、しぼめる花の二つ三つさしはさみたるを見れば、去年の花見日記なりき。殘れる匂のなつかしさに、しづの小田卷くりかへして、そが一ふしをかきいでつ。

上野の岡の花盛りときゝて、けふ朝つゆのかはかぬ程にと、曙の空に宿をいでゝゆく。都のちまたもさすがに人まれにして、靜けさいはん方なきに、雲なすばかり咲積きたる櫻の、露のゑまひの殊なるに、木の間を渡る鐘の音、入相ならねど身にしみぬ。こゝかしこ、花の蔭にたゝずむほど、日もいつしかたけぬれば、人げやうやう多くなりゆくに、花の香にゑひたるわれ、人にゑはじとてあんかへり來ぬ。かくての後は、庭の櫻に心つくしてあるは一夜月に匂へる色をめで、あるは、まばゆき、夕日のかげにながめなどし、雨をうれひ風をかなしむほどに、五日むゆかとかさなりて、いつしか花の七日もすぎぬ。ちりゆく時はをしき心のへがたなきに、かきいでむことの葉もしらずなむ。

おはれ、過行く月日のひまなさよ。ゆめのうちに一とせはめぐりきて、ことしの花のたよりも、やがてあらんとおぼゆるに、うきたつものは心にこそ。

ことし又花のころもをきならして
　去年にもまさる色をそめはや

評、日記文と紀行文とを書きたがへたるもの、いと多かり。これも詞つきこそ流暢なれ、やゝ題意といかゞあらむ。

（以下原稿到着順）

大阪　桝田益子

いつはあれど、空のどかなる春のやよひ、いづこはあれど、西の都の花の眞盛を過さじと、これかれそゝのかしていで立つ。今日しもうらゝかに、遠近の山のはに霞きらひ、野づらはるぐ〳〵と鈴菜すゞしろ咲きつゞきて、見ゆる限り黄金のむしろ、しきまうけたらんやうなり。山崎を過るころ、

のどかなる春の光りに野はなべて
　こがれの色にとみ榮ゆけり

道につきてまづ御所内に物す。清き緑の芝生、玉しく白き眞砂、みるからに心地すが〳〵しく、かみさび立てる常盤の松に散も始めず、咲も殘らぬ花のふたもと三本、立交りたるもいはれじ。

常盤なる松の梢におりはへて
　春なかけたる花のしら雲

紫宸殿を拜して、北野天滿宮に詣づ。おごそかにいと尊し。

風薫りみとり匂ひてみつ垣の
　ゆ庭に清き春かへてかな

妙心寺をへて、小室に詣づ。若路の露清らに塵もかゝらで、花の心いと靜なり。

世の人の心の塵のかゝられば
　にほふも清き花さくらかな

やがて、廣澤にいづ。鏡なす池に遍照山の影を宿し、渚の櫻咲をゝりて、風のまに〳〵二ひら三ひら散りかひたる氣介憐ふかし。

靜かにもなきさの櫻かけさして
　さゞ波清し廣澤の池

しばし渚を徜徉しつるに、あし引の山松風は、ゆらゝにふき、みどりの野邊は、麥生くきだち、黄金なす菜の花に戯るゝ蝴蝶、とり〳〵にをかしきからに、あはれ進みて眺づたひに嵯峨清涼寺に詣づ。法の業すとて、ことに賑はし。愛を過ぎて程なく嵐山に至りぬ。花の香さと薫りて、今日なんまさ盛りなりけり。千もとの櫻散も始めず咲をゝりたゝなはりて、こと木さへ匂ひに埋れて、さながら八重たつ白雲のおりゐるかとばかりあやしまれて、まなび川んかたもなしや。清き早瀬は水の聲さやけく、花の浪また下す筏士の棹の雫も薫るばかりになん。

水なれ棹つたふしつくも薫るなり花の波間を下すいかたし

縣渡したるさすき、すきまもなく、立こみし人は山をなして、物のれ浪にひゞきて、いと賑はしく、わりご開きて、まうほる童、霞を汲みてゑひなきすなる翁、下影に水のめ煮て心靜に花見る人、筆持て梢に言の葉をかくる風流夫など、いとさま〳〵なり。いで、靜けからん邊りにこそと、小舟に棹さしたゞ中にいでつれば、風おのづからふきて、花の香いよゝ芳はし。やゝ流れに

さかのぼるに花ならぬ楢も匂ひ、みづ山のみどりしたゝり、渚の青柳静かになびき、さとふきおろす花のふゞきは、浪間に浮びて、三千とせのふるごとさへ思ひいでらる。舟ばたをたゝきて、おのもく\心をやりて、

暮ぬとも月と共にやみはやさん
花のしつくに袖はぬるとも

霞薄らに匂ひ、夕日の影千本の楢に薫りて、あはれいとゞふかく楽しさいやまさりにまさりてあかれば、岑の白雲思ひつゝ、花影しづく渚をさし下すも、心は空になりてなん。かく、昔の根のながく\しくも、今日のたしさを、朧夜のおぼろげながら、かつ\かきつけぬ。

こゝかしこあくがれいでゝ今もなほ
心ににほふ花ぞめのそで

東京　林　常子

四月三日。空を散びしよべの激雲に、今日の祭日いかゞあらむと、心もとなくもとく起き出れば、昇る朝日いやうらゝかに、青み渡れる空は一筋の雲さへ見えねば、心もいとゞ浮き立つまゝに、いで御殿山に物せんとて、親しき友三人四人にいひおくるに、此の長閑なる日かげを、いかで仇に過さるべきなど、皆諾ひければ、打つれたちて家をいでぬ。やがてかの山の傍に至れば、けふの花めでんとてにやあらむ、あなたこなたより、此山さしてつどへる人、いと多かるまゝに、うちまじりて山に分け入りぬ。げにも、東の都にて名もしろき花の名所とて、木立いやしげく、所せきまでけふを盛りとさきにほふ櫻の花は、紅なす暁の雲とさへ見えまがふばかり、そが美しさ拙き筆もてはうつすべくもあらず。又あなたには、品川の海目の下に見え、波静かにして、青畳を敷きたらんが如く、所々に繋きたる軍艦のかげいとあざやかに、そが間なぬいて、綱引く船の数々、魚をあさらんためとて、かなたこなたにこぎ行くさまの、手に取るばかり見え渡るに、沖遥かに、軍船の三つ四つ二つ、黒み渡りて横たはるなんど、げに絵にもかゝまほしかり。かくて日ねもす心も空にて、花にうかれけるに、やがて入日斜に山の端にかゝりて、あたり小暗くなるまゝに、帰りをいそぐ入相の鐘、ほのかに聞え渡れば、打揃ひて家路さしてたどりぬ。げにや今日のながめ、いとも名残の惜しまるゝまゝに、拙き筆をもいとはず、燈火の許にかくはかいつけぬ。

相模　鍋島　春子

今朝しも空はなごりなう晴渡り、のぼる日かげもうらゝかに、木々をつたふ鳥の聲さへ、いと長閑なる心地すめり。今日こそはと、かねて、ちかひてし友と三人ばかり打つれだちて、上野へと歩を進めぬ。折しも、爛熳たる櫻花の今を盛と咲出たる様の美しく、ゆかりの色の菫草は、足のふむ處もなきまで、ゆかしく咲にほひ、そよふく風に、花の一ひら二ひらちりくる風情も面白く、此處彼處とあくがれありきしまに、いつしか時やうつりけん、老も若きも花のかげによりつどひ、草をしとねに酒くみかはし、又、敷物ひきて、用意の品々とり出すもあり。妾等も亦、木かげにやすらひて、晝飯を終へぬ。しばしへぬれば、酒にゑひたる人々の、何やらん、ふしおもしろう歌ふさまのいみじうをかしく、童等鬼事なすなど、おのづと太平のさま見えて、いとも愛でたくうれしうこそ。やがて、日も西にかたむきぬれば、一同をうながして家路につきぬ。

東京　林　環子

四月五日。けふはまだきより起き出て、窓打ひらけば、朝日ほがらかにかなたなる杜の間よりさし上り、庭におふる松が枝にむれる雀の、ちよく\とさへづるさへいと長閑なり。やがて朝餐ををへ

みなりなどつくろふまゝに、三四たり友どち、約たがへで訪はれけれは、いで隅田堤の花見むとてたちいでぬ。行きてゆき、藏前となむ呼べる大路に出れば、美しき衣着たる人ども、打つれたちてそこゝにありくなどは、皆けふの花をめでんとてにやあらむ、またつぎ〳〵走る馬車は、いづれものる人を充たしもて行くありさまなど、これもまた花見むためとおもへば、けふの賑ひいかばかりからむと、覺えず足の進む心地す。やがて吾妻橋を渡る。この橋は黑がねもて造れるにて、今はかゝるたぐひのもの、なしこにこゝに渡しあれば、さまでにはあらねど、數ふれば十とせあまり四とせの昔、この橋初めて渡りし頃は、いかばかり人の珍らかにほめたゝへけむと思へば、世の業のいや早く進みゆくさま、いと驚かれてなむ。友なる一人は、この橋の渡り初めしありさま、まのあたり見たりしとて、いとほこり顔にものがたりぬ。橋うち渡りつゝ見やれば、隅田堤にさける櫻は、さながら紅なす雲棚引たらむが如く、美しさはもいはず、綠なす水の上には、花見むとてつどへる船の數々、とり〴〵に酒など酌かはして、詩歌管絃にすきをつくするへあるに、そが中を、黑き煙を吐きつゝ、蒸汽船の行きかふなど、さながら畫にある心地す。やがて枕橋を渡れば、一里もやあらむとおぼゆる長き堤は、右も左も皆櫻にて、八重一重彼岸など、枝もたわゝに今をさかりとさきほこりたる、つたなき筆もいひ盡すべくもあらねば、

しき島の大和心とたゝへけむ
　櫻は花のあるしなりけり

友なる一人、

とつ國に生ひいてぬ花こと人も
　國のみたまとあふき見るかな

きて花見むとてつどへる人のさま、いかばかり嬉しかるらむ、これや都のみやびをあつめたらんかとおぼゆ。賤しげなる男の女の裝ひして歩める。若き人の醉ひしどれて口ぎたなく罵りありく　さてはやんごとなき人たちにやあらむ、綺羅つくせる裝ひして、供人に打かこまれ、つゝしましげにあゆめる。花の下に坐しめて酒くみかはす、或はみやびなるさまにも、腰をれなど口ずさみ、やがては短册とり出し、かいつけて花に結び、われは顔なるぞいといぶせきや。かゝるほどに、風さと吹き渡るまゝに、梢の花のひら〳〵と雪のごとふり行くに、おりしも堤の下に船もやへる賤の男ありければ、友なる一人

風流なる心なきさの船人は
　散りくる花をいかに見るらむ

など口ずさめば、また友なる一人

ちる花を雪とや見らむ船人は
　風流心のなとなかるへき

など笑ひ興ず。かく行き〳〵て竹屋となむ呼べる渡船に乘りて隅田川を渡る。やがて船川中に至りぬ。顧みれば、水にうつれる花のいと美しき、さながら水底にも花のさけるかとおもほへければ、友なる一人

みな底の宮居のひめもかさゝなむ
　隅田の水にうつるさくらは

かゝるほどに船かなたの川岸につきぬ。折しも午をつぐる大づゝの音いやとゞろにひゞき渡りたれば、いざとて家路さして歸りぬ道すがらの心地よさいはんかたなし。

下總　大木光子

すがの根のながき春日を、あだに過さむもいと惜しければ、小御門の花見にもと思ひたちて家を出でぬ。空は晴れ渡りて、日暖かにさしそへたるに、そよと吹く風さへなく、細き一すぢの堤を越

へて野路に出づれば、すみれ、たんぽゝなど、うるはしう咲きそろひて、雲井はるけき雲雀の聲も、いとのどかにぞ聞ゆる。彼方の鈴菜さきたる畑のほとりには、若き女の白き手拭を冠りて、謡歌うたひつゝ、草つむ姿の見ゆれば、此方には馬にまたがりて、若草食ませつゝものうげに、麦笛吹きゆく童もありけり。來る人の袖の匂へるははや花見のかへさにや。かくて、午の刻過ぐる頃、漸々小御門の里にぞつきぬる。遙に見渡す紅の雲は、あはれ小御門の神の祠は周らせる花の盛にやあらむ。近よるに從ひて、いよ〳〵うるはしく、山か櫻か、櫻か山か、とまがふばかりに咲き亂れ、一日遅かりせば夜半の嵐の恨みとやなりなん。鳥居の前にのりすてし車のあるは、吾より先に訪ひし人なるべし。花の木陰には、成瀬屋と云ふかけ茶屋あり。障子開放したるまゝ、短册など手にして。かたたくえ人などの集へるを何ぞといへば、厚念社花見の會なりと答ふ。のりとの聲、拍手の音など、幽かに聞ゆるも、其古の忍ばれて、いとたふとし。若紳士伴のいかめしき打扮の男子ども、芝生に腰すゑて、瓢かたぶくるもあれば、幼子の手をとりて府朝末を語らふ翁もありけり。枝より枝にと、すがる小鳥の羽風に、二三輪花瓣の散るさへをしきに、そを小さき兩手にうけてほゝゑみたる子等の、あどけなさなどいひがたき趣きにこそ。かくて日もやう〳〵暮れぬれば、人はおのづから、少くなりて夕日の影のみぞ、花の木の間に仄めきぬる。

人は去り花は朧にくれはてゝ
木の間に匂ふ春のよの月

東京　椎野秀子

彌生の末つかた、空の氣色うらゝかにて、おのづから心ものびやかなるに、野邊の櫻やいかに美しかるらんと思ひいでゝ、親しき友二人三人打つれ、飛鳥山のあたりにとていで立ちぬ。見わせばをち

こちの山々いとのどかにうちかすみ、若草もゆる春の野には同じ心の乙女子が、われも〳〵と花かごさげ、あなたこなたの畔路よりいとたのしげに打つれて、ふし面白く「春の彌生の暇に」などうたひゆく樣いと云ひしらずあいらし。道の邊には、今を盛りと、黃なる花紅の花などいろ〳〵咲みちて、さながらこがねのべ玉をもしきつめたらんやうなり。そが中につくしの處々に頭いたせる、筆などを打立てたらん如く、いと面白くもをかしうなん。あなよきながめなるよと打興じつゝ、畔路を左に折れ右にまはりて行く程に、いつしか山のふもとにいでぬ。いそぎ山に登れば右も左も數限りなき櫻樹のたち並び、今を盛りと咲きいでたる艶なる姿、いかに似るものなしや。其美しさ近きは白雲にもまがへつべく、遠きは白雲のたなびけるにも似かよひ、そよふく風にいゝしらぬかをり、床しとも床し。山の端にたちて、見渡す限りひろ〳〵たる田野にて、遠くは筑波の山、近くは荒川の白帆またなきながめなり。此處かしこ木の間を分けゆけば、所得顔にこづたふ鶯の音さへ、浮世の外の心地せらるゝ王子の社にぬかづきて、靜にあちこちとそゞろありきするに、此あたりは木立もいたうものふりて、花もひときはまさりたらんやうなる心地せられ、しばしとて花の木かげにやすらへば、春風しづかに梢をはらひて、花のひとひらふたひら袖に散りかゝる。いと哀なり。あゝ櫻の美しき其姿、古より萬の花の頭とたゝへらるゝも理りにこそ。いでや我等も色香ゆしき此花の操にならはましと獨りごつ折から、友どちのあな日もいとう移りぬ。暮ぬうちにとうながしたるに、我ながらあかぬながめに心ひかれたる事のをかしく、いざとて立あがりたるに、ながめのをしまるゝまゝ、見かへりがちに行く折から、いつしか朧月の木の間にさとさし出でたる、我をとむるにやあらん。

かへるさの家路わすれて花のもとに
あかぬひと日をくらしけるかな

ふりつゞけし春雨の、今日しも晴れ渡りて、長閑なる日影のさしそふを幸ひ、しばし足絶ちし東の園にあくがれ行きしに、なべての櫻花は、今を盛りと咲き揃ひ、われを待ちつゞけ顔なるぞ、いと艶に美しう、床しき匂ひはあたりにみちて、空さへかをるこゝちして、氣も浮きたつ許りなり。そよふく風にひら〳〵と飛び散る風音、限なくめでたし。さすが敷島の大和心にたぐひて、外國人めではやすもむべと、なつかしさに時のうつるをも知らざりしが、従者のうながすに止むなく、またあすをちぎりて家にかへり、文机に向ひて一筆此日の記をものせしになん。

和泉　福原董子

# 雜報

●●●●●●●●●御製御歌と菅公會　菅公一千年祭に付き　両陛下及び　東宮殿下　同妃殿下より御詠進あらせられたるやの風説あるにより、今聞くがまゝを記さんに、土方伯爵は、維新前彼の七卿と共に太宰府に下り、具に辛酸を嘗められたる因みあるより、菅公を信ずること特に深く、本年二月、宮中月次歌御會御兼題「菅原道眞」の御歌を　皇后陛下の御詠あらせられしことを承はり、特に香川皇后宮大夫を經て　皇后陛下の御製を請ひ奉りしに、御許容あらせられ

君を思ふ誠の道のひとすぢは
　かねてもしるしはあつやさきに

との御歌を御染筆遊ばされたる上、同伯へ下賜あらせられたるにより、伯は知人にも示して喜びを頒ち居りしが、終に菅公會の役員の聞く處となり、御歌を更に同會へ下賜の儀を香川大夫へ願ひ出で、大夫より同會へ下賜（御歌のみにして御自筆にあらず）せらるゝ旨回答を得し次第あるが、此際　御製と　東宮、同妃両殿下の御歌をも拜寫して、天滿宮へ奉納せばやとの議起り、七卿の一

人として存命中の東久世伯爵は、太宰府と因縁深きを以て、謹んで「秋夜長」といへる左の御製を拜寫せられぬ。

秋の夜の長くあることそうれしけれ
　よむまき／＼の數をつくして

斯くて土方伯は　皇后陛下の御歌を謹寫し、更に同伯より、御歌所參候大口鯛二氏へ　東宮殿下の御歌を、御歌所錄事千葉胤明氏へ　妃殿下の御歌の拜寫方を委囑ありしかば、大口氏は一昨三十三年歌御會始めに御詠ありし　東宮殿下の御歌「松上鶴」

山松の梢にすたつひなつるも
　おやにならひて千代よはふなり

を拜寫し、千葉氏は　妃殿下の御詠即「讀書言志」

數へ草つむ少女子よたらちねの
　みおやのもりのかけな忘れそ

を拜寫し奉りしにて　妃殿下の御歌は、御慶事御擧行前即ち未だ節子姫と申して、九條家におはせし頃の御詠ありしものを特に表裝の上、今同奉納したる次第なりと承りぬ。



●御救恤　昨年十月九州近海に於て沈沒せし大倉氏所有の汽船鶴彥丸は、二千三百噸を有する鐵製汽船にして臺灣行の鐵道敷設用汽車其の他の貨物を搭載して、十月六日門司港を發して基

隆に向け航海中、翌七日午前四時三十分頃暴風雨の爲め、肥前國五島沖なる男島の北東端に座礁破壊し、船長池上氏以下五十名と共に沈沒せしが、其の内舵夫岡島氏一名は、風浪の爲め男島海岸の岩上に打揚げられ、萬死に一生を得しも船長以下自餘の四十九名、行衛不明と爲りしを以て、當時大倉氏は海軍省に請願して、水雷驅逐艇叢雲、薄雲二艇の派遣を乞ひ、又別に汽船一艘漁船數艘を借入れて百方捜索に手段を盡したるも、其功を奏せず、僅かに數個の骨片を發見せしのみなりしが、今般上聞に達せし由にて　天皇　皇后兩陛下には憫然に被思召され御救恤として金二百圓下賜さるべき旨、御沙汰あらせられたりと云ふ。

●愛國婦人會の新事業　麹町區飯田町一丁目日本體育會構内なる愛國婦人會は、去月三十日を以て、九段阪上偕行社内に設立滿一ヶ年の大會を開きぬ。且つ同會員等の協力に成れる機關新聞とも發行し、大にその趣旨を世に布演すると共に、益益愛國の思想を鼓舞するといへり。

●日本女子大學校　同校は、昨春家政國文英文の三大學部を開きしが、今回の募集にも、入學者意外に多く、家政國文兩部の如きは既に定員超過の好況を呈せる由。英文學部も、英語に堪能なる村井教授と、翻譯々解に老練なる松浦教授との外に、米國に於てまた日本に於て久しく教育の閲歷を積み、特に實地教授に巧妙なるケデー夫人あるに、こたび又新に昨年來朝して著名都鄙に嘖々たる、前ケンブリッヂ大學附屬女子高等師範學校長ヒユース孃を聘し、又理學士にして博物學に熟達せらるゝフイリップ孃も永く助けらるの約をなし、なほ坪内文學博士の講義もあるはずなるが、之と同時に英米女子大學の制度を參照し、又本邦

現時の事情を酌んで、學科課程を制定せしが、其要を擧ぐれば、幾多の圖書を購入して英文學部專用の自修室を設け、セミナールとてヒユース孃指導の下に英語演習の道を開き、英文學の研究に欠くべからざるアーサー王物語、希臘神話、及聖書文學を授け、又英國現時の風俗をも教へ、會話も普通會話の外に時事會話を加へ、文章軌範とて英



米大家の詩文の精英を拔摘して研究の料に供し、文藝の相異等を評論せしむるなど、從來諸學校慣行のものとは少しく趣を異にすといふ。

●女子美術學校の擴張　本郷弓町に設立せられたる同校は、近來入學志望者愈々多く、隨て校舍の狹隘を感じ、先般來増築中の處最早概ね落成を見るに至りたれば、本月中旬よりは使用し得らるべく、又新に二百名ばかりの入學を許すこと〻なり、本科は從來のま〻なるも、撰科は多少期間を短くして、其卒業を速かならしむること〻爲し、寄宿舍も是れ迄は廿名位に止めたるが、今後更に五十名までは引受くるの準備成り、横井玉子女史自ら監督の任に當らる〻といふ。

●愛國女學校　去月廿六日午前九時卒業證書授與式を行ひぬ。來會する者無慮數百名、來賓職員生徒各々席定まるや、やがて君か代の奏樂あり。

ついで證書を授與し、校長の辭卒業生總代の祝辭等ありて式を終る次で同窓會を開きて茶菓の饗あり室内には生徒の製作に係る書畫編物縫物等を陳列して觀覽に供したるが、中にも尤も衆目を引きしは、割烹科の松龜鶴を大根或は芋等にて造りたるものなりき。卷首に揭げたるは即ち當時撮影せる職員卒業生の寫眞也。因に記す、同校は四月より新學期を開き大に生徒を募集すといふ。(口繪參看)

●生徒卒業　去月卅日高等師範學校に於ては第十三回卒業授與式を行へり今其次第を記さむに、まづ午前九時半に着席し、一總員起立して皇后陛下の御歌「みがゝずば」を歌ひ、二卒業證書を授與し三、「おもへばはてなき」を歌ひ、四高嶺校長の告辭、五文部大臣の祝辭　六、生徒總代の祝辭　七「はてしなき」を歌ひ、嚴肅の中にその式を終りぬ。さて本年の卒業生は、本科四十名、撰科一名　地理歷史專習科三十三名、附屬高等女學校補習科二十三名、同本科四十一名なりし由。

●貧民女子の教育　作州津山に在る私立高等女學校淑徳館にては、尋常小學校卒業後高等小學に入學すべき資力なく、晝間は製絲、麥稈花莚の織方子守奉公杯する貧民の女子に修學の便宜を與へんため、夜間三時間を限り、普通教育を施しつゝあり。目下入學生六十人餘に及び、今回第四回目卒業者十數名を出せりとぞ。

●赤穂義士の二百回忌　芝高輪泉岳寺にては、四月六日より五月五日迄、赤穂四十七士の二百回忌法會を修行し、義士の遺物を衆庶に觀覽せしめんとて、先頃より其遺物を秘藏せる家に就て蒐集に勉めたる處意外の好果を奏し、同寺在來のものを加へ、凡そ二百九十餘點の多きに達せりと。尚右大法會に付ては、近傍の有志者より大幡大吹流、地口行燈、提燈等種々の奉納ものありと。

●豪家の美擧　備中倉敷の豪家大原孝四郎氏は、

常に教育に熱心し、同氏の學資を仰ぎて東京京都の二大學、高等學校、高等師範學校其他の學校に在るもの二十六名の多きに及ぶる由なるが、本年は同氏古稀の壽に當れば、子息孫三郎氏は、其祝賀として金一萬圓を倉敷町に寄附し、一個の財團を作りて、特に貧民のため奬學資金に供せんとする計畫ありといへり。

●篤志の生徒●●●● 香川縣香川郡弦打村大字鶴市御殿森與太郎(十三年)は、柴山高等小學校二學年生にて、性質溫和品行學力共に善良なる上に、近來は學校より歸宅後は、近邊の兒童を伴ひ、山に行きて薪を採るに、おのれより年少にして多く採らざるものには、自分の採りしを足し、荷作りして歸らしめ、夜は其等の兒童を自家に集めて夜學をなし居たるが、同所と同じ村内にても、川を隔てたる山の麓にて、行路甚だ困難なるが故、雨の夜などは送り迎へする事もありとぞ。又祝祭日などには業を休み、川に出でゝ運動をなすなど、學校の課程を勵むより、他の兒童も之に勵まされ、同所より就學せる兒童等は、一般に成績良く氣風大に改まれりと。まことに奇特のものといふべし。

●孝子●● 下谷區萬年町一丁目十三番地剝身賣渡邊金次郎(七十五年)の長男市五郎(三十一年)と云ふは、妻とせ(三十二年)と共に老年の父を扶養しつゝ、矢張り剝身を賣り歩き其賣上にて父への孝養怠りなき事は、近隣の者が絶えず評判する處なるが、金次郎は元淺草區藏前片町に住ひ、同人の父は藤吉とて、母は金次郎の生るゝ間もなく死去したれば、藤吉の手一つにて生長し、十四五歳の時より剝身賣となり、早朝より深川蛤町にゆきて蛤を仕入れ剝身となして市中を賣り歩き孝養怠りなかりしより、時の町奉行より青銅五貫文を下賜されし事ありき。此の血脈を受けし市五郎なれば、其の父に孝養を怠らざるは遺傳とも云ふべく、妻も矢張り良人の行爲

に傚ひ、舅に孝養を盡し居れりとぞ。

●名所の櫻　上野清水堂の畔にありし彼の秋色櫻は去年枯れて、その俤を僅に根方に留めしは遺憾なれど、寒松院櫻こそは名に著き老樹なればまた春めきわたり、其他向島、靖國神社、日枝神社、紀尾井坂、小石川江戸川の畔、四つ谷見附外等の櫻は人も知る所ながら、多くは八重咲のものなればなほ早かるべし。小石川傳通院前元學寮内にある老樹の櫻は、都下第一の大樹といふべき者にて、曾て徳川三代將軍の遺愛の櫻なるよし口碑に傳へられたるが、文化文政年代には文人墨客のこの學寮に於て盛んに詩歌の會を催し、明治維新後は大沼沈山翁など年々例會を此樹下に開きしとぞ。澁谷金王神社境内にある金王櫻はかの澁谷金王丸が手植の櫻と稱すれど、樹幹小にして同時代のものとも思はれざるが、花を賞するの外樹下に建てる文碑など觀て、昔時を追懷するも一興なるべく、こは澁谷停車塲を去る僅かに二三丁の近距離の事とて、春暖の候、郊外散策を兼ぬるも興多




からん、近縣にては埼玉縣の大宮公園、同縣熊谷堤の櫻も近年客を迎ふる爲め掛茶屋等の便利もあれば、滊車を利用して一日の遊び塲所には殊に妙

なり。又同縣鴻巣在浦の冠者の古跡なる浦櫻また老樹の有名なるもの、而かも八重咲なれば少し時後るべく、其他仲仙道は殊に沿道にては浦和在與野町の公園なる櫻花、近年又花見の人多し、川越町喜多院の奥庭に在る老樹は、東照公遺愛の櫻にて、天海僧正に賜りしものにて頗る名高し。且つ同院境内にはこの老樹のみならず、境内到る處に櫻樹多く近縣花見場所の一に數へられ居れる由。

●好學園と寄宿舍の設置　帝國教育會の千田時次郎氏は近時都下の女學生中、親戚知己の家に寄寓し、又は自炊等と稱し甚しきは下宿屋に起臥して女子に有まじき自儘の生活を營めるもの鮮からざるを憂ひ、今般成瀨女子大學校長巖本明治女學校長、三輪田女史、松村介石、島田三郎の諸氏の贊助により麹町三番町六十六番地に好學園と稱する家庭的の女塾を設け此等の女子を收容し諸學校に通學せしむる傍ら園内にありて家政的訓練を與へ且つ夜間教育兒童心理、實踐倫理家事衛生等に關する講話をなすとぞ。

●露國婦人の禁酒運動　露都聖彼得堡の婦人社會にては、亞爾個保兒含有飲料の需用日を逐ふて盛んなるを憂ひ、之が矯正せん目的にて、一種の禁酒會を組織したる由なるが、會員は固より絶對の禁酒家にして、彼等は少しにても飲酒の嗜好ある男子とは一切交際せざることの誓約を定めたりといふ

●空中航行電氣船　伊國農商務省官吏、フエローシは、此程電氣を用ゐて空中を航行する船を發明したりと。輕氣球の部分は、アルミニユムと絹布とを以て、船は全部アルミニユムを以て造りたるものにして、危急の場合には水上を航行し得る仕掛を有す、氏は已に英國及び獨逸に於て特許を得目下英國の資本家と交渉中なる由。

●英帝國內の國語の數●●●●●●●●●　英帝國內にて話さるゝ國語の種類は總て二百四種ありて、其內八十五種は亞細亞、五十八種は阿非利加、三十種は濠洲に屬すと云へり。

●マルコニの美德●●●●●　無線電信の發明者マルコニは、年齡僅に三十歲に過ぎず、然も此の如き偉大ある成功を爲したるのみならず、多くの電氣學の大家をして、自家の說を信ぜしめ得たるは、世人の驚嘆する所にして、氏の性格之をして然らしめたるなりと云ふ。英國の電氣學雜誌は記して曰く、マルコニの名世に知られてより已に五年を經過したれども、其間マルコニは曾て一回も豫じめ自身の計畫を告げたることなく、世人は常に其成功を聞き始めて、氏が如何なる計畫を爲しつゝありしかを知りたるなり。此事は世人が氏に大なる信用を與ふる所以にして、氏がセジントジヨンスより通信を爲し得たるとき、氏は此の性格なかりせば、何人も之を信ぜざりしならん。當時タムソン敎授は、其成功を疑ひたる新聞記者の問に答へて「余はマルコニが之を爲したりと云はゞ、必ず之を成したるならんと信ずと云ひ、エヂソンも亦新聞記者に答へて「マルコニの性質を知らざりしならば、其言を疑ひたるやも知れず」と云へり、實に氏の成功は、氏の美德が與へたる適當なる賞品なりといふ。

●六萬の婦人選擧權を求む●●●●●●●●●　英國ランカシヤイアヨークシヤイア及びチエシアイアの工女六萬六千八百人は二月請願書を同國議會に提出し、工業上の生存競爭に身を委ね居る女子は、選擧權を得るに痛切の必要ありとし、女子に選擧權を與へられんことを要求したり、勞働者同盟は此請願に賛成し居り、議會が女子に選擧權を與ふるまでは、飽

迄之を議會に迫るべしといふ。

●清國西太后英語を學ぶ　清國西太后は近來英語の必要を感せられ、清國婦人にして英語を解するものを求め居られしが、此程元駐清獨國公使の妾たりしサイチユンヒユアと云ふを、英語教師に聘せられたりとぞ。

## 落葉籠

▲私は用文書で、なりたけ高尚の本を求めたいので御座りますがどなた樣の著したのが宜しいか、皆樣にお尋ね致します。（埼玉縣關口しづ子投）

▲東京慈惠病院の所在地と、同院に勤務して居らつしやいました鈴木菊子樣の御住居を委しくおをしへ下さいまし、（田舍の某女投）

▲前號の家庭小説ひめもゝは誠に面白く讀みました、妾は女鑑が産れて此方の好小説と思ひます、今後はどうぞ斯る面白いのばかりを願ひます。（大阪難波江女史投）



▲前號に見えました長門とき子さんの投書にかゝる方語の中で、他は何れも日本一般の俚諺で解りますが唯一つ「女の口が過ぎて牛の價がさがつた」といふ事は如何なる意味か解かりません、何卒御

敎示下さいまし、（水戸春日井のぶ子投）

▲越後は非常に奢侈な所でありますからその尋常師範學校では女學生の服裝風俗等の奢侈を嚴禁して、第一顔へ白粉を塗る事を禁じましたら、父兄がそんなお學校へ娘を入れて置く事は出來ぬとて退校願を出した者が澤山あつたさうです、何と呆れた話ではございませんか、又女子が産れると金になるとて、お祝の餅を搗く處があるさうですが果してそんなでございますか、其方の御方へ御尋ね申します、（南海、磯子）

▲電話といふものは、相互の談話を交換手は聞く事が出來得るやうに造られて居るものですか、伺ひます、（京都文山とり女）

▲流行の花見小袖といふものを見て、東京の令孃といはれるお方々の贅澤には驚きました、妾等如き田舍少女には名さへ分らぬ物が澤山でございます女はそんなにお飾りしなくてはならぬものでございませうか、（弘前山本くめ女）

▲どうも世の中は奢侈に流れて困ります、東京は殊に致し方がございません成るべく質素にされたいものであります、（係記者）

▲妾の宅では毎日新聞を取つて居りますが、鑛毒地慘狀には誠に驚きました、政府は如何して棄てゝ置きませう餘りあはれに感じましたから、日日の暮しを省いて少々の義捐を致しました、皆樣も日々のお小使錢を節儉なされて、彼等餓ゑに叫ぶ多くの同胞に、一握のお惠みを與へられては如何でございます、（横濱愛讀女子）

▲妾の父は嚴粛で新聞を見せません、そのかはり女鑑は見せます、御誌の發行は前に時々おくれましたが此頃はおくれませんで嬉しう存じます、（東京某女）

# 女鑑歌文月次兼題

四月廿日　歌　月前花　二月九日〆切
　　　　　文　菫の花を友に送る文　四月廿四日〆切

五月五日　歌　鏡
　　　　　文　暮春の賦　五月九日〆切

五月廿日　歌　新樹
　　　　　文　出産を賀する文

懸賞

天には三册（一月半分）地には二册（一月分）人には一册を贈呈す

## ●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き様、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。
○兼題を天地人の三才に分つ

# わきが（腋臭症）根治確證藥の新發見！

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば誓つて**根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらんことを乞ふ

**專賣** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

# 血塊月やく 忽ち下る確證新藥

本劑（調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月閉滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付**妊娠**の服用を嚴禁すもし姙婦服藥せば**即座に流產**するを以てなり元より本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に着目し購求あらんことを乞ふ

**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

大林弘一郎先生著

# 中等國文學史

全一冊
洋裝美本
定價金六拾錢
郵税金八錢

従來國文學史の教科書として出版せらるゝものを見るに多くは評論の高尚に過ぎて授業者には其の要を知るに難からしむるものあり又或は引例の歌文も奇古にして解し難きものあり或は其の材料の非常に煩多にして文部省規定の時間内に教授し了ることと能はざるものあり此等の事項は教科書としては其の教授上に少からざる不便と困難とを感ずる所にして實際之が任に當る各學校教員諸氏の均しく遺憾とせらるゝ所なり本書は著者が多年の研究より得たる考察を本とし之を實地の教授に徴し時間の配當材料の難易多少等に充分の調査を加へ其記述の體裁に至りては最簡明を主とし議論の高尚に失せざらんことを務め語調の流暢にして誦讀に便ならんことを期り大に注意を加へたるものなれば中等諸學校に於ての教科書として適當なるは固より言を待たず。

『本書の特色』殊に附錄として一の年表を附し之れによりて時代文學の發達沿革其の他を一目の下に見ることを得しめ又國文學に關係最深き漢文學の變遷を知らしめん爲特に歷代の漢詩文を蒐集して附錄の第二としたるは本書の特色とする所あり國語教育の任に當らるゝ諸彦幸に一覽を辱うし本書の其眞價を認められば乞ふ教科書として採定の榮を賜らんことを

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社出版部

落合直文先生著

●最新刊●

# 女子の雅文教範

有名の國文家落合先生多年教授上の經驗に徴し、容易に雅文美文を書き習はしめむとて著はされたる此書、上卷は最も丁寧に其作法を說明し、主として、實地の應用を示したり●下卷は之を春夏秋冬の部に分ち、殊に詞藻を豐富ならしめ、用意に、一々類語を示しさて後に、作例を掲げたる等、最も懇切なり、故に此書專ら女子用とせしも、雅文を研究するに於て男子も亦必讀の書なる事は、見む人之を知らむ。

和装美製 全二冊 正價 金七十錢 郵税十錢

發行所 日本橋區通一 電本四一四番 大倉書店
京橋區銀座二丁目 電話新橋一七三三番 服部書店

---

第拾版

# 女子の本分

中川十洲翁序 三輪田眞佐子著

金銀摺彩色表紙大和綴優美

定價金二十五錢
郵税金六錢
郵券代用一割増

曩に三輪田刀自我邦女子道德の頽敗に赴き日に甚しきを慨し本邦固有の道德に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや意外の好評を博し印刷成るや忽ちにして賣盡せり女子教育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や時廿世紀に入り國運日に進み益女德を涵養し貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むへ切なり、本社曩に女史の訂正を乞ひて拾版を發賣す冀くは世の婦女達の一讀を望む

發行所 東京京橋區築地二丁目 電話新橋二七七九番 株式會社 國光社出版部

山崎忠和著

（彩色精版口繪並に挿畫入）

# 文久物語

## 一名寺田屋騷動

洋裝全壹冊
定價金貳拾八錢
郵税金六錢

**寺田屋騷動**の名は維新史中の**悲劇**として世人之を知るも其眞事實に至つては今猶**秘密の間に伏在**せり此書當年の事蹟を記すること極めて精確にして**隱微を發き秘密を明にし**彼の奇傑田中河内が同志清川八郎と僞錦旗の下に天下の大諸侯を翻弄したる機變百出の壯圖を始めとし其間島津久光西郷隆盛眞木和泉平野二郎等諸豪の活躍するあり正に是れ**維新史中の花**として**絶壯絶慘**を極むるの狀髣髴として目睹するが如くならん宜なり本書一度出でゝ世評の嘖々たるや試に都下新聞の批評を左に掲げて以て其一斑を示さん

●●●（東京日々）　浩瀚ある史料より其粹を拔き能く錯雜せる事實を明瞭に記載せり田中河内介清川八郎等の浪士が倒幕の謀議を叙するに當時志士が往復したる書簡の字句を以て其儘問答を試みたる如き直に當時の志士に面して革命の大激論を聞くの感あり

●●●（萬朝報）　著者山崎氏は十年間久邇宮邸に在り同前宮の事蹟調査の際其秘錄密記の中より王權維新胚胎の原素を咀嚼し終に此の物語を刊行するに至れり專ら寺田屋騷動を經となし傍ら當時の志士慷慨家の言行を緯とし世に知られざるの秘密を摘發したるもの少なからず（後略）

●●●（讀賣新聞）　伏見寺田屋騷動の顛末を詳叙したるもの材料精確にして行文眞率未だ世に現はれざる事蹟を擧げて當時の情狀を發揮したり云々

發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社出版部

肝付海軍少將題辭　木村海軍大尉校閲
小笠原海軍大佐序文及作歌
伊東海軍大將手翰
西　主一
野本衛佐美　合著

訂正第三版

# 新案 海軍遊戲法

（一）日本は海國なり故に兒童の時より海軍思想を養成せざる可らず
（二）兒童は身体發達の旺盛なる時期なり故育に最も体に重きを措かざる可らず
（三）兒童は興味を感ずる事甚しきものなり故に機に應じて其快樂を正情に導かざる可らず

菊版美本
詳圖入
全一冊

定價金貳拾錢
郵税金四錢

本書は右三者の目的を達する一助として著者が多年或は兵書に徴し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて裘葛を費し漸編成したるものなり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神忽ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に艤し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かざる事刮目企足して俟つべき也、世の敎育家父兄諸士の猛省を促す、

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社 國光社出版部
發賣元

# 堀内新泉子著

# 家庭讀本

大和綴美本 全四冊 定價各拾六錢 郵稅各四錢

目下淫猥なる小説の盛に行はるゝを憂て昨春以來專ら本書の著述に沈吟斷腸せし堀内新泉子の家庭讀本は今や全部完結せり子が着想の如何に高潔多趣味にして其着筆の穩斷優雅なるかは既に讀者の熟知せらるゝ所なれば今又此に何をか云はん本書の世に出づるや近來の出版物中實に稀有なる世の賞讚を得たり家庭の讀本として學校の賞與品として續々購求の榮を賜はらんことを

## 全部四卷目次

### 春之卷

(一)古稀賀 (二)自愛 (三)老船長 (四)花ちる里 (五)をもちや (六)御國の風俗 (七)母の面影 (八)初旅 (九)おぼろ月夜

### 秋之卷

(一)秋の旅 (二)ゆく秋 (三)雁がね (四)十三夜 (五)千草百草 (六)虫のね (七)紅葉狩 (八)かくれ家 (九)暮れの鐘

### 夏之卷

(一)庭の若葉 (二)螢狩 (三)游泳の名人 (四)雨後の月 (五)蚊やり火 (六)姫百合 (七)夕すゞみ (八)夕立 (九)撫子

### 冬之卷

(一)初時雨 (二)木枯 (三)霜の夜 (四)冬の月 (五)雪の日 (六)寒紅梅 (六)うづみ火 (八)水鳥 (九)歳の暮

◎東宮御慶事の記 附皇孫御降誕の記 横川同天護編 美本 定價金卅五錢 郵稅金四錢

◎土佐の長平漂流談 北村重敬著 定價拾六錢 郵稅四錢

◎發行所 東京市神田區小川町九番地 (電話本局二四二〇番) 開發社

●近刊豫告●